
とある科学の未元物質

カラミティ・クラウド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の末元物質

【Nコード】

N0069P

【作者名】

カラムティ・クラウド

【あらすじ】

死因・不明

死亡日時・不明

地球そのものが概念化した存在・ガイアにより他世界に送られた主人公。

新たな生を楽しむと決めたところで、自身が学園都市に捨てられてしまった。

『垣根帝督』となり主人公は学園都市の闇を闊歩する。

自身の変革への苦悩、葛藤を無意識に押さえ込み、彼は行く。

魔術結社による襲撃、裏切り、第三次世界大戦、概念生物

概念を操作する垣根帝督の前に立ちはだかる最大の壁、それは『概念』であつた。

感想・批評等いただければ幸いです。

また現在一話より修正を行っています。

最新話の投稿は遅れると思いますがご了承ください。

プロローグ「世界」 改訂済み（前書き）

この小説は転生&主人公がかなり強いです
そういういわゆる『最低』系がキライな方は戻るボタンをお願いします

プロローグ「世界」 改訂済み

目を開けていられないほどのまぶしさ。

それが私の、この場への感想だった。

完全なる未知、未だ知らぬ場。目を開けずともわかるこの場の異常性。何故、私はこのような場にいるのか。

さあ、思い出そう、私の物語を。

いつも通りに帰宅して、いつも通りパソコンを起動する。

そしていつもどおり、なんの意味もなく論文とも呼べないような論文を作る。

『概念』

いわく、幻想だとか法則だとか、いろいろな言い方はされども要はこの一言で片付くだろう。

物事の概要であり、物事の真理である、概念。存在そのものの法則を決定付ける、いわばルールのようなものだ。

たとえば君は『林檎』という単語を聞いた場合様々なものを思い浮かべるだろう。

いわく『赤い』や『甘い』など、とにかく『林檎』という言葉に対してのイメージが浮かんだはずだ。

そして、それら総てが概念だといえる。

『林檎』という存在の観測情報、と言い換えてもいい。

我々の住むこの世界はそれら総てが『情報』と置き換えることができることは知っているだろうか。

『我々の世界』というものが我々である『人間』により定義されており、つまり『我々の世界』とは『我々』である『人間』の観測によって決定付けられる。

たとえば君は『林檎』という言葉聞いた時『黒い』とは思わなかったらう？

無論、思ったものもいるかもしれないが生憎『黒い』林檎を、私は観測したことがないのでわからない。

つまり、知らない。それは私の世界に存在しない、ということだ。

故に、我々の世界とは我々の観測により成り立ち、そして概念とは我々の観測する情報そのもの。

だから、私はこの『概念』を研究している。

存在を決定付けるモノであり、我々の世界を左右するモノ。

つまりこの概念を解明すれば、世界の真理がわかるのだから。

本当ならばこの講義を続けたいところではあるのだが、回想中であるので割愛する。

閑話休題

さて、私は帰宅し、いつものようにパソコンを起動したはずだ。

そしていつもどおり、なんの意味ももたない自己満足をして、ベッドに飛び込む。

そして眠り、意識したらこの場にいた。

なら、これは夢だろうか？ ならばやけにリアルな夢だ、まぶしさを感じ、さらに身体にまとわりつくような何かを感じるのだから。

「いいや、違うよ」

不意に 声が響く。

幼い。そう、幼いという表現がもっとも合っているだろう。

よく響く、だが不快ではない声が、この場に響いた。

「誰だ？」

ここは未知、であるからにして未知の存在である、と決定付けるのは早計だとは自分でも思ってはいるがそう期待せずにはいられなかった。

「うん？ 僕かい？ 僕の名前はガイアだ」

ガイア？ はて、ガイア、とはまた要領を得ない名である。

ガイア、英語で大地を意味する言葉。

また、ガイア理論、というものも存在する。

ガイア理論ならば私もよく知っていた。

ガイア理論、それは地球という存在を『巨大な生物』であると仮定する理論。

それは元々科学であり、地球における現象を科学的に分析した場合、生物のような自己調節を行っているという現代科学という認識から見れば眉唾ものの理論とすら呼べない理論である。

だが、こと『概念』という面から見れば、また違う見方ができるのだ。

先程の『林檎』と同じように、『地球』という言葉から何かをイメージしてみるといい。

さて、君はどんなイメージが出来たかね？

いろいろなイメージが浮かんだであろうが、その道の専門家ではないものには曖昧な、漠然としたイメージしか浮かばないだろう。

『大きい』『青い』、はたまた『母』と答えるような詩的な者も、いるかもしれない。

だが、『地球』と聞いて明確なイメージを持つ者は少ない。

なぜか？ それは単純に我々には観測しきれぬモノだから、であると云える。

『大きい』とイメージした君は、地球の大きさを脳裏に思い浮かべることができるか？

はたまた『青い』とイメージした君は、果たして青い地球を自身で観測したことがあるか？

ここでない、と答えた君、安心したまえ、概念を決めるうちでもっ

とも重要な『常識』を君達は持っているといえる。

さて我々の世界、とは我々が観測して生まれるものだということはもうわかっていただけだと思うが、では君は地球を観測できるか？そこで地面を見る者には、悪いが『概念』を研究することは無理だろう。

いや、そもそもそんなモノ研究しないほうがいいのだが。

話を戻そう。君は地球という言葉に明確なイメージを持ったか？

持たないだろう？

まあ、『林檎』という言葉に『赤い』や『甘い』とのイメージを持てる者には、持てないだろう。

だがそれでいい、『林檎』という明確なモノに対し明確なイメージを持てるならそれは健常である証だ、誇りたまえ。

そして、『林檎』という明確なモノに対して明確なイメージを持てる君達　すなわち健常者は『地球』といういわば曖昧なモノに対して曖昧なイメージを持つことが出来る。

そして、先程さわり程度に話したが『概念』とは『常識』に　人間、つまり観測者達の共通認識により決定される。

たとえば百万の人がいたとしよう、そしてそのうちの一人を除いたすべての人々が『林檎』は『黒い』と観測、認識したとする。

彼らは異常だ、黒いはずはないのだから。

故に一人だけは『林檎』は『赤い』と認識している。

だが、この場合『林檎』の概念は『黒い』になってしまうのだ。

もうわかるとは思うが、観測者達の大多数が『林檎』は『黒い』と観測したために、『林檎』は『黒く』なるだろう。……黒い林檎がどんなものかは知らないが。

なぜなら、我々の世界もまた、大多数の我々の観測により決定付けられる『世界』であるのだから。

ならば、大多数の観測者が『曖昧』に思う地球とは、一体どんな概念を持っている？

『曖昧』という概念を持っているのだ。

大多数の観測者が、大多数の認識において『曖昧』と定義付ける地球とは『曖昧』な存在である。

そして『曖昧』ということは、数多の可能性を秘めていると云っている。

そう、それは新たな何かを生み出すほどの、可能性すら秘めている。

「うん？ ああ、君達が作り上げた僕の偶像かい？ うん、たしかに僕はそのガイア理論から生まれたモノだよ」

ああ、やはり。

曖昧な『ガイア』より生まれし者。

曖昧な概念より生まれし者。

私が定義し、私が生み出した言葉。

私が産み出した概念。

少数である私が、私の世界にのみ適用した概念。

すなわち 概念生物。

『概念生物』

存在の真理であり法則である『概念』より産み出された存在、とても思えばいい。

例えるならば人の恐怖という認識により産み出された『妖』や人々の救いを求める心により産み出された『神』

大多数の人々により肯定され、大多数の認識を受け産み出される生きた概念。

人々に求められ、忌みられ、生まれる存在。

世界に存在する矛盾を解決する、修正力。

世界はわずかな認識で崩れてしまう。たとえば大多数の人間が世界は破滅すると認識してしまえば世界は破滅してしまう。

それを防ぐために世界は『善なる神』を作り出し希望を与えた。

だが『善なる神』の存在を知った人々は神の了解を得たと錯覚してしまった。

故に世界は『邪なる神』を産み出した。

このようにして世界はいつでも世界を護るために概念生物を産み出してきた。

そして目の前の存在がガイア理論から産まれたならば、この存在は地球そのものの概念生物。

すなわち

「貴方が、神か」

かつて世界を創造したとされる神々の一柱。

世界の土台にして、母なる大地。

ガイア。

「うん、僕は神の一つ。ガイアを守りガイアを維持するガイアそのもの」

世界は矛盾を許容しない。

世界のあり方を決めるのは概念であり、絶対に矛盾してはならない、であるに関わらず人間たちの認識により変わってしまう。

故に、産み出される修正力の、一柱。

すなわち概念生物とは、世界を修正 概念の改変ができる。

だからこそ彼らは『神』と崇められ『悪魔』と恐れられてきたのだ。

そして、目の前の存在はガイア つまりは神なのだ。

そして、その神が 『修正力』がいるということは

「私は、世界の法に触れてしまったのだな？」

そう、だからこそ目の前の存在はここに在る。

私がいも概念生物などという情報を作り出さなければ、目の前の存在はいないし世界もまた存在しない。

その場合、概念生物というものが産まれずとも安定する世界になるだろう。

つまり 私が概念生物を産み出し、世界から消えるのもまた、予定調和なのだ。

「うん、そうだよ。君が世界を作り出し、そして世界から消えるのは総て予定調和だ」

ああ、そうか、私の理論は

「間違っていないかったんだな」

総てを終えたような歓喜に包まれた私に、ガイアは呆れたようなため息をつきながら云う。

「間違っていないかった、というより間違えないことそのものが間違いないんだけどね」

「……ふむ、たしかに」

そもそも私が概念生物などを産み出さなければ、観測しようとしなければ、情報を生みださなければ私はあの苦悶を味わうこともなかったのだろっし。

そう、世界は予定調和なのだ。

かつてある哲学者の提唱したものに、永劫回帰というものがある。

私はその理論を独自に改訂し、似て非なる理論を生み出した。そしてその瞬間に世界は産まれたのだろっし。

なぜだかはわからない、だが目の前の存在がそれを証明しているのだから、そうなのだ。

つまり、いま私がいる世界を作り出したのは私であり、そしてここで私が消えねば世界は矛盾を孕んで消滅する、だから目の前の存在が私の前にあらわれた。

私が産みだした理論、永劫回帰型平行世界理論。世界はある一点ではじまり、その時点であらゆる世界が生まれそれらは平行世界となり、それらの世界は一本道にまっすぐ進んでいき最期にはある一点にすべてが集約される、永劫回帰。

たとえば明日のことが予測できるか？ と聞かれればできないとし

か答えられないだろう。

なぜなら明日、とは今日の自分にとっては未来であり未だ来ぬもの、未だ知らぬもの、すなわち未知なのだから当然である。

だが、明後日の段階では明日とは昨日ということになるためそれは過ぎ去ったものであり、既に知ったもの、すなわち既知なのだから当然だ。

ならば、未来とは既に決定しているのではないかと、私はおぞましい結論を導き足した。

導き出した　否、導き出してしまった。

たとえば世界の終わりのその瞬間、過ぎ去ったもの、私達にとっての未来は、終わりの瞬間には過去でしかない。

すなわち、世界には選択肢は存在せず歴史はあらかじめ決められているのだ。

故にこそ、永劫回帰。世界が滅んだとしてもこの世界にある存在の総量は変わらない、だからこそまた同じ世界が作り上げられ、そしてまた同じように滅ぶ。

「君がこの世界を産み出した、そこまではいい。だけどこの世界の根幹をなす君は未来でこの世界を消そうとしてしまう。だから僕が君を消しに来たのさ」

そして、その世界を産み出した私が、この世界を消滅させようとするのだろう。だから目の前の存在は私をこの世界から消そうとした。だが、私がこの理論を産み出す前に消してしまえばこの世界は存在してないことになってしまい因果が矛盾する。だから私が消えても問題ない時に消す。

論理的かつ機械的な処理だ、と私は思った。

だが、私がこの理論を産み出したのはだいぶ前である、そこを問えばガイアはこう云った。

「僕らはなにも自由に世界に干渉できるわけじゃない。修正を加えるべき理由がないままに世界に干渉しては僕ら自身が修正の対象に

なってしまうからね。それは矛盾だろう？」

なるほど、道理である。

彼ら修正力は絶大な力を持つ。だが絶大な力を持つが故に、そうそう簡単にその力を行使してはならないのだ。

その絶大な、絶大すぎる力は少し行使しただけでも世界に影響を与えるのだから。

「では、なんだ？ 私は一体なにをした？」

「いいや、君自身はなにもしないよ。ただ、僕という存在が君という存在に、耐えられなくなっただけ」

ああ、なるほど。

「私の因果が重すぎた、のか？」

そういうと、ガイアは微笑して、云う。

「本当に、君は頭がいいんだね。少し良すぎるくらいもあるけど、おおむねその通り」

目を閉じて、幼子の姿で、ガイアは云う。

「君という存在が持つ因果が僕の“世界”に歪みを生み出しちゃってね、いろいろ大変だったんだ。まあ、そのおかげで君をこの世界から排除できるのだけれど……」

「それもまた、予定調和なのだろうな」

私という存在が生まれ、世界という存在が生まれ、地球の“世界”に歪みを生み出し、世界から排除されるのは、おそらく最初から決定していたのだ。

時系列で並べるなら世界、私、歪みの順で生まれているのだろうが、生憎世界を生み出す現象に時間は関係ない。

だが、もし本当に予定調和ならば、それは私にとっては救いになるとも、云えるのだ。

……例えば、自身の一生が予定調和だと、心の奥底から認識してしまったとする。

まず、間違いなく認識したものは絶望するだろう。

なぜならソレは自身の過ちですら予定調和でありどうともしがたく

覆しがたいものであると、決定してしまうのだから。

私は　俺はそれに耐えられなかった。

だからこの世界を憎んだ、だが私が世界を憎んでしまい、世界を本気で排除しようとすれば出来てしまふ。だから修正力が動き、私を消しにきたのだろう。

だが、私という存在そのものを消すことはできないのだ。

なぜなら、彼ら修正力の力は絶大、それは人一人消そうとすれば、その存在の総てが消されるということになる。

そうなればこの世界すらも消えるのだ、私という存在の歴史が消えるということなのだから。

これを避けるためにはただ一つ、すでに安定した世界へ私という存在を移すしかないのだ。

安定した世界とはようは固定化されている世界　つまり既に観測されている世界のことである。

故に、私は聞いた。それが本当に私の救いとなるか否かを聞くために。

「それで、私はどのような世界に行く」

こちらの問いに、ガイアは虚を突かれたような顔をした後、また微笑んだ。

「そこまで把握されてるとはね……君が世界を作り出した、ということがよくわかる。んーどんな世界か、って？　そりゃあ、永劫回帰のしていない、一定数以上の観測者達に観測されている世界だよ……　なんと、それが本当ならばどんなに私への救いなのだろうか。だが、疑ってしまうのもまた自然。

「……本当に永劫回帰しない世界なのか？」

「うん、世界自体に観測者がいない世界　下位被観測世界だからね」

下位被観測世界？　それは初耳だった。

なにせ私が知れるのはあくまで私が作ったこの世界のみ。

「下位被観測世界？」

「うん、僕達の今いる世界は観測世界っていうんだけど、これは僕達が僕達自身の観測により成り立たせている世界だ」

世界は観測により成立しているから観測世界、というのだろう。

「でも下位被観測世界は違う。下位被観測世界は観測世界からの観測により成り立つ世界」

「……つまり、一般にいわれる物語の世界？」

「そう、その通り」

いわゆる小説、ゲーム、アニメといった世界のこと、と認識すればいいのだろう。

これらの世界は作者と読者により成立する。世界の創造者を作者とし世界の観測者を読者とする。

無論、その世界を観測して読者が受ける認識は千差万別、個々人の感性により変わってくるがそれでも根本の認識は変わらない。

いわゆる、設定というものだ。

「だが、本当にそんなことが可能なのか？」

「簡単さ、下位被観測世界は介入が容易だし、介入すれば新たな下位被観測世界として生まれかわるからね、いわゆる二次創作とか」

「なるほど、だが、それならばその世界で起きることも予定調和ではないのか？」

下位被観測世界とは物語の世界。物語の世界は一概に云っていわゆる盛り上がりというものが必要になってくる。

故に、ある種の予定調和になるのではないかと私は危惧していた。

「ううん、違うよ。なぜなら下位被観測世界に観測世界の存在を介入させると、観測世界から来訪者の観測により介入が可能になる」

「……それは、つまり私の根本にある認識により世界を変えられる、ということか？」

「その通り、いまの時点で君の根本にある世界への認識はまだ永劫回帰世界だけど、そこは僕の力で作り変えるから安心するといい。

それに、向こうに行けばわかるけど君はどうしたって概念に踊らさ

れることはなくなるしね」

？ 概念に踊らされなくなる、つまり世界に絶望しなくていい、ということだが意味がわからない。

だが、まあ目の前の存在がいうならたしかなのだろう。

なにせ、いまこの瞬間にだって、世界は私の些事加減で変わってしまいかもしれないのだ。

「まあ、君は安心してくれていい。僕は詐欺師ではなく修正者、君の存在をどこかに移せればそれで問題ない。いっそ消すほうが楽っちゃ楽だけど、そんなことすれば世界も消滅しちゃうしね」

自身の消滅、それがならぬことはすでに知っている。

「そうか……ようやく、私は解放されるのだな」

そう私が云うと、ガイアは苦笑して、云う。

「まったく、さすがだね。自身がどこかに送られるというのに、そんな風に達観してられるなんて」

規格外も規格外の存在にそう云われ、私は苦笑を返しながら、もうすでにどこかへ送られている途中なのだろう、朦朧とした意識の中で返答する。

「当然だろう。なにせ私は」

世界と、君の親なのだから

つい先程まで男がいた場所を見つめ、幼子の姿をした神は苦笑する。

「まったく、変な人もいたものだ」

どこかすっきりした顔で、神は笑う。

「あれが僕の親、か」

プロローグ「世界」 改訂済み（後書き）

いろいろと謎が多いのはご愛嬌。

伏線もはりすぎるのはダメと知っているのですがどうしてもはって
しまう……

第一話「学園都市へようこそ」

なんてこった

俺は転生していた

ごくごく普通の一般家庭でごくごく普通の両親で

ごくごく普通に生きて永劫回帰もせずに死のうと思っていた

そう、思っていたのだ

なのに

「ふむ、学園都市、ねえ」

ここまでくれば気づいてしまう

俺の名前が『垣根帝督』でなおかつ俺が『学園都市』に捨てられた

「いや、まあ一応まだ捨てられたわけではないんだがな」

だが確定的だろう

うちはお世辞にも裕福とは言えなかったし

だけど

「まさか禁書の世界とはなあ・・・」

俺は概念をまとめあげるためさまざまな本を読んでいた

どんなジャンルであろうと、だ

平行世界、根源、魔術、科学、天使、悪魔、クトゥルーなど

他者の考えがそのまま現れる本というのは俺にひらめきをあたえ

若かりし頃の光を思い出させてくれた

ようはただのオタクである。

しかし

「禁書でなおかつ垣根帝督か・・・」

まあたしかに個人的にもっとも好きなキャラの部類である

まずその能力が個人的にもっとも興味深かった

あれ？この好きは研究対象としてなのか？

ま、まあいい

そんなこんなでまだ十歳のころ置き去りにされた俺はあからさまに
科学者としが見えない男につれてかれた

そういうわけで現在俺は研究所にいる

よくもまああんなにも非人道的な研究ができるものだ

薬物投与による強制暴走、死への恐怖からの能力の反射的発動
などなどいろいろやらされ

結果 研究者たちはとんでもないものを手に入れた

それは俺が十二歳のときだった

カチリと

なにかのスイッチが入ったような音がした

瞬間 世界が一変する

既存の物質ではないモノ、既存の法則を塗り替えるモノ

そして

誰にも認識できず、誰にも元を辿れない物質

それは

俺の認識を受けてその性質を変化させるモノ

未だ現れぬ物質、永遠に見つからない闇の物質

俺は図らずも、最強の矛を手に入れてしまったのだった。

「所長！これは大発見ですよ！」

一人の若い研究者が歓喜する

「おお！そうだとコレは、我々は！」

そうだ、そうとも！！

「我々は！超能力者を作り出したのだ！！」

狂気乱舞、としか言えない様相だった

それはそうだろう

未だ3人しか見つけられていない超能力者を自らが生み出したのだから

それは科学史に残る超能力者七人の発見の一つである

研究者達が狂喜乱舞しているころその渦中の彼はと言つと

「暇だな」

暇を持て余していた

先ほどの能力測定は終わりいまは自室に戻っている垣根帝督
研究者達の狂喜乱舞の様子を未元物質で鑑賞しながら呟いた

「気持ち悪い」

大の大人が抱き合つて涙を流して騒いでる
みっともないものである

「まったく・・・学者たるならもつすこし理性を保て」

前世では似非学者だった彼である、もつとも内容は学者というより

ただの変人だが

彼らの騒ぎようにおおかた意味のない同属嫌悪を抱いているのだろう
そんな風にバカみたいなことを考えている垣根のところへ

「なにをぶつぶつばやいているの、帝督」

一人の少女が話しかける

顔立ちは日本人だが何故か髪が金の少女だ

整った容姿にこの研究所では子供達にもそこそこお金がいるため
綺麗なドレスを着ている

「うん？ああ、大淫婦^{バヒロン}か」

帝督が彼女をそう呼ぶと彼女は

「もう、その呼び方はやめなさいといつも言っているでしょう？」

私の名前は黒川梓^{クロカワアズサ}よ」

そう、梓が言うと

「ふん、誰がそんな名前で呼ぶか

俺から見たらてめえはただの売春婦だ

わかるか？まったく、8歳のガキのクセしてよくもまああんな・・・

」

そういつて彼女との初の邂逅を思い出す

半年前だ

どうも新しいモルモットが入ってきたので俺と同室にさせるらしいと科学者は言っていた

つまり、だ

それだけ期待されているやつが来るということである

実際彼女は十分に十全に自らの能力を引き出しいまや大能力者

能力自体も非常に強力なため期待されていた

ではなぜ期待されているやつが俺の部屋に来るかと言えば

そのときの俺のレベルが大能力者相当だったからだ

それも超能力者への進化がもつとも確率的に高い者

そんな奴と同室にさせるのは無論期待が出来る者のみだ

なぜならば高い能力を持つものはそれだけで強いAIM拡散力場を発生する

それは他者へ影響を与え影響を受けたものは変化が出やすくなるのだ

まあこの手の知識も全てこの研究所での授業の成果なのだが・・・

そして俺はその新入りになんの感慨も持たなかった

実際に顔を見るまでは

そう、女だ、女なのだ!!!

「おい・・・新入りは女だったのか？」

俺は研究者に確認する

「あれ？言ってなかったか？」

言ってねえよ、聞いてねえよ、微塵も知らなかったよ!!

「おいおい・・・こいつは一体なんの冗談だ？」

俺に小娘のお守りしろってか？よしてくれよ

ブチ犯しちまうぞ？」

俺は沸点が低い

前世ではキレたことなどないのにやはりまだ子供だからだろうか

そう、同室が女だ、女だ！

俺は女がキライだ

わかるか？諸君、俺は女が嫌いなのだ！！！！

「あら、小娘とは言ってくれるじゃない

なんなら抱く？いいわよ

あなた私の好みだし、まさか童貞でもないでしょうし」

あ？

「黙れビッチ、いいか？しゃべるなクソ

次口を開いたらテメエのその目障りなツラ穴だらけにしてやるからよ

わかったか？理解したか？理解したな、よし」

俺はそのまま研究者に向かいあい文句を言おうとしたところで

あ、あああああ！！！！！！思い出したくもない！！！！

あの、あのクソ女が・・・！！

キスしてきやがったのだ！！わかるか！？キスだ！キスだぞ！？

奴は俺を押し倒し俺に馬乗りになりながら唇を離し俺に微笑む

「うふふ、どう？私の唇のお味は

年下の美少女のお味よ？感謝なさい

処女の接吻は高いのだから」

うるせえよ味なんかしねえよむしろドロだ毒だよあと自分で美少女言うなたしかに綺麗だがそれは芸術的側面であって俺はお前みたいな女は大嫌いなんだ処女と書いてビッチと読むお前の接吻は死んでもいらなかった

いろいろ言いたいことはあつたが俺はそれらを全て飲み込み

「殺す、絶対に殺す

犯して、殺してもつかい殺してそして死体を死姦してやるからなこのクソ女アアアアアアアア！！！！！！！」

能力発動、目標は？

そんなもの問うまでもなく『^{クソビッチ}あの女』だ！！！！

俺の肩から鎌が生え俺はそれを手に取りクソ女に向かって振り下ろそうとし

「短気な男は嫌われるわよ？」

寸前、鎌が停止する

「ああ？なんだコリヤ」

鎌を持つ手が震えている

俺の心がコイツを殺すのを拒絶している

何故？何故だ？こんなクソ女なぜ 待て

こいつの顔は？日本人だ

ならコイツの髪は？染めていない金の髪

コイツの服装は？ドレスだ

まさかコイツ・・・

「精神系か・・・」

俺はかろうじてあの名前を言わずにすんだ

「あら？すごいわねこんな数瞬で気づけるなんて」

ああ、気づきたくはなかったよ

「初めまして垣根帝督、私の名前は黒川梓、精神系能力者よ別名『
メジャーハート
心理定規』」

と言っ て奴は

「これからよろしくね？帝督」

をつけるなああああああああああ！！！！！！

「で？どうしたのよ帝督」

「うるせえ話掛けるんじゃないよバビロン」

俺は回想をやめて目の前の女 梓に目を向ける

こいつの現在の能力は大能力者、そして現在は演算を安定させる段階である

「もう、帝督は相変わらずねえ」「なれなれしく俺の名前を呼ぶんじゃないー！」

俺はコイツみたいな女 いわゆる不貞な女が嫌いだ

最初に会ったとき俺と同室というからてっきり、期待だなんたのはなく単に俺に宛がわれた娼婦みたいな奴だと思ったため最初から嫌悪感全開だった

普通の女なら別にあそこまでじゃない

それでもキライだが

たとえば貞淑な女だっていずれは不貞になると俺は思っている

だから最終的にキライになるので最初から嫌っているのだ

「で？何のようだ、バビロン」

俺がそう言つと梓は

「まったく・・・その呼び方やめろっていつてるのに・・・

まあいいわ、私も実験みたいだからその報告よ」

実験、実験か

「内容は？」

うん、と一つ頷きながら梓は話した

「超能力者への発展実験だって」

「超能力者への発展実験・・・？」

俺はいぶかしみながら話を聞く

コイツ、心理定規は原作ではレベルは語られていないが少なくとも超能力者ではなかった

ならば

「うん、なんでもとにかくいろんな人間と精神を通わせ自身の『自分だけの現実』を広げさらに洗練させるとかなんとか・・・」

コイツはおそらく超能力者になれない、そして

大能力者の脳では、その実験には耐えられない

それがわかっているからこいつは俺に話したのだろう

お別れ、の言葉だったのだ

「・・・それで？俺にそれを話してどうなる？」

俺がそういと梓は

「ううん、なんでもないんだ」

ただ　話しておきたくて

そう彼女は続けて、去っていった

俺は、俺は

「死ぬとわかっている命を見捨てるのか？」

原作では生きていたが、現実の俺の予想では99%アイツは死ぬ

たぶん俺のせいだろう

俺の超能力者へのシフトは異常だったから

あまりにも早すぎたから、なのだろう

「俺は・・・」

俺は梓が嫌いだ、心のそこから

だけど、だけど・・・

思えば俺の心はまいていたのだろう

たった一人の異邦人、捨てられたことへの不安

あらゆる感情は無意識で、自分自身理解してなくて

だから梓を助けようとしたのだろう

「悪いな、研究者達」

お前らはきつところ思っている

” 同室だからと邪魔はしない ” と

常識に当てはめ考えればわかることだ

俺にアイツを助けるメリットはない

だけだなあ

「フリーがこの俺ダイクマターに常識は通用しねえ」

俺は研究所を徹底的に破壊し梓と共に逃げ出した。

第一話「学園都市へようこそ」（後書き）

はい、心理定規さんこと黒川梓さんです

名前はオリジナルなので注意してください

そして主人公は基本的に女が嫌いですwww

ゆえにハーレムなんぞならないでしょう

第二話「彼の葛藤、彼女の憧れ」

俺は背中に翼を生やし学園都市上空に居た

「・・・どこに行くの？帝督」

俺の腕には梓がいる

「・・・頼れるのは、一人しかない」

「そう・・・」

置き去りで尚且つ研究所を潰してきた俺達を匿うようなやさしい人なんて

原作知識でしかないが・・・

親船最中 そう、統括理事会において珍しい『生きるべき人間』

彼女の場所はわからない、が

俺の未元物質ならなんとかなるだろう

そうある種の確信をもって俺は飛んでいた

背中に三対の翼を生やし、二つで自らを守り、二つで月光を遮り

二つで飛翔する、それはまさに熾天使

聖書に登場こそしていないが・・・

「一応、偶像の理論は可能か・・・」

なにせ天使の九階級の頂点だ四大天使より知名度では劣るがまあいいだろう

俺がさまざまな考えを巡らしていると

「ねえ、帝督」

「貴方はどうして、私を助けたの？」

ズキリ

「ねえ、帝督」

「どうして、私を助けたの？」

そ、それは

まるで、いままであの研究所で死んできた者たちの声のようだった

” どうして私を助けてくれなかったの ”

” どうして僕を ” 私を ” 俺を ” 自分を ” 助けてくれなかったの？ ”

その通りだ、なぜ俺は彼女を助けた？

血と薬品と死の臭いのするあの場所で、俺はなにがしたかった？

能力を手に入れる？ ああ、それはある

他者を助けるため？ まさか、俺にとって全ては無、永劫に帰するものに俺が介入しても意味がない

だったら 何故俺はこいつを助けたのだ？

気まぐれ？ 気の迷い？ 運命？ それとも いまだに俺は永劫に帰しているのか？

俺がこいつを助けるのは決まっていた？ ハハはハハハははは！！！！！！

なんて、無様

どうして、俺はこんなにも

壊れているのだろう

ああ

それはきっと、破綻している破壊されている破棄されている

俺の前世の、出発点に

俺はなに、を

「帝督・・・」「黙れ」

この思考はマズイ

でも、でも、でも！

どうして！俺にとってコイツは永劫に回帰する意味のないもののなに！

思考が、混乱していく

ぷつり

思考をリセット

あ、ああ

「お前を助けた理由？そんなもん」

俺が知るかよ

「・・・そう」

この瞬間、彼は一つの事実を知った

自分の中には、なにかがいることに

ソレの名前は、天使？悪魔？運命？それとも

原罪？

私は彼の顔を見る

綺麗な茶髪、整った顔立ち

研究所で一人体を鍛えていたのだろう、私を抱く腕は引き締まっていて

不謹慎ながらもときめいたのは秘密

だけど、その端正な顔は

いままさに苦痛に歪んでいる

最初は研究所を破壊したときに怪我でもしたのかと思ったけれど

まさか彼がそんなミスをするとは思えない

だから、彼がそんな顔をするのがいやだから

私は彼に対して、久しぶりに力を使う

最初彼に使った距離は0

彼と彼自身の距離だ

人間、最も親しく愛しいのは悲しいことに自分なのだ

だけど

彼にはそれ以外の距離がないのだ

それがどういふことかは、なんとなく理解してる

つまり 彼にとって万物は塵芥、おそらく自身でも気づいてはいないけど

まるで神の如く思想に私の顔は死相が浮かんでいただろう

つまらなかった？

ま、まあいいわ

とにかく私は彼の心に近づいて

「ねえ、帝督」

「貴方はどうして、私を助けたの？」

私にはわかっている、わかっているけど聞いた

「ねえ、帝督」

「どうして、私を助けたの？」

瞬間

彼の心が、崩壊した

「・・・え？」

私は呆然としてしまう

心が、心が・・・壊れた？

あ、あああああ！！！！

私の心が泣いている、衝突している、啼いている

彼の・・・心が・・・壊れ　　？

いや、違う？

コレは・・・元から壊れていた？

ハートの形をした心（コレはあくまで私のイメージ

それが、粉々に砕け散った、と言うよりは

もともとひび割れていたものを無理やりに集めていたものが再び壊れたような・・・

だが、彼の心はひとりでに元にもどろうとしていた

まるで、ふたたび心を作り上げるように、零から一へ

一から五へ戻っていく。

私は絶句する

「貴方は・・・一体？」

いや、そんなことはどうでもいい

再び彼を壊してはならない

心を作るなんて作業、絶対に彼を傷つけているはずだ

いずれ、元に戻らなくなる

だから、私は

「帝督・・・」「黙れ」

その、声に色はなかった

「お前を助けた理由？そんなもん俺が知るかよ」

「そう・・・」

やっぱり、帝督は帝督だ

優しくて不器用で、いじわるで

かつこよくて、哀しくて

いつも一人で前をみて

全てに流され、それでいて何も言わない

あんな悪魔達にどう扱われてもなにも言わなくて

まるで人形みたいな一面を持つ貴方が

そんな貴方が哀しくて　哀しくて・・・

いつも一人で前を見て

私達と同じ子供達の死を悼み

どんなことをされようと弱音を吐かず

ただ頂を目指している貴方が

本当に格好良くて　格好良くて・・・

だからこそ

私が助かったのはきっと貴方の気まぐれ

だけど

勘違いしてもいいですか？

私は貴方の特別だと　大切だと

どうしてそんなことを考えたのだろう、彼は普段から私を嫌っている

だから絶対彼にとっての大切になんかなれないのに

私は自らを抱いて前を向く彼を見つめる

背中に翼を生やして、空を翔る彼を

なんて、綺麗なんだろう

狂った男と、幼い少女

男の心はどうしようもなく壊れてて

少女はどうしても幼くて

男も少女も、どうしたって未熟なのだ

男が少女を助けた理由なんて、
一つしかないのに

第二話「彼の葛藤、彼女の憧れ」（後書き）

むう・・・

狂人の思考は難しいですね

支離滅裂だし

第三話「新たな生活」

鳥の鳴き声が聞こえる

カーテンの隙間から差し込む緩やかな日差しをまぶたに受けて俺は目を覚ます

「ん・・・」

研究所を壊し梓と二人逃げてきてからおよそ半年

俺達は親船最中から与えられた別荘　　といつても第三学区に存在する高級ホテルのスイートなのだが　　に住み始めてから5ヶ月だ

最初梓は親船最中が統括理事会の理事と知って大層警戒していたようだが彼女の人となりを見てすぐに懐いていたようだった

まああいつはまだ8歳なのだ、おばあちゃんには懐くだろう

俺はあまり近づきすぎないように距離をとって接していたがもうそんな俺を見る梓の視線と言ったら！もう人を殺せるくらいの視線だった

まさしく死線である。

最初の一ヶ月は親船最中の提案で三人で一緒に暮らしていたもちろん俺達に家事などできるはずもなく彼女に梓は料理を習い簡単なものならできるようになってからこの別荘に俺達二人は移住した

なぜ一ヶ月でこちらに来たかというと

『私の家は狙われやすい、だから早く違う住処を見つけます』

親船最中自身俺達二人に生活させるのは心苦しかったようで妙に長つたらしく話していたが要約するとこんな感じである。

そしてそれはその通りだ、なにせ親船最中は統括理事会の中でも珍しい『善人』

その存在を嫌う者は多いだろう

まあ

「世の中悪人ばかりでもねえってわけだ」

だがしかし、やはりアレイスターには敵わないだろう

だから

「そろそろ動くかね」

俺は、窓のないビルへ出発しようとしていた

理由は簡単である

俺達の身の安全の確保のためだ

俺一人ならばぶっちゃけ何者にも負けることだけはない自信がある
だが梓は違う

彼女は精神系能力者だ、料理の方法なんぞ腐るほどある

だから ？

なぜ俺は彼女のために動くのだろう

わからない、わからない、わからない！

だが俺の流儀は望むように行くだ

永劫回帰の生ならばなにをしようとそれは決まっていることなのだ
から

ならばなにをしようとそれに意味はある、世に無意味は存在しない
故に望むように生きてきた

だがいまはどうだ？

念願だった永劫回帰は消えた、俺のみだが
それはすなわち 俺の行動でありとあらゆることが起こりうるの
ではないか？

俺は力を持っている、持ってしまった

力には責任が伴う

口で言うのは簡単だが、いまさらながらにそれが重くのしかかる
俺の力は世界の破滅も、世界の支配もできてしまう

もちろんそんなくだらないことはしない

せつかくの第二の永劫回帰のない生なのだ

ならば

「閃光のごとく生き、華々しく死のう」

故にだ

「黒川梓、お前は俺の生の華だ」

力に責任が伴うように

助けた命の責任は、助けたものが取らなければならない

ならば、だ

「悪いが死ぬまで付き合ってもらっ」

覚悟を決め、決意を固め、いよいよ出発というときに

「あれ？どこに行くのかしら？帝督」

「だから帝督って呼ぶなって言っただろうが！」

バビロンの登場だ

「まあまあそう言わずに、ね？」

朝ごはん作ったから食べなさいな」

そっいつて梓は俺の手を引き食卓に連れて行く

「飯だあ？いらねえよテメエの飯なんざ

だいたいだなあ！！」

俺は手を振り払い食卓で叫んだ

「お前の飯は薄いんだよ！！」「それは貴方の味覚がおかしいのよ」

なんで俺の味覚が否定されなきゃならねえんだよ
いや確かにちよつとおかしいよ？

でもお前の飯は

「なんで肉じゃががあんなに薄いんだ・・・」

薄いのだ、壮絶なくらいに

もうなんというか素材の味しかないのである

「いいじゃない、素材の味」「モノローグを読むな」

「もう手遅れじゃないの？」

うるせえ、しょうがねえだろう

そっちのほうが出上いいかなあ？と思っただから

「メタなモノローグをやめなさい」

「いやその発言が一番メタだろ・・・」

俺はとりあえず食卓につき薄い素材の味しかしないような飯を食べる

「・・・やっぱ薄い」

薄かった、味噌汁は大根の甘さと豆腐の甘さ、味噌の少しの塩っ気

煮魚は魚本来の甘みと大根おろしの辛さ、煮汁のほのかな甘み

極め付けにサラダに使っているドレッシングは自家製である

「貴方、不味いとは言わないのよねえ・・・」

「不味くはねえからな、だが勘違いするなよ？美味しいとも言っていないし思ってもねえからな！」

黒川梓の薄味手作り料理、本人は認めないだろうが垣根帝督は非常に満足しているようだ。

「ごちそうさまでした」

俺は手を合わせ合掌

たとえ料理の味が気に入らなくてもこの料理には食材が使われていてそれを作るために自然の命をいただいているのだ

それに感謝しながら「その食材は学園都市製なんだけど」

無粋なこと言うんじゃないよ

「あとモノローグを読むな」

「でもまあ学園都市製の食材にだってなにかの命は使われてるものね」

そういつて梓は微笑んだ

「クズの命とか、ね」

「食事中に気持ち悪くなる話はしないでくれ・・・」

いや、たしかにたしかにさ!?

人の肉体は炭素などでできているから合成すりゃ食材になるだろっけど!

そういうのは流そうよ、梓さん!

「でも・・・これからはそれが当たり前になるかもしれないのですよっ?」

「ならいまのうちからそういう”闇”には慣れたほうが懸命でしょう」

微笑みながら言う梓

だがその横顔は泣いているように見えた

「・・・梓」

俺は彼女の名前を呼ぶ

すると彼女は俺のほうを向き俯く

「”闇”に慣れちゃダメだ、慣れたら」

戻れなくなる

「お前はまだ子供だ、だから」

これからいくらでも日の光の下で生きていける

「親船さんも言ってたろ？お前はまだ大丈夫だと」

これは本心と事実だ

まだ梓は日の光の下に戻る

なにせ俺が研究所を破壊したとき研究所の子供は俺を除いて全員死んだことになっているからだ

故に逃げたのは俺一人の扱いだ

だが

アレイスターが知らないとは思えない

きつとここにも滞空回線はあるのだろう

アイツに俺の願いを伝えるのは簡単だ

だが梓は顔を上げ

「でも、そこに貴方はいない・・・」

そんなのは、嫌だと

「私は、貴方といられるならば」

闇に吞まれて死んでもいい

随分なつかれたものだ、と思う
だがこれが

助けたものの責任ならば

「・・・そうか」

お前の願いは聞き入れる
お前が俺と共に在るというのなら

「お前だけは俺が守ろう」

愛なんてない、慈悲すらもない、同情なんてするはずがない
ただ

永劫回帰に踊らされる彼女は見たくないだけだった

ここで俺が彼女を突き放そうともきつと彼女は学園都市の暗部に関わってしまうだろう

世界にはガイアたる修正力が存在しているのだから
その修正力を受けないのは永劫回帰から追放された俺だけなのだ

上条当麻ですら、神の奇跡は打ち消せても、世界そのものは打ち消せない

だから

「行くぞ、心理定規」「ええ、未元物質」

俺達は思考を切り替え、窓のないビルへ向かった

「ようこそ、心理定規、未元物質」

俺達は『案内人』により窓のないビルの内部にいた

目の前には巨大なガラスでできた筒のようなもの

周りにはコードや、なにやら用途のわからぬ機器が大量に存在している

目の前の筒の中には性別も、年も、人種すらもよくわからない何か
がいた

その声はひどく中性的で、俺個人の感想だが美しいとも思えた

「御託はいい、俺達の要求は一つだ」

「ああ、いいとも」

「俺達の身の 何？」

俺は思わず聞き返す

こいつは今なんと言った？

「君らの要求を呑もう」

ただし 君らは監視下に置かせてもらう

そして 私からの仕事をいくつか頼みたい」

なん、だこれは

「・・・アレイスター」

お前、どういふつもりだ？」

こいつは一体どういうことだ？何故コイツはこんなにも簡単に要求を通す？

「なに・・・君は知っているのだろうか？」

世界が永劫に回帰していることを」

「何故それを知っている・・・？」

俺は思わず絶句する、なぜコイツはそれを知っている？

ああ、そうか

コイツは

「私は科学の都市の長だ、だがな」

オカルトも少々齧っているのだよ

「・・・抜かせ、クズが」

そうか、コイツはやっぱり

「お前、未来が見えてるな？」

未来視

本来ありえぬモノだ

未来とは数多の可能性でできておりそれを読みきることは絶対に不可能、と

我々人間は認識しているため不可能だがそれを可能にする方法が一つだけあるのだ

「莫大な演算による過去の因果からの未来の結果の計算か・・・」

未来とは過去の因果全てで決まる

ならば必要な過去の因果を計算すれば未来はわかるのではないか？

俺は昔それに至ったのだ

だが

「それはそんなに先までは見えないだろう？」

せいぜい一週間程度じゃないのか？アレイスター」

そう

せいぜい一週間しか樹形図ツリーダイアグラムの設計者では不可能だ

とつのもどんなに高性能な演算機器があろうと一週間を過ぎると誤差がでてしまうのだ

過去の必要な事柄をデータ入力、この時点で誤差は生まれ
そして現在起こっていることをデータ入力、この時点でも誤差が生まれ

未来を計算、この時点では一週間以上はわからないのだ

それもわかることはおおまかな事柄だけ

だがそれでも未来は見える

「つくづく、とんでもないな、お前」

俺は憎たらしげにそう呟いた

「おや、そうかね？だがね未元物質」

アレイスターは唇を皮肉気に歪ませ

「結局未来が見えようが見えなかるうがこうなることには変わりない、そうだろう?」

それは・・・

「チツ・・・いいだろう、学園都市の暗部に所属する」

コイツは・・・どこまで知っていやがるんだか

俺が原作知識を持っていることすら知っている可能性もある

「そうか、ではいずれ」

アレクスターはやはり皮肉気に笑いながら俺達を見送った

『案内人』の元へ歩いていき『案内人』と話をする

「お前、近いうちに死ぬぜ」

『案内人』は結標淡希ではなかったのだ

いやまあこの時点で奴はまだ子供だろうし能力もまだまだだろうか
ら当然なんだが

つまりだ、この『案内人』は遅くとも5年後には死ぬだろう

そんな俺の忠告に

「知っていますよ、そんなことくらいね」

そんな風に受け流して俺達をすぐに外に送り出した

「ハア・・・」 「ふう・・・」

つ、疲れた・・・

「あのクソつたれめ、心底むかつくな・・・」

何回殺してやろうかとおもったことか・・・
もう妄想の中では百二十八回ほど殺してる

俺がそんな物騒なことを考えていると

「まったくね・・・ドロドロしすぎてて読めないし」

おそらく心のことだろう

そりゃそつだ、あんな狂人の心が読める能力者がいたら俺はそいつを尊敬する

「とりあえず・・・」「そうね・・・」

「」「帰ろつ」「」

俺達行きと違って疲れた足取りで別荘に帰っていった

「ふふ」

窓のないビルで彼は一人嗤う

「アレが未元物質・・・」

報告では新たな物質を生み出し操ると書いてあるが

「否、アレはそんなものではない」

アレは世界を破壊できてしまうような力だ

おそらく未元物質自身気づいている

だが

「よくもまあ思いついたものだ」

科学に生まれ、科学に育てられたものでは絶対に気づけないモノを
未元物質は気づいている、それはなぜか？

そしてそれに何故自身が気づけたか

アレキスターは忌々しげに呟いた

「魔術・・・か」

物語は、六年後

未元物質は成長し高校生

心理定規は大人に成り

一方通行は新たな出会いを経験し

幻想殺しは

第四話「超電磁砲」(前書き)

超電磁砲との邂逅です

第四話「超電磁砲」

ドゴーーーーン!!

俺は目の前の銀行のシャッターが爆発するのを見た

もくもくと黒い煙が上がっていく様子を見てると不意に

「おら! 急げ、ズラかるぞ!」

なんて声が聞こえたけどおもっくそ無視して

「そこの一般人の方! 早く逃げなさいですの!」

なんて、どっかで聞いたのこのあるような女の声も無視「ちよつと黒子!」

なんて、不意にいまはもうあんまり覚えてないけどなんかのギャルゲーで天然パーマの悪友みたいな声が聞こえたけど無視して

全力で現実逃避していたら

「悪いけど、手出させてもらっから」

あれ！？もうそんなところまでいったの！？（ずっとボーッととしていたらしい、黒子談だ

少し離れた場所には学園都市に七人しかいない超能力者の一人であり七人の内の第三位というとてもキリのいい数字の超能力者がいて

それに能力も「電撃使い」なんてとってもまっすぐで王道的な能力者がいて

茶色の肩にかかるかかからないくらいのショートカット、常盤台中学の制服に身を包んだ少女は

その腕に紫電を走らせ、魔弾を射出する。

ジジジ・・・と鳴き散らす雷の銃口

溜めに溜められた電圧は、磁場を歪ませ力を発する

そうして、弾丸が銃に装填され、発射された。

私は自らの後ろに飛んでいった車に目を向ける

すこしやりすぎた感があるが、まあここは学園都市

能力の一つや二つ飛び交ってもさして大きくはならない

と思いたい・・・

「やつちやつたなあ・・・」

私は絶賛自己嫌悪中

たしかに佐天さんが蹴られて怒るのはわかるけどなにも超電磁砲でやらなくてもよかったような気がする

そんな風に「車を無理やり破壊して止める」方法を改めるといいうささか違う考えをしていた私に声かけられる

「また随分と派手にやつたな、第三位」

不意にかけられる男の声
そちらを見れば

「しかしアレがお前の代名詞である、超電磁砲か・・・なかなかのパワーとスピードだ」

染めているのだろうが天然モノにしかみえないくらい綺麗な金の髪
顔立ちはまるでホストのように整っていて、長点上機学園の制服に
身を包んでいる

あそこはたしか私の学校と同じく名門校だったかな

てゆうか

「いきなり人を見て第三位とかやめてくれる？
喧嘩売ってんの？アンタ」

私は少しイラッときた、そりやもう盛大に
いますぐこいつを電流で痙攣させてやりたいくらいに

「ん？ああ、すまんすまん
別に悪気があったわけじゃねえんだ、謝る」

コイツはこう言うが

「私には悪意しか感じられなかったんだけど・・・？

てゆーか、アンタ誰よ」

なんかこう、人を子供みたいに見てるその目が気に入らない
アイツみたいで私はさらにイライラしてくる

そんなときにコイツはまたとんでもないことを言ってくれやがった
ので

私はブチキレてしまった

「ん、俺の名前は垣根帝督

一応学園都市七人の超能力者の一人

序列は第二位の『末元物質』だ、よろしく超電磁砲」

びりびりっ!!

「・・・ふざっけんじゃないわよ!!!!」

あんたが第二位ならさっきのあれは明らかに嫌味でしょうがぁ!!!

あふれ出る電流と殺意、それにまかせて私は垣根におもっくそ電流を浴びせた

「うおっ!?!」

しかしそれは垣根の背中から突然現れた翼により防がれる

「防いでんじゃないわよ!!この、クソッ!」

「常盤台のお嬢様がそんな言葉使うんじゃないよ!!!!
てゆうか人に突然電気で攻撃してくんなよ!」

そんなこんなで私と垣根のデッドレースが開始され

「お二人とも、風紀委員として拘束しますわよ?」

「すいませんでしたぁっ!!!!」

二人して黒子に謝る

本当に彼らが学園都市で七人しかいない超能力者のそれも第三位と第二位なのか疑わしくなってきたような光景だった

「でそちらの殿方が第二位の・・・？」

私達は近場のファミレスに五人で集まっていた

少し日が傾いてきていて門限が危ないけれど、まあ黒子がいるから大丈夫だろう

「ん、そうみたいよ」「ああ、第二位をやらせてもらってる、垣根帝督だ」

垣根はゆるく微笑むがどうにも作り笑いすぎて違和感を感じてしまう

「お嬢さんは風紀委員の白井黒子だったか？大能力者の空間移動の」
首を傾けながらテーブルにひじをつく姿は実に様になっているけど

なんだか作り物めいていて、私は嫌だった

「ええ、私、第一七七支部にて風紀委員をやっております、白井黒子ですの

しかし何故私のことを・・・？」

そう黒子が言っていると垣根はまた噓くさい微笑を浮かべ

「それなりに有名だからな黒子嬢は

さすがに御坂嬢には敵わねえが、二人とも美人で強いって事で有名なだ」

「それはありがとうございますの」「一応アタシも礼は言うておくわ」

明らかな世辞だが、世辞でも綺麗といわれて嫌な気分にはならない

そんな不思議な雰囲気を持つ男だった

「なんつーか、アンタって女つたらしね」

思わず口をついて出てきた言葉に誰が反論できるだろうか

垣根は苦笑し、アイステイーを飲み一息つくと

「ははは、いやなに

二人ともたしかに美人で強いからな、別に口説いてるわけじゃねえよ」

「ふん、第二位のアンタに強いとか言われてもねえ……」

嫌味にしか聞こえないのだが……

と、私達が三人で話していると

「あ、あのっ！」

と、いままで蚊帳の外だった初春さんから声がかかる

「ん？」「どうしたんですの？」「どうかした？」

私達は三者三様に反応

「え、えっとそちらの方は……？本当に第二位の？」

初春さんはすこしおっかなびつくりといった感じで言う

「ええ、確証は取れていませんがこちらが学園都市に七人しかいない超能力者の第二位

学園都市最優の超能力者、『未元物質』垣根帝督です」

黒子がそういうと初春さんは顔に驚愕を貼り付け

「ほえー！！や、やつぱり！あの学園都市の最優の超能力者さんなんですか！？」

す、すごいです！御坂さん並にすごいです！！一日に二人の超能力者に会えるなんて！」

そう初春さんが言うと

垣根は少し苦笑しながら

「はは・・・可愛らしいお嬢さんや、あまりその名前で呼ぶな、恥ずかしいんだよ・・・」

学園都市最優・・・ねえ

「ねえ、黒子

アタシはなんて呼ばれてるの？」

少し気になったので黒子に聞いてみる

「え？お姉さまについている異名は・・・」

「学園都市の歩く砲台、『超電磁砲』・・・だろ？」

黒子が言いよどむと垣根が答えたが・・・

「歩く・・・砲台ですって？」

誰だ、そんな異名を広めたクソは

私正真正銘の女子中学生なのよ！？それをアンタ歩く砲台って！

「あちゃー……」「ん？いいじゃないか歩く砲台、まさしくお前だろ」

私は、ブチギレ寸前だった

そりゃもう、自然に電気が出るくらいに

そこで

初春さんのある一言が場を作り変えた

「ところで第二位と第三位っていうくらいですし、やっぱり垣根さんのほうが強いんですね？」

「ちょ、初春ッ！？アンタ火の中に核爆弾打ち込まないでよっ！」

佐天さんがなんか言ってるが聞こえない

「……垣根」

そのときの私の顔はまるで般若のようだったらしい（皆から言われた）

そんな私のドスの利いた声に垣根は

「ん？どうした、超電磁砲

あ、お前まさか・・・」

にやりとほくそ笑みながら

「俺に勝てるとでも？第三位」

「いい度胸ね、第二位」

ヤリアイましょう、垣根帝督

ああ、シアオウか、御坂美琴

それは殺り合い？ヤリあい？殺り愛？殺り哀？

それは試合？死合？死愛？

まわりの面々の心境である

いろいろと壊れてる、ウン

第四話「超電磁砲」(後書き)

次回は初の戦闘です

未元物質 V S 超電磁砲

こうご期待！

第五話「未元物質 vs 超電磁砲」

闇に落ちた土手でその二人は相対していた

かたや常盤台のエース、学園都市最強の能力者達の一人である『超電磁砲』

かたや学園都市最優と呼ばれる超能力者、『未元物質』

「もう、ここまで来たら言葉は不要よね？」

『超電磁砲』 御坂美琴は戦前の口上を始める

「ああ、無論だ」

『未元物質』 垣根帝督は返礼を放った

「私の『超電磁砲^{レールガン}』は、止まらないわよ」

その御坂の言葉に

垣根はクククと含み笑いをもらし

「俺の『未元物質^{ダークマター}』に常識は通用しねえぞ」

二人のボルテージは上がっていく

殺気、殺気、殺気

そんな二人を見ている三人はそれぞれ三者三様の反応をしていた

「わ、わわっどうしましょう！？私があんなこと言っただけに！」

初春はもうこの世の終わりのような顔をしている、がその目には好奇心が宿っているのがなんともいえなかった

「はぁ・・・もう遅いよ初春」

佐天は嘆息しながら言葉を漏らす、その目には超能力者たちがどのような戦いをするのかへの興味と能力者たちへの羨望があった

「そうですわよ、初春」

黒子は他の二人と違いその目にも表情にもなにもない

ただ己の「姉」を信じているのか、はたまたなにかあるのか

どちらにしろ、彼女ら三人には入り込めない

二人の周囲は既に超能力者のみしか存在できない空間になっている

それ以下の能力者では踏み込んだ瞬間に、死ぬ

そうして、火蓋は落とされた

先手は御坂

「まずは小手調べっ！」

その腕に紫電をはしらせ、放つ

そのさまはまさしく、雷

天上から降り注ぐはずの雷が、彼女の腕から放たれる

常識をもって考えればこんなもの食らえばまず死ぬだろう

が

彼、垣根帝督に常識は通じない

垣根の背から昼間にも現れた、翼が現れる

三対六枚の翼、白く白く白無垢の

まるでなにも知らない幼子の色をした、純白の翼

「おいおい、そんなもんが通じるわけねえだろう？」

垣根は翼で電撃を防ぎながら

「今度はこっちだ、ちゃんとよけるよ？」

その瞬間

翼の一つが背から離れ、ブーメランのように御坂へ飛ぶ

「ッ！」

正直言つて予想外だった、まさかその翼を飛ばしてくるなんて

これはまさしく不意打ちだ

ある程度の常識をもっている人間ではこの不意打ちをかわせない

これが、常識が通用しない一因

アクセラレータ

一方通行が突進だけですべてを圧殺できるいわば覇道の最強ならば

ダークマター

未元物質は奇襲だけですべてを惨殺できる、邪道の最優

だが 御坂美琴も普通ではない

先ほどの電撃で翼の硬度及び防御能力は確認済み

故に、その攻撃能力もある程度はわかる

ならば

「ッ！」

地面から砂鉄を取り出し高速で振動させ、翼に投げる

それは円の形を形成した、高速の弾丸だ

触れば切れる、食らえば死

死の魔弾を受け翼は食いちぎられる、あたりに美しい白の羽が飛び散った

そして、魔弾はそのまま垣根へ向かう

カーブを描き、その首を見据えた攻撃はしかし

「あめえ」

その手に突如出現した赤い槍に切り払われる

その瞬間　御坂美琴はゾクリと

背筋が凍るような、感覚を感じた

なんだ、アレは

まるで全てを殺しつくし、相対者に生を許さぬその槍は

そんな御坂の驚愕を感じながら垣根は嗤う

「クカカ！やっぱり、お前もこの槍をみたらそうなるわな」

赤い槍を振り回しながら、垣根は御坂に言う

「気をつけるよ、アタれば」

死ぬぞ

瞬間　その死槍が放たれる

「ッ！あああああああ！！！！！！」

御坂は死に物狂いで回避を試みる

心臓へ一直線にむかつてくる槍に、最高硬度の砂鉄をぶつけ速度を

緩め

一瞬速度の緩んだ槍へ、砂鉄をからませる

「じじっ！……！」

そのまま自身へ向かう槍の流れに逆らわず砂鉄でくるみ

自身の体を、砂鉄に抱かせて移動する

移動自体は半身分程度だが、これで十分

そのままさっきまでいた場所へむかう槍にからませた砂鉄を操作し

「チエイサア！……！！！」

後ろに激突させる

なんとか、凌いだ

と御坂が安心したとき

「戦場でソレは」

命取りだぜ、お嬢さん

瞬間、死角から感じる殺意

御坂美琴は常に自身から弱い電磁波をはなっている

ゆえに死角からの奇襲にも気づける、が

「気づけても、迎撃できなきゃ、意味ねえよなあ？」

振り向いた時にはすでに遅く

目の前に広がる、白と赤の世界

「ああ 負けちゃったか」

あきらめたように呟く御坂、死の凶刃は、その命を刈り取る前に

「ああ お前の負けだ」

寸前で停止、垣根帝督はすぐさま翼を消し、槍を消す

「じゃあな、久々に楽しめた」

すたすたとなにこともなかったかのように、歩き去る垣根に

御坂は声をかける

「ね、ねえ！」

すると垣根は一度振り向き

「なんだ？」

疲れたような顔をしている、すこしは食らいつくことができたようだ

「アンタの能力って結局なんなのよ？」

あの翼もそうだが、あの槍だ

とてもではないが、特殊すぎると思った

まるで

「俺の能力は『未元物質』だよ、御坂嬢

学園都市最優の、な」

あばよ、と手を振りながらそのまま彼は去ってしまった

「学園都市最優・・・」

突如現れた翼、どこからともなく現れた、不吉すぎる槍

そして、未元物質という名

つまり

「この世に存在しえないモノ・・・？」

常盤台のEースは頭脳もEース級だ

もし、彼の能力がこの世に存在しえないものを生み出しそれに形をあたえているのならば

「なによ、それ

絶対勝てないじゃない」

まさしく学園都市最優だろう

なぜなら

「アイツ、私に超電磁砲レールガンを撃たせなかった」

最初の一撃で超電磁砲を使わなかったのは、小手調べだ

だが、翼が向かってきた瞬間超電磁砲を撃てたにもかかわらず撃たなかったのは

単純明快、翼を貫き、友達も貫いては意味がないから

超電磁砲の予測射線上に、初春たち観客がいたのだ

そこを狙い彼は翼を放ってきた、邪道である

そう、垣根帝督は別に自身をなめてはいなかった

全力を持って、私に対しその邪道を発揮していた

「卑怯者・・・」

でも、少しうれしかった

私に対し全力で向かう格上なんてそうそういない

全力ということは認めてもらえているということだ

それは、自身が勝てない存在からの初の事だった

それに比べて

「アイツはいつまでも私を子ども扱いしやがって・・・」

ツンツン頭の気障な男を思い浮かべ

「うがああああああ！！！！」

あたりに電気を撒き散らす、御坂美琴であつた

「ふう・・・」

御坂美琴が痼癢を起こし電撃を放っている頃

垣根帝督はビルの間でへたっていた

「やはり・・・無理があんのかねえ」

金の美しい髪を揺らし嘆息する

「ま、いいか」

『コード・ナインジョーカー』解除

彼がそういうと、彼の体が光に包まれる

そうして光がおさまったとき、彼の姿は少し変わっていた

美しい金の髪は茶色になる

「かぁ・・・やっぱり無理があるか」

もう一人の自分を作ろう、なんていうのは

実際、対超電磁砲戦では

「自身の三割にも満たない、劣化品しか作れねえか・・・」

おそらく自分であつたならば第二撃の翼は切れず、御坂美琴に直撃していたはずだ

「まあ、いい」

実験に実験を重ね、垣根帝督がいま生み出せる自身の数は、九人

今の段階は

生み出した自身の研鑽と成長

「クック・・・超電磁砲との戦いはそこそこの刺激になったみたいだな」

内容はさして派手だつたわけではないが、

「強いAIM力場を感じるだけでも、これだけの成長を見込めるとはな」

ならば

「次は一方通行か」

彼は夜の闇に融けて行った

『コード・ナインジョーカー』を彼が作ろうとしたのは暗部に所属してから半年後の話だ

きっかけは暗部の下部組織の離反からだった

彼はそれを鎮圧しながら思ったのだ

これではアイツを守れない、と

もし自身らの下部組織が自らを裏切り彼女を襲いでもしたらどうする？

そこで考えたのだ

信用できる者を常に監視につけるしかない、と

だが

俺に信用できるのは俺しかない

故に、もう一人といわずもう九人の自身を作り上げようと思った

彼の『未元物質』にはそれが可能だった

この世に存在しない物質ということは、彼が取り出し形をなすまでそれは無ということになる

すなわち、なにからの概念もついておらずあらゆる概念を受け取れる

ならば、概念を与えてやれば、その概念を吸収するのではないか？

すなわち、『未元物質』が最優と呼ばれる理由は実に単純

この世に存在しないものを取り出し形を与え戦う故に最優なのではなく

この世に存在しないもので、この世に存在するあらゆる全ての事象を可能にできてしまうから最優なのだ

が、これは科学側としては異端だ

科学は概念を否定するからである

が、彼垣根帝督はいわば科学と魔術リアルオカルトのハイブリッドにより生まれた

「災厄異端児」

故に、最優なのだ

そうして、彼が『コード・ナインジョーカー』を作り上げるために

無能力者への実験を開始するのはまた別のお話である。

第五話「未元物質vs超電磁砲」(後書き)

戦闘なんかしょぼいですね……

まだまだ精進します……

ここで垣根帝督のチート発覚

じぶんでいうのもなんですけどんでもないチートですね。

第六話「アイン完成への道は長く」（前書き）

これ含めこれから二話くらいはたぶんギャグです

第六話「アイン完成への道は長く」

目の前には女子高生が三人いる

それも三人とも綺麗だった、高校生とは思えぬ胸、儂げな容姿を持つ美少女、元気いっぱいの子

だが、とアインは嘆息する

どうしてこうなった・・・

事の発端は垣根帝督が学校にてある誘いを受けたことから始まる

「なあ、帝督

ちつと頼みがあんだけどいいか？」

長点上機学園はエリート校だ

そして垣根提督が在籍しているクラスではなおさらそのレベルは高い
能力、頭脳、態度

どれをとっても最高クラスのエリートたちのクラス、なのだが

「あ？なんだ？」

彼らも女の子には興味深々の男の子

「今日、合コンを開催したいと思う

故に、来てはくれないか、帝督」

だが哀しいかな

垣根帝督は女に興味がない、厳密に言えば嫌いである

そんな彼が合コンなど行くはずがないとわかっている上での誘いだ
った

いわゆるダメ元というやつである、彼は校内でそりゃもうつらやましいを通り越すくらいにモテるが
まったくそうつわさが立たぬ時点で女嫌いなことには気づいて
いる

だが・・・

「そうだな・・・行ってみるか」

瞬間

クラスに残っていた面々がコケた

ズンガラガツシャーーーーーン！

「な、な、なああ！？あの、あの最強の硬派垣根帝督が合コンだと！？」

「帝督君が！？合コンですって！？」

「おいおい！明日は槍でも降るのか！？」

と、クラスの面々は騒ぐ

誘っていた張本人すらコケるほどだ

だが、垣根帝督が合コンの誘いを受けたのには訳がある

つい先日完成間近になったコード・ナインジョーカーの内の一番目である

コード・アインの最後の仕上げだ

コード・アイン アインの製造コンセプトは『完璧』である

あらゆる状況に対応し、あらゆる戦局を覆しうる者として作り上げたアインだが

いままでは戦闘面ばかりでその他の精神面は手付かずだったのだ

なので丁度良い機会なので女という不倶戴天の敵をアインに任せ

将来必要なスキルを学ばせようという魂胆だった。

交渉Ⅱ女という構図が出る時点で垣根帝督がどこかズレている人間だということは皆わかるだろう

彼にとって女とはそれだけ強敵なのである。

そんなこんなで

コード・アインは初めてオリジナルでありマスターでもある垣根帝督から離れて行動することになるのだが

「まさか初のオリジナルから離れての仕事が合コンかよ・・・」

コード・ナインジョーカーが一番難しいのはオリジナルである垣根帝督から離れての行動である

オリジナルである垣根帝督との同調状態の場合、垣根帝督がアインの状態をイメージで補うことができるため常に安定するが

離れて行動する場合、アイン自身が自身をイメージし自らのほつれを補わなければ粒子となって消えてしまうのだ

任務中に粒子になって消えたりしたら一大事である。

故に離れての行動というのは非常に重要なのだが・・・

「その重要な初仕事に合コンと選ぶあたり・・・オリジナルはやっぱズレてるな」

合コンで俺になにをしろというのだろう

しばし考えた結果

そうか！合コンというからには誰か女の子を落としたいんだな！？

と、帝督より「精神面を鍛え感情を操作することを覚えろ」と言われ

その結果を示す方法に「女の子を落とせばいいんじゃない？」という結論に至るあたり

先ほど帝督がズレていると酷評したばかりのアインもまたもう一人の帝督、なのである。

つまり帝督は頭の良いバカなのだ

女との交渉ごとを自分でできないからちやうどいいタイミングで作ろうとしていたもう一人の自分にさせるために合コンにいかせる

そんな面倒くさいことをするくらいなら我慢すればいいのだがそれでもう一人の自分を作るあたり頭はいいがバカである

と、そうしてアインとクラスの友人二人はある喫茶店にいた

小洒落た店だ、店内に流れるBGMは静かなジャズをチョイスしグラスは光を綺麗に反射する上質なものを

どこか穴場的な雰囲気醸し出す店内は薄暗くいわゆる高校生が考える大人な雰囲気の店だった

が実際中身はもう40近いオリジナルからしたら

「狙いすぎてて気持ち悪い」

と言うことだろう

が、モノホンのおっさんはこんな喫茶店には来ないのだ
故に、背伸びをしたい年頃の若い客層にウケるこの店は学園都市で
は成功しているのだ

六人座れるテーブル席の片面三人には帝督たち三人が座っていた

帝督たるアインの意見により、女性は通路側のほうがいい等々のア
ドバイスにより

できるかぎりの準備をしたバカ三人はいつちよ前にいわゆるキメた
服装に身を包んでいた

クラスメイトの一人 赤城はどこぞのヴィジュアル系のようなパ
ンツに手にはゴテゴテしない程度の指輪

髑髏がプリントされたタンクトップにやはりどこぞのヴィジュアル
系のような布が切れているシャツ

だが、何故かその顔にヴィジュアル系のメイクが施されている点で
かなりズレている。

もう一人のクラスメイト 青木は赤城に比べれば大人しいがやは
りどこかズレている

ブーツにカーゴパンツ、ここまではいいのだが上半身を包む長袖の

カットソーで全て台無しである

なぜにメイクしてきた？

なぜにカーゴパンツにカットソー？お前筋肉あるんだからタンクトップ着てこいよ

それぞれへのアインからの批評である

一方アインの格好はいたってシンプルである

足が長いので少し腰パン気味にしたヴィンテージのジーパン鍛えてある体のラインがでる黒のタンクトップ
首にはマリア像のネックレスでワンポイントをつけている

さきほどアインはクラスメイト二人を酷評していたが

ぶっちゃけ三者三様に気合入りすぎである

赤城は彼女がほしい一念で

青木は女性と話すことがまずの目標らしい

そしてアインはとりあえず何人落とすか考えて、全員でいっかとい

うアホなことを考えた結果がシンプルな格好だっただけである

そうして

相手方の三人がやってきた

ガタッ

とりあえず、アインはすぐさま立ち上がり出迎えに行く

とある女性からのアドバイスであり

その1、とりあえず落としたいならとりあえずやさしくしろ

というアドバイスを実行しているのだが

実はこのアドバイス、今回のアインのような場合にしか効果を発揮しない

あまりやさしすぎる男というのは女性の興味を惹かないのである

が、高校生という年齢を考慮した場合は大丈夫なのだが

だが結局はとりあえず落とす場合だけである、実際に付き合うならば無理にやさしくするのはあまり良くない

故に

とりあえず落とすという目標を持つアインには丁度いいのだが・・・

アインは三人の内の一人目を見て驚愕の表情を浮かべる

一人目は、胸が高校生レベルではない美少女

少しクセのついた綺麗な黒髪、黒のタンクトップに白の水玉のスカート

足元はサンダルだがこのサンダルもまた可愛い

だが

その顔にアインは見覚えというかなんというかその顔について知識を持っていた

アインら『コード・ナインジョーカー』にはオリジナルである垣根帝督から原作知識を受け取っている

そのほかの知識も移植できるはできるのだがそれではあまり意味がないと垣根帝督が判断したため原作知識のみなのだが

（な、なんでコイツがこんなところにいやがるんだ！？）

一人目の美少女は、吹寄制理

原作主人公である上条当麻のクラスメイト、だったのだ

「?なによ、あたしの顔じつと見たりして、お前でしょう?今日の合コンとやらの相手は」

ひ、否定してほしかった・・・

そんなこんなで

美少女三人とバカ三人の合コンが開催された。

第六話「アイン完成への道は長く」（後書き）

アインは三人を落とせるのか！？

いや、むりっしょ・・・

第七話「アイン完成への道は長く？」

空気が重かった

目の前に座る三人の男を吹寄は見る

一人ははどこぞのヴィジュアル系のようなパンツにそこそこ趣味のいいクロムハーツの指輪をしている

が、なぜかその顔に薄くはあるがヴィジュアル系のメイクが施してあった

二人目はおとなしめだが

カーゴパンツにカットソーとは、なんというかピシッとしてない感じで吹寄はあまりスキではない感じである

そして三人目

金髪でホストのような整った顔立ちをしたタンクトップからは鍛えられた筋肉が見え

シンプルなジーンズもまたスタイルを際立たせるポイントだが

はつきり言ってどいつもこいつもチャラチャラしてて吹寄的にはダメだった

こんなことなら家で勉強してればよかった、と吹寄が思うのも無理

はない

そもそも自分が合コンにきたのだったただの数合わせだ

早く終わらないかなあと考えていると

「ところでさ！ そろそろ別行動にしない？ 一対一にしてさ！」

クラスメイトの元気はつらつ少女 木内が言った

吹寄的にはその提案に乗り気である

なぜなら一対一になった相手に早々に別れを切り出しさつさと家に帰ろうと思っていたのだ

故に安堵していたのだが、一抹の不安は残っている

吹寄とて女の子だ（自身の容姿には全く関知していないが）

男達の中でとくにおとなしめで危険のすくなそうな二人目を狙いたいのだが

「お、いいねいいね！じゃさとりあえずくじ引きにしようよ！」

と一人目のV系バカ（木内の好みらしい）が言ったため
狙いはどうなるかわからなくなった

こんなときあのバカならはずれを引くでしょうね

と吹寄はクラス一のなまけもの（吹寄視点）を思い出す

彼はとても不幸だ、じゃんけんをすれば負けくじをすれば負ける

だがそれにかこつけてなまけているように吹寄には見えるので彼女はそのバカをあまり好いてはいないが
どうしても世話を焼いてしまうのだ

と

つらつらと馬鹿なことを考えているうちにくじ引きは終わっていた
ようで

吹寄は自身の相手を見て眉をひそめた

「よりもよってお前か・・・チャラ男」

「ほっといってくれ、この顔は自前だ」

二人は現在喫茶店の前にいる

提案をした木内は目的の男を引いたようで意気揚々と二人で歩いて
いった

その様を見て額に筋が浮かんだのは秘密である

そして少し気の弱いクラスメイト　川井はおとなしめの男と初々しい雰囲気です帰っていった

ちよつとほほえましい二人であつたため妙な罪悪感を感じてしまつたことは秘密である

そして

目の前の男　垣根帝督だつたか、呼称チャラ男は

「とりあえず送る、行くぞ」

外見に反しなかなか紳士的なようだった

まあ最初に迎えに来たところでなんとなくわかつてはいたのだが

この男は、いわゆる硬派な男のようで

合コン中もあまりしゃべらなかつた

私と同じで数合わせだったのかもしれない、が

「私はお前が嫌いよ、チャラ男」

やはりチャラチャラした男は嫌いだ

なんかこう、更正させたくなくてきてしまつのだ

「・・・はあ、わかったわかった

とにかく送ってやるから、先導してくれ」

非常に疲れたという顔でこちらを見てくる垣根

「ええ、こつちよ」

流石に厚意をむげにはできないのでとりあえず送ってもらうことにした吹寄

（あーもう、早く帰りたい）

早くこの男から離れたかったため早足で家に向かう吹寄についていく垣根

いつもなら通らないような裏路地の道も活用してすぐに家に向かう吹寄

ここらへんが吹寄らしいといえるのだろう

普通キライな男と路地裏には入らないのだがそんなことを気にする吹寄ではない

が

今日は運が悪かったようだった

「よう、兄ちゃん

キレイな娘連れてるじゃねえか」

柄が悪く頭も悪そうな男達が、目の前に十人ほど

吹寄はすぐに引き返そうとするも

「ワリィンだけど、ここは俺らのテリトリーなんだよねえ」

後ろにも男達がいた

「つーわけでさ、その娘おいてどっか消えてくれよ」

男達は能力者だったようで、掌に炎を浮かべこちらをにらんできた

「救いようのねえバカ共だな、お前ら」

そのとき、後ろにいた垣根がもらした言葉に

「ああ！？んだとコラア！！！」

バカ共は、激昂したようで

その手の炎をさらに大きくさせてこちらを睨む

「やさしく言ってるうちに消えろって言ってたんだぜ？兄ちゃんよお」

後ろの男たちの中から一人でできた

その男は腕に電気をはしらせている

吹寄は怖かった、吹寄とて女である、こういうバカな連中に自分がつかまればどうなるかくらい理解している
そして、それに自分が耐えられないことも

だから、このときだけは、自分の後ろに控えている垣根に

「っ……か、垣根、帝督……」

助けを求めた

どうかしてるとも自分で思う

たとえこいつが長点上機学園に通うエリートでも

こういういわゆる喧嘩なれしている連中には勝てない事はしっている

エリートであればエリートであるほど、戦いには不慣れなのだ

だけど、それでも 怖かった

吹寄制理は女の子だ

こういう場面に遭遇して怖いと思うのは当たり前である

だけど、そういう恐怖にしては、すこし質が違つと吹寄は自分の感じるモノを分析していた

むしろこの多勢に無勢の場面で

「やさしく言ってるうちに、だ？」

こんな風に毅然としていられる垣根帝督に恐怖していたのかもしれない

「誰に口聞いてやがる、三下」

そうして

路地裏の、戦いは始まった

「おらあ！」

初めは目の前のゴミからの炎球

俺はそれを目に留めて背後からせまる電撃を感じていた

即座に能力を展開

三対六枚の翼　ではなく

俺用に作られた俺だけの力を展開する

コード・ナインジョーカーは九人いる

そしてそれぞれには個性が存在し、それぞれ戦闘の思考も違う

故に、オリジナルである垣根帝督はそれぞれに違う力を与えたのだ

それぞれが十全にそのポテンシャルを発揮できるように

そして

コード・ナインジョーカーの首領たるコード・アインの能力は

「お前らよお、塵になりてえのか？」

この世に存在する粒子操作

既存物質を操る、力

この世に理論上存在しているならばそれがどんな粒子でも操ること
のできる力

それこそが

「俺の『ダークマター暗黒物質』に吞まれちまうぞ」

彼の背中から黒い粒子が拡散される

宇宙空間に存在するとされる暗黒物質

それは光を発さず、光を反射しない暗黒

それは未元物質からみずからの体内に供給されているモノ

彼は作られたモノであるため体の中身というものが存在しないため
できる芸当だ

だがなぜ暗黒物質を体内にいられているかといえば

使い勝手がいいからである

前方の炎球を暗黒物質で包み込み熱を奪い取り即座に鎮火し

背後の電撃は電導率のいい暗黒物質で地面へ流す

未元物質が生み出した暗黒物質だからこそできる芸当だ

未元物質が作り上げた暗黒物質にはある概念が与えられており

暗黒物質を操るアインの認識により既存の法則を自由に設定できる
のだ

「そら、気をつけるよ」

いわば、万能物質だ

暗黒物質を彼らの顔に貼り付ける

視界が真っ暗になりなにも見えなくなつた彼らに

「プレゼントだ、受け取れ」

質量をもたせた暗黒物質の塊を後頭部から激突させる

これが、アインが完璧たる所以、『暗黒物質』である

それは万能であり、完璧なまでに死角を潰したもの

未元物質と比べれば劣る、が

未元物質を操作する垣根帝督は人間だ、だが

暗黒物質を操作するアインは人間ではない

何度死んでもかわりは生み出せるし、損傷したところで自身そのもののイメージを構築すれば再生できる

故にこそ、アインは完璧なのだ

垣根帝督が求めた完璧な万能

死なず、退かず、負けずそしてなお目的を達成できるもの

人間という器では行えぬことも行えてしまう万能の存在

それこそがアインだった

アインは暗黒物質を回収し自身の服をつかんでいる吹寄に目をみやる

震えていた、目でわかってしまうほどに

「大丈夫か？吹寄」

ハッとしたようで、吹寄はすぐさま我にかえり

「あ、あ・・・」

最初に浮かんだであろう感情は安堵

そして

「あ、ありがとう、垣根」

感謝、だった

その感謝の言葉が妙にくすぐったくてアインはすこし赤面する

だが

心には一抹の寂しさがあった

「いいさ、これくらい

とにかく、早く行くぞ」

「う、うんありがとう」

彼女が感謝しているのはアインに対してだ

だが、アインは垣根帝督の一部である

故に、こう思ったのだ

俺は、結局は主の影にすぎない、か

それこそがアインにもっとも求められたもの

垣根帝督の影であり、もう一人の自分

故にアインはそれに納得はしている、それでも

彼女の感謝を受けきれない自分^{ニギキョウ}に、寂しさを覚えてしまうのだ

第七話「アイン完成への道は長く？」（後書き）

なんというか

難産でした

女の子が吹寄でなくともよかったという

まあ、後半ちょっと使っんですがねこの二人の関係は

第八話「アイン完成、九人の道化」(前書き)

アイン及びナインジョーカーズ完成です

第八話「アイン完成、九人の道化」

胸になにかを燻らせアインは一人思考する

吹寄を家まで送り届けオリジナルの元へ戻り

合コンで誰かを落とそうとしたができなかった、と報告したら

とんでもない剣幕でぶちのめされこの「部屋」に叩きこまれたのだ

この「部屋」はアインの個室である、垣根帝督の「心」に存在する
コード・ナインジョーカー達の部屋だ

垣根帝督の「心」に存在するこの「部屋」は彼ら「ナインジョーカーズ九人の道化」の
いわば点検場、整備する場所だ

垣根帝督　いわゆるオリジナルにとつての九人それぞれの個性を
補填しオリジナルにとつての「完全」にもっていく

この「部屋」で、彼らはポテンシャルを万全に整備するのだ

コード・ナインジョーカーは垣根帝督の「心」の中に存在する、い
わば潜在意識の具現した姿であるため外での行動中なんらかのアク
シデントにより存在を構成できなくなった場合ここに来る　らしい

らしい、と言うのもアインはオリジナルである帝督にそれを聞かさ

れただけなのでいまいち実感がわかないのだ。

実感がわかない　とするならこれもだ

いわく、九人の内一番目である自身が完成すれば同時に「<sup>コード・ナインジ
ヨイカ</sup>九つの切り札」は完成するという

何故？と聞いたところであのオリジナルが素直に言うはずないので聞かなかったがやはりあまりよくわからなかった

それに、自身に九つの切り札の「^{エース}頂点」を任せるとも言っていた

これもやはりよくわからない、どうせなら自身が全てを仕切れればいいのにといたら

「めんどくさいのは任せた」

とのこと

それでいいのか、オリジナル

そうして思考していると、アインの思考にもう一つのこと浮かび上がってきた

本当に今日で自身は完成するのか？

オリジナルは言っていた

今日の経験によりお前は完成しこれで九人共完成すると

今日の経験といえは少ないものである

合コンに行つて、驚愕する人物と邂逅し、その人物を家に送り届ける途中絡まれて、それを撃退

それくらいだ、アクセラレータなにも最強の能力者と戦闘したわけでもないしなにかを殺してきたわけでもない

ではなにか？

アインのオリジナル譲りの頭脳は思考する

先ほど浮かべたモノの共通点を探し見つけ出す

それらはすべて自身の行動だ、肉体の経験と言い換えてもいい

ならば 精神？

あの瞬間より胸に燦り続けるこの「想い」こそ、完成への鍵なのか？

そういたった瞬間

『助けて』

泣きそうで、苦しそうな声が聞こえる

『愛しています』

慈愛に満ちた、哀しげな声が聞こえる

ソレは全て「部屋」の外、垣根帝督の「心」から聞こえてきた

いまにも壊れてしまいそうな、なにかがアインの「心」を象っていく

少しずつ、少しずつ

まるで自身に足りないものを詰め込むように

だけどやさしく、まるで大切ななにかを宝箱にしまうように

そうして、アインの「心」が完成する

歪なハートの形をしているのが自分にもわかった

そして、これがオリジナルの心の形であることも、わかってしまった

その歪でひび割れたものを心と認識し、心の内面に入り込む

瞬間、アインは自らの存在意義を理解した

先ほどの声の正体も、オリジナル自身理解していない本当の自分の存在意義

ああ　これが俺の、根源

哀しくて、苦しくて、でも忘れられなくて

それはとても、綺麗な青色をした宝石

ただ、泣いて笑って愛した日々の、残滓

垣根帝督の本当の過去だった

そして、それこそがオリジナル自身理解していない本当にアインに求めたもの

この「愛しい」日々を忘れぬように

たとえ自身の記憶になくとも、なにかの形に残しておきたくて

それこそがアインに求められた真のもの

そして、ソレは垣根帝督の帝督自身理解していない「根源」だ

ああ　俺の、私の、僕の根源は

なにかを、愛する事だったのか

そうしてアインは歪みをその心に持ち、ここに誕生する

哀を知り、愛を知る「完璧」な従僕

コード・ナインジョーカーの長
九つの切り札の頂点たる

「ダーク・ジョーカー暗黒の道化」が完成した

暗いドーム状の空間

どこかの地下なのだろうか、外界からの光は一切存在せず空間の頂点に存在するライトだけがこの空間の光源だった

その空間の中心には円卓がありそこには十の椅子があつた

その空間の主である垣根帝督は嘆息する

「ふう・・・やっと完成したか」

コード・ナインジョーカー ナインジョーカーズ
九つの切り札、九人の道化

それぞれがそれぞれの存在意義をもち、それぞれがそれぞれの役割を持つ

しかし

「頂点^{エース}であるアインの完成が少し遅れちまったが・・・」

本来ならばもっと早くアインが完成し九人の道化すべてが完成するはずだった

だが

「アインが完成しないと他のモノも完成しないしな」

そして、アインが完成した

垣根帝督は円卓のなにも描かれていない椅子にすわり

「コード・ナインジョーカー発動」

そう、呟いた

瞬間、彼が座る椅子以外の椅子に九つの影があらわれる

輪郭が存在せずゆらゆらと不安定にゆれる影

「起きろ、我が従僕」

そう帝督が呟いたときには九つの影は九つの形をもっていた

「おはようございます、我が主」

九人九色の声が完全にあわさり一つの音を奏でる

本来ならば有り得ぬがこの九人だからこそできる芸当である

そうして、「^{コード・ナインジョーカー}九つの切り札」は完成した

一方その頃

垣根帝督に置き去りにされ一人部屋でふてくされている心理定規

彼女の手にあるのは携帯端末だ

学園都市製らしいといえらしいのだが機能性を追及しすぎて軽量でコンパクトなのはいいのだが心理定規はこの端末を三回ほどなくしている

そしてその画面にはメールの文面が記されている

F r o m . S

S u b . K I L L t h e m A L L

学園都市内部に敵対勢力の者と思われる侵入者が発見された

「スクール」は即座にコレを検索し排除すること

なお必要な物資、情報は逐次連絡すること

また、任務遂行の障害への全ての行動を許可

ターゲットは必ず、殺せ

第八話「アイン完成、九人の道化」（後書き）

次回暗部編になります！

垣根帝督のいわゆる裏の顔が最近あまりでてきていないのでこころでいつきに出します

こつご期待

第九話「開幕」

「侵入者の排除、ねえ」

俺は梓に呼ばれ直ちに家に戻ってきた

今住んでいるのは学生寮、ではなく暗部へ支給される隠れ家のグレードアップ版みたいなところだ

二二学区の地下街の一角に存在するこの家は、地下街特有の闇の入り口の近くに存在している

「詳細は？」

携帯端末を持っている梓に聞く

この携帯端末非常に高性能らしいのだが軽量化とコンパクトにまとめすぎたせいで梓は何度もなくしている

そのつと俺が回収しているが

その携帯端末より展開された画面をみながら梓は淡々と言った

「第一七学区より一つ、第一九学区より一つ、第一〇学区より一つね」

「三ポイントもあるのか？おまけに綺麗に三つに分かれていやがる」

第一七学区は学園都市中心より西北西の方角に、第一九学区は北東の方角に、第一〇学区は南の方角と綺麗に三角形を描いている

一つにまとまるより遥かに撃破されずらい陣形だ、警備員などが動かせない状況ではの話だが

すなわち

「内通者がいやがるな・・・」

それも学園都市の暗部を知る人物、そして

「ええ、そしてさらに学園都市の学区の特徴もよくとらえた侵入よ、
そうなのだ

第一七学区は施設のほとんどが自動化されていて住人があまりおらず目撃される危険がすくないため侵入はしやすいし

第一九学区は他の学区にくらべ寂れていてアンダーグラウンドな雰囲気をもっている

第一〇学区は表の学区の中ではかなり黒い研究をしている研究所が多いため統括理事会としてもあまり警備員をいれたくはない

おまけにストレンジと呼ばれるスラムの街まであるのだ

すなわちだ

「こりやめんどくさい仕事だな」

おそらくそのスパイも侵入者に数えられているのだろう

故に俺達の仕事は

「一切合財まとめて処理すること」「」

スパイは見つけて、侵入者は処分してなおかつ表に影響をなるべく与えない

「やれやれ、さすがに暗部六年もやってると俺達も信頼されたもんだな」

学園都市全土の情報を調べ上げている滞空回線の詳細も一年前に伝えられた

まあ既に知っていることも知っていたのだろうが

「でも結局は使い捨ての駒が使い勝手のいい駒になっただけでしょ

う？

下部組織にいくら暗部最大の人員がいたってせいぜい簡単な殺しと物資調達くらいしかできないしねえ」

流石に六年も暗部組織を運営していると下部組織もそれなりに大きくなってくるものだ

心理定規は簡単な殺しと物資調達と言うが

彼らもそれなりに洗練されているものである、簡単な案件なら彼らだけで十分だし求められたとあらば「外」の物資も持ってこれるほどに優秀だ

ちなみにここでの下部組織とは「スクール」そのものに割かれる人員ではなく

「スクール」の長である垣根帝督個人が自由に動かせる人員のことである

そういう人間が十五人いればそこそこの暗部において三百人近い人員を抱える「スクール」は暗部最大の派閥と言ってもいいだろう

「そういうなよ、俺達だってこれで飯食ってんだからな心理定規」

「貴方って仕事中は普通なのよねえ」

心理定規は普段の彼を思い出し苦笑する

「仕事に私情は挟まない主義だからな、仕事で使えるなら女だろう

が変態だろうが俺は使う」

「まるで私が変態みたいに言わないでもらえるかしら？ 未元物質」

失礼しちゃうわ、とでも言いたげな心理定規だった

「とりあえず、どうするの？ 三つとも行くのはさすがに不可能だし下部組織の子達を動かすことはできるけど・・・さすがに二つのポイントをまかせるのは連携に支障が出るし・・・」

「いやその心配はねえよ、完成したのはついさっきだがあいつらを動かすからな」

「ああ、九つの切り札だっけ？」

コード・ナインジョーカー
九つの切り札

それぞれがそれぞれの個性を持ち、それぞれがそれぞれの役割を持つ垣根帝督の分身であり従僕であり
おそらく垣根帝督の持ちうる最高戦力だ

「ああ、ただまあ今回の仕事ならアインとツヴァイに一つ下部組織に一つ、俺達で一つってとこだろ」

三つのポイントそれぞれに違うグループで対処する

「まあなんだはずれに当たったら不幸で済まずしかねえ」

帝督のその言葉に心理定規は苦笑して

「一応下部組織の子達には激励を送っておくわね」

「・・・なんだかお前あのバカどもになんつつか神聖視されてるよな」

「スクール」の下部組織の人員は七割は男で三割は女だ
七割の男の内実に九割前後が彼女に心酔してるといっても過言ではない

ちなみに三割の女性は下部組織のまとめ役にたいてい憧れている

帝督の言葉に心理定規は苦笑して

「しょうがないでしょう？あの子達の話聞いてあげたらああなっちゃったんだから」

心理定規は基本的に人に優しい
泣いてる子供を見れば声をかけるし困ってる人を見ればほってはおけない

そんな彼女との会話とはなんらかの失敗や挫折により心に傷を負った男達には女神のように見えるのだろう

「ハッ、俺にはわからねえな」

「そうでしょうね」

さて、とそこで二人は話を区切り

「俺はあいつらに指示を出す
お前は『キャンパス』に指示を出して来い」

「了解、でも『キャンパス』を動かすの？『スタッフ』で十分じゃないの？」

「ああ、念には念だ

今回の侵入者は内通者から情報を得ているからな

『スタッフ』が能力者主体なのに対し『キャンパス』は戦闘者主体だからな

今回は『キャンパス』だ」

「つーわけでアイン、ツヴァイとともに第一七学区にて侵入者を排除しろ」

ここは先ほどと同じくドーム状の暗い建物の中

垣根帝督は円卓に並べられた椅子の内なにも描かれていない椅子にすわっている

「はいよ、マスター」「承知」

そしてその円卓の中に影が二つ

一つは垣根帝督にそっくりの少年だった

違う点をあげるとするならばその髪が綺麗な金色に染まっている点だろうか

それ以外はほとんど同じでまるでクローンのようだった

対してもう一人の男はまったく違う

身長一・八メートル弱はある帝督よりもさらに高い二メートル近くある大男

髪は長く濡れ烏の色合いを持ち美丈夫な顔立ち、ともすれば下手な役者よりも様になるその立ち姿

なによりも目を引くのはその背にある大太刀だろう

腰につけては地面についてしまったため背中に背負われたその大太刀はおよそ一・二メートルはある

この男こそ ツヴァイ

オリジナルである垣根帝督から 九人の道化の最大戦力である「
水棲の道化」を任されたモノだ

それは九つの切り札の正攻法の戦闘員

真正面から敵を飲み込む、怪物

そうして二人は第一七学区へ向かう

死神を引きつれ、鈴を鳴らして、六文銭を哀れな者らに渡しに行く
ため

「やつほー『キャンパス』の皆」

そこはとあるビルの地下にある巨大な空間

心理定規はその入り口より入り間抜けな声を中心に掛ける
すると

「『キャンパス』総勢二百二十名ここに召集しております」

およそ二百二十名の者ら
彼らはすべて「スクール」の下部組織である「キャンパス」のメン
バーだ

「どうぞご下命を」

それら全てが黒川梓の手駒であり、手勢だ

自由に動かし、自由に消費する

それが梓にとっての彼らであり

ただただひたすらに従う

それが彼らにとっての黒川梓だ

「第一九学区に侵入者がいるから、これを処分してくれる？」

「承知」

そういつてリーダー格の男 佐々道童子^{ササミチ}_{ドウジ}は総勢二百二十名の部下

達に命令を下す

「ただちに足を用意し第一九学区へ向かう、梓様からのご命令だ
失敗は許されず、失態も許されない では、参るぞ」

そうして各々が行動を開始する

補助部隊は物資及び移動手段の調達に

治療部隊は予想される被害を計算、実働部隊は戦闘に備えて心を構える

そこに梓の無粋ともとれる声が割り込む

「悪いけどあんた等全員ででていかれても困るんだけど？」

「え！？ええええええええええ！？そ、そんな！久しぶりの仕事なのに、留守番が！？」

「当たり前でしょう！？そんな大人数で出て行ったら怪しまれちゃうでしょう！？」

常識的に考えればわかるでしょうに・・・

「梓様、我々はあの末元物質の許にいるのですよ？常識は通用しません」

「通用しなくてもいいから弁えろよ！」

思わずキレてしまった梓を誰が責められるだろうか、いや責められない（反語）

そんなこんなでこちら第一九学区へ向かっていった

「さて」「ええ」

そうして、二人は元の家に戻り

「俺達も行くか」「ええ、そうね」

二人が行くのは第一〇学区

こうして、学園都市対外部組織のおよそ一週間にも及ぶ大戦争が開始された

奇しくも、その先鋒にたったのは「スクール」で

いまはまだ誰もその結末をしらないが

この戦争は後に「死戦^{デスマーチ}」と呼ばれ

学園都市史上最大の闇を残し、そしてなお表へかけらも被害をださなかった稀有な事件として記録されることになり

この「死戦」により「スクール」はとてつもない成長を遂げるのは、また別のお話

第九話「開幕」(後書き)

すいません今回は準備話

次回は第一七学区戦

アイン・とツヴァイの戦いです
一話で終わるかな？

第十話「激突・道化と姫」(前書き)

プロット書き上げるのに一日かかった死戦編・・・
その序幕です！

第十話「激突・道化と姫」

一日目 AM 0:23

学園都市第一七学区

学園都市で使われる工業製品の製造に特化しており
施設のほとんどは自動化されているため非常に人が少ない学区だ

ここから侵入するのは非常に理に適っている

まず、人が居ない

侵入とは、本来気づかれず行つものだ

学園都市にはその敷地中に滞空回線と呼ばれる空气中を漂う七十ナ
ノメートルという驚異的な小ささのモノがある

これにより学園都市内部のことならばアレイスターのわからぬこと
はないため今回は気づかれてしまったが

もし滞空回線がなければおそらくもう少し内部の学区まで侵入され
ていただろう

そうして迎撃するのが

「俺達つてわけだな」

第一七学区の通りには二人の男がいる

一人は長身の金髪の男、アイン

一人はアインよりもさらに長身の黒い長髪を伸ばした男、ツヴァイ

「で？どうするよ、ツヴァイ

一応俺は索敵もできるが相手の人数がいまいちわからねえ」

滞空回線からの情報にもない、ということは

「侵入者がいることはわかるが侵入者の数はわからない
つまり、奴ら滞空回線があることも知ってるってわけだ」

侵入する前に滞空回線をどうにかするのはかぎりなく不可能なため
侵入してからなんらかの方法で滞空回線を破壊、もしくは無効化し
たのだろう

だが

「だからどうした、我々の仕事は変わらん」

ツヴァイはその背中に背負う刀ではなく
自らの髪に手を伸ばし

「こういうことは慣れぬ故、目標のほうから出てくるのを待とう
ではないか」

リン

その場に澄んだ音色が鳴り響く

そして

「閉じろ、氷蜘蛛」

そのとき、第一七学区全体で異変が起きた

第一七学区と他の学区に氷の壁が生まれたのだ
およそ二十メートルはある壁である

「ふーん、それがお前の力ねえ
さっきやってたのはソレの仕込みか？」

「その通り、この業は仕込みに少し時間がかかるがそれでも効果は
高い

外部から持ち込んだ爆薬や銃器ではほぼ確実に壊せない
それこそ、超電磁砲級の攻撃でなければ不可能だろう」

第一七学区を隔離する氷の壁

アインは遠くから覗くそれを見て

「ちつとやりすぎなんじゃねえのか？」

「やりすぎ？否

我々に与えられた任務は敵の殲滅

ならばまずは敵を隔離することから始めねばな」

たしかに、第一七学区を隔離してしまえば敵はではいけないだろう
だが

「敵がここにいる保証はあんのか？」

そのアインの言葉にツヴァイは口の端を持ち上げ

「ある、奴らはいまだにここにいる

考えればわかることだろう？ 奴らの目的くらい」

「あん？ まあ、俺もバカ共の目的くらい察知してるが・・・」

第一〇学区、第一七学区、第一九学区からの同時侵入

綺麗な三角からの侵入は、障害を予測し、その三角の中心に存在する
場所にたどり着くことができることを重視している

すなわち

「奴らの目的地は、第七学区の窓のないビル

それはわかってんだ、で？ なんでそれで敵さんがここにいるとわかる
んだ？」

アインは不思議と言いたげな視線を向ける

「第七学区へ向かうなら第九学区へ向かうのが近道だ
だが第一七学区はその特性上工場や倉庫が多い
そのため入り組んだ土地構造をしている、故にだ」

「やつらはまだ時間的に外周地点から第九学区へはいっていない？」

「そう、第九学区はこの第一七学区からいける学区のうち学園都市外周よりもっとも遠い

あたりに気をつけながらの侵入では時間がかかる、いまならまだ」

「奴らはこの第一七学区にいるわけか

てゆーか、ならなんで第九学区で待ち伏せしなかったんだ？」

とアインが言うとツヴァイは不敵に笑いながら

「待ち伏せなどしてられるか」

獰猛な眼差しで遠くを見つめるツヴァイの言葉に
アインは軽く笑い

「ごもつとも、んじゃ行きますか」

と二人が第一七学区の搜索に乗り出そうとした瞬間

「こんばんは、美しいお二人さん」

鈴のなるような声、どこぞの姫のような綺麗な声が二人をとめる

「道をお聞きしたいのですが、第七学区への道は知っていますか？」

二人はそつと振り返り女を見る

白いローブに流れるような美しい白髪と白尽くしの女だった

ローブは腕を中にいれるタイプのようでテルテル坊主のようだ

「あー第七学区への道かい？いまここの第一七学区は隔離されててなちつと待ってくれっか？どっかのバカが侵入したらしくてな」

アインは微笑みながら女に近づいていく

距離にしておよそ十メートルまで近づいたところで

「下らぬ、正体を現せよ魔術師」

ツヴァイの異を唱えさせぬ声が響く

すると白尽くめの女から苦笑する声が聞こえ

「できれば穩便に終わらせたかったのですが致し方ないですね、では」

女は背筋を伸ばし、美しい音色で告げる

「私の名はベガ 純白のベガでございます

魔術結社”聖なる光”に所属、四天王の一人をやらせていただいて

おります

ああ、覚えなくても結構ですよ」

女　ベガの後ろからおそらくは彼女の部下達だろう
茶色のローブを着た男達がぞろぞろとでてる

そして、ベガはローブの中で妖しく微笑み

「これから死す者には必要ないでしょうから」

こうして、先鋒戦が開幕した

A M　0：35

「チイツ！」

アインは今現在逃走中である

ベガとの戦いはツヴァイが、残りのザコの相手はアインがすること
になったのだ

予定通りにザコどもを誘導して操車場の奥にきたのはいいが

「思った以上にやりやがるッ！てゆーか」

相手は魔術結社かよ！聞いてねえぞマスター！

それも敵はいわゆるRPGにありがちな遠距離攻撃を用いずただひたすらに追ってくる

アインは暗黒物質を使い体を守りながら小規模の爆発を利用し動いているが

その速度は並ではない、自動車なみの速さだ

そしてそれにしつこく追従してくるのだ

間違いなく原作のスタイルなどより実戦的な魔術師

相手は外の人間、それも見たところ下っ端

だがそのことごとく全員が学園都市の能力者でも無理な速度をたたき出す

だがその速度に振り回されることなくアインについていけている

すなわち、凡人に恩恵を与える技術である魔術だけではなく実戦の経験値もある程度ある

だがやはり、下っ端は下っ端

おそらく下っ端たちをまとめる佐々道みてえなやつがいるはず

ならば

「まずはその連携から崩させてもらっぜ」

そういつて、アインは暗黒物質に身を包み、その場から姿を消した

否、姿を消したわけではない

見えなくなっただけである

暗黒物質にあらゆる角度からはいる光をそのまま逆の角度に通しているのだ

そうとうに複雑な演算が絡むがそこはアインである

” ショータイムだ、ファイアのやり方はちと性に合わねえがしょうがねえ ”

同時刻

ツヴァイは現在氷の牢獄にて耐えていた

その向こう側ではメラメラと炎が燃えている
このままではいずれ氷の牢獄は融けるだろう

だというのに落ち着き払った声でツヴァイは冷静に分析をしていた

「ふむ・・・」

現時点で敵から確認できた攻撃は三種類

一つ

電撃系の力

二つ

風力系の力

三つ目はいわずもがな

いまもこの氷牢を解かし続けている炎熱系の力

そしてベガという名前

オカルトにさほど詳しくなくとも誰でも知っているその名は

「夏の大三角、織姫の星か・・・」

ツヴァイは自身に記録されいる知識を検索する

オリジナルである垣根帝督よりこういう場合のための神話やオカルトの知識は詰め込まれているのだ

そして一つの答えを導きだす

「なるほど、織姫の逸話と天帝の逸話か」

七夕で有名な織姫と牛飼いの伝説に登場する織姫　すなわちべガ
織姫は天地を支配し陰陽と太極を支配するといわれている天帝の娘
おそらくそこから魔術をもつてきている

では扱える魔術は？

おそらく天地の操作、陰陽もからめてある

だが、天帝の力とはそう簡単に引き出せるものではない
故に天または地、陰、陽のどれか一つに絞っているのだろう
おそらくはあの白いローブもその魔術に絡んでいる

そして先ほどの三つの力を鑑みれば単純明快

やつが扱う魔術は、天の操作、雷や風、はては炎も操れる

そして

「これだけの現象ならば霊装があるはず」

おそらくは太極図、またはそれに見立てたもの

そしてそれはあの体をすべて覆うローブの中に

「単純明快、ローブごと潰せばいい」

すでに氷牢のまわりの空間は掌握した

あとは、あのなんらかの防御のついたローブをなんとかするだけ

” こういう姑息なやり方は気に食わぬが、任務のためだ ”

恨むなよ

第十話「激突・道化と姫」(後書き)

はい終わりましたね
次回決着ですかね？

第十一話「ツヴァイの力」 （前書き）

すこし短いかもしれませんが
ツヴァイとベガの戦闘です

第十一話「ツヴァイの力」

ツヴァイは己の前にいる白いローブの女に眼を向ける

白いローブは体全体を覆い隠していても見えず

白い絹のようなめらかな長髪に蒼の瞳はどことなく聖母を思わせる

そしてあたりには炎による壁と、砕け散った氷の結晶により幻想的な場を作り出していた

「ようやく投降する気になりましたか？色男^{ロメオ}」

妖艶に微笑みながらベガは告げる

それはまるで男を誘う甘い花、つかまれば最後

食われるようなそんな笑み

だが、ツヴァイはそんな笑みから出る降伏を求める声に

「クッ、ククク」

嗤いをこらえようとしてついでもしまったような笑い声だった

その長い黒髪を震わせ、体を震わせ

「ククククハッ・・・ハッハッーハッハッハッ」

かがませていた体を起こし、ツヴァイは嗤っていた

黒い髪を振り揺らしその肉体に力はいり、そしてその貌は

ギロリ

獣のように、赤く、赤く燃えている

ゾクッ

「ッ
」

純白のベガは戦慄していた

目の前の相手のその目に、見覚えがある

アレは、全てを食らう、怪物の目だ

死を引きつれ、我が身を裂いて、それでも止まらぬ漆黒の獣

そして、人の容をした獣が喋る

「私の名は、ツヴァイ

我が主からは、水棲の道化クラークンなどと呼ばれるモノなり」

獣はその眼を見開き、名を告げる

ベガは体が震えているのが自分でもわかった

かつて

とある国の路地の裏

いまはもうないであろう、背徳の町の中で

残飯を漁り、財布を盗み、物をくすねて生きてきた時代

ひどいときは腐りかけの死体を食べたこともあった

金がなくなれば身を売り、物がなくなれば盗み、人の命ではした金を得て

穢れに穢れて、堕ちるところまで堕ちていき

空に輝く小さな星と、ただひとつの温もりが救いだった

そのころから共にいたあの人

私を護り、守り抜くと誓ってくれたあの人

そして、私が愛すると決めたあの人

あの人は誓ってくれたのだ、こんな汚い私を護ると

ならば

私は、このようなところでこんな化け物に喰われてはならない！

故に私はこう名乗る

「”永久の愛を貴方に”」

永久にあの人を愛すると誓った私は、死ねない

「魔法名というものです、いわば」

殺し名です

「クククッいいぞお前、最高だ

ああ、最高だ、今夜は実にいい夜だ！」

この体に力が満ちていく

つきの月光を浴びて、きらめく氷の結晶に指示を出す

” 私に刃を ”

すると空気中にいまだ存在していた氷の結晶たちがツヴァイの手元にあつまってゆき

長い刀をつくりだした

そして、ツヴァイは背中にある太刀に手を伸ばし

リン・・・と抜かれた太刀を左手に携え

氷によりかたどられた切っ先の鋭い刃を右手に持ち

「行くぞ、メイガス魔術師

今宵ここに神はあらし、汝の身のみが生きるための刃である

さあ・・・我が力と汝の力で」

存分に死合おうぞ！

二人の激突は早かった

ツヴァイは一気に踏み込み、いつのまにクロスさせていたのか両の刀で十字切りをかける

ベガは動かずただこう告げた

「風よ、狂え」

瞬間、ベガの背後より強風が吹き荒れる
ロープは風に煽られ、吹き荒れるが

ベガ自身はその強風にもとめていない

「ぬう　！」

突如吹き荒れる強風により飛ばされたツヴァイはノーバウンドでおよそ十メートルの距離を飛ぶが

ピシリ

その背後に突如氷の壁があらわれ空中で一回転したツヴァイは

「行くぞ」

その脚に力を込めて、発射の準備を開始し

刹那、爆発的な脚力により氷の壁は消し飛び高速でベガへ向かう――

つの弾丸と化した

だが

「甘い」

ベガの顔が微笑みことばを紡ぐ

「天よ、冒せ」

瞬間、ありとあらゆるすべてが停止する

空はざわつくのをやめ、風はピタリと止み、円陣をかたどっていた
炎の壁は消失する

そして

あらゆる全てがツヴァイに牙をむいた

風も、炎も、光も、地も、あたりにある鉄の塊すらもツヴァイに殺
到していった

それはまるで集団による攻撃のようだった
反撃の隙はなく、逃げ出す隙間も存在しない
無慈悲なまでの虐殺だ

そして

一つの鉄のオブジェが完成した

歪な形をした、直径五メートル前後の塊

鉄が融け、地により隙間がうめられて、風により冷えた鉄のオブジェ
もはや、中に存在するモノは生存できないだろう

「ふう・・・終わりましたか」

存外、たいした敵ではなかったようにベガは思った

あのような眼をする敵は久しぶりであったため全力をもって相手をしてしまった

「少し・・・オーバーキルでしたかね」

そういつてきびすをかえすベガ

いま部下達がもう一人の男と戦っているはず

ゆえに援護に行こうとベガは歩みを進め

ピシリ

「え・・・？」

ベガは自身の体から聞こえてくる音に戦慄した

ピシリピシリ

足が動かない、手が動かない、なにも動かない

腹にずしんとなにかがのしかかるような、それでいて体の内側から
万力でしめられるような痛み

そして、背後のオブジェが砕け散る

「オーバーキル？いいや」

ツヴァイは歩みを進めながらベガへ近寄る

「足りんよ、私を殺すには」

ベガは改めて戦慄した

「な、なぜ」

動かぬ口を必死に動かしベガは問う

当然だ、あれほどの攻撃を受けてまともにいられるはずがない

だが

「単純にして明快、私は人ではないのだよ」

その言葉を聞いた瞬間のベガの驚愕ははかりしれないだろう

なにせ、本来ならば荒唐無稽で信じれない発言をとてすんなりと信じてしまったから

すなわちそれだけベガにとって彼は怪物に見えたのだ

だがそれでも

「・・・なぜ、こんな・・・」

彼が無事なことには驚かない、彼が人間でないことはもうわかってしまったから

だが、なぜこの肉体が凍り付いているのだろう

相手はただの氷結系の力のはず

ならばそういった外気からの干渉をすべて拒絶するこのローブには冷気はとまらないため凍るはずがないのに

「それもまた単純明快

私の能力はね、氷結系ではないからだよ」

な、に？

そこで、ベガの思考は途絶えた

パリン

目の前の氷像が砕け散る

戦闘の高揚はどこへやら、冷めた顔で、なにも映していない瞳

体の内臓から、脚の先、その髪の毛一本一本すら凍り付いていた氷像が壊れても

ツヴァイは一人で喋り続けた

「私の能力は水態創造ウォータークリエイトといってな

氷結系能力などではなく水の元である水素と酸素を操る力だ」

水とは水分子のあつまりであり水分子とは水素原子と酸素原子からなる

その水素と酸素を操るツヴァイはそれらを化合し水分子としたあとそれを凍らせてあらゆる攻撃に使っていたのだ

そして、この能力の真髄はこれだ

「水素原子と酸素原子を化合させても私の力は一度支配下においた水素と酸素を操れる

そしてその原子の運動を止めることで、それを絶対零度まで引き下げられるのだ」

通常原子とはつねに振動しているものでこれが一定の熱を発している超自然的な水分子の運動により水の常温が決まるのもこの原子の振動によるものだ

そしてその振動をゼロにすることにより絶対零度まで引き下げる

そして、ベガの体が内側から凍りついた理由もまた単純

「単にお前の体の水を支配したにすぎん」

そしてあらゆる水を凍りつかせただけ

普段使用する氷の力はカモフラージュ、その真髄は敵の体内の水を支配しそれを凍りつかせることによる

絶対氷殺

戦闘中の高揚も真正面から戦う馬鹿を演じただけ

九つの切り札の最大戦力の正しい使い方の一番規模の小さいもの

「だが、俺はこのやりかたは好かん」

だって、この力は

「あまりにも、むごすぎる」

そうして、ツヴァイはこの場から去っていった

その背中に哀愁を漂わせ、なにを思っているのかわからぬ背中で

ただ彼は思うのだ

”誕生してから一日にも満たぬ我が身は”

こんなことをするために生まれたというのならば

”なんて”

哀しいのだろう、と

哀しむのはアインの領分だ

愛と哀を知るアインは愛するし哀しむもの

そして、それは他の分身たちにはないはずのもの

だが、それでも彼らは哀を知っている

胸のうちにあるなにかを知っているのだ

それはまるで

第十一話「ツヴァイの力」(後書き)

短い&しょぼい・・・

ですがツヴァイの能力初お披露目です

我ながらチートだと思います・・・

第十二話「復讐者」

「ふう、終わったか」

コンテナが立ち並ぶ場所でアインは一人立っている

先ほどまでいた敵全てはどこへいったのか、その場に存在するのは彼一人だけ

それもそのはず、哀れな狩猟者達は、化け物に食い散らされていた

そのどれもが首を切断され地面に横たわっている
溢れるような血の匂いと死の香り。

まるで血の風呂のようだとこの場を作り出したアインは一人ごちる

その手にある黒いナイフのようなものを消滅させながら

「ったく、フィアのやり方はやっぱ性にあわねえな」

九つの切り札暗殺専門の道化たる同胞を思い出しアインはぼやく

「まあ、楽っちゃ楽だな」

彼は別段特別なことはしていない

ただ、闇に紛れ一人ずつ処理していっただけ

だがやはりこのやり方はかれの性分にあわないらしく

「ちつとばっか、哀にかけるな」

このやり方　いわゆる無音殺人だが

これでは己の領分たる哀しみが見えずいまいち満足できていない。

死に方としては一等無慈悲で、だがもつともやさしい殺され方だ

気づかぬ内に死ねるなんて、人間は愚かだ

クククと嗤いながら、彼はやはりため息をつく。

「俺は死ねないものなあ・・・」

いくど人間の死を迎えようと再び主の心に舞い戻るだけ

主が死ねば自分達も死ぬかもしれないがあの主がそう簡単に死ぬとは思えず、

アインは早くも自らの不死性に嫌気がさしていた

心臓をナイフで刺す？無意味

頭を潰す？無意味

塵も残さず消滅させる？やはり無意味

ともすれば害虫よりも絶滅が難しいレベルである。

「まあ、いいや

ツヴァイはどうしたかね？

行ってみるか・・・」

己の同胞が相対する敵を思い出す

白いローブに白の髪をした美しい女だった

あんな女ならさぞ儂い愛と美しい哀を見せてくれただろうに

だが、今回の任務はツヴァイの試験運用も兼ねているため本命はツヴァイに譲らざるを得なかった

だからこそアインは願う

あの女の恋人でもいてくれれば、少しは楽しいかも知れねえな、と

A M 0 : 4 5

キャンパスのリーダーである佐々道童子は元スキルアウトのリーダーだ

いまだ若い彼が最大の暗部組織の下部組織のリーダーをやれるのも

そのころの経験からである

いまだ若い彼が最大の暗部組織の下部組織のリーダーをやっている
のにもそこそこの経緯がある

単純明快、彼は触れてはならぬものに触れてしまったのだ

裏の世界で狡猾な魔女と恐れられ、また若いものたちの心を癒す聖
女としても慕われる

黒川梓の心のなにかに触れてしまったのだ

結果、彼はいまここにいるがそれを後悔したことは一度もない

彼は知っている、いつも魔女の仮面をつけて、また聖女の仮面をつ
ける彼女が

いまだ十四歳でありながらも恐れられる彼女が、十四歳の女の子と
いうことを知っている。

キャンパスの面々が死んだと聞けば、魔女の仮面が嗤い

一人自室で涙を流しながら失敗を糧にしていることを知っている

だからこそ、彼は垣根帝督ではなく黒川梓に忠誠を誓っている

むしろ垣根のことがキライだ

それは当然である、なんせ惚れた女の現在進行形で好いてる男だ
その好意に好意で返すか返事をかえすならまだいいがあの男はどち
らもせずむしろ嫌がっているのだ

何度ブチキレそうになったかなど数えたこともないが、あの男には敵わないことはよく知っている

まあいろいろあるが簡単に言えば彼は垣根帝督がキライである

そして黒川梓に忠誠を誓う彼が思うことはただ一つ

死なぬことだ

自身が死ねば惚れた女が哀しむのだ
無論みずからの部下たちも死なせない

部下の死は、自らの死と同義である

彼にとって自らの死に思うことは一つしかない

黒川梓が哀しんでしまうこと

それだけしかないのだ、彼が自らの死を恐れる理由などこの二年で見えてきた彼女の悲しみを見たくないだけ

そして部下が死ねば彼女が哀しむ、故にかれは最高のリーダーだ

この一年部下の死者をだしていないことからそれはうかがい知れる
それもそのはず

惚れた女を哀しませちゃ、男が廃る

そんなことを普段から公言している彼はキャンパスのみならずスタ
ッフの面々にも慕われている

下部組織に入った女性はまず彼に憧れ、そして黒川梓の本質を知る
故に彼女達は公言はしないもののその胸の内に一つの想いを持って
いる

惚れた男の幸せのためなら、私達は修羅になる

暗部組織にいる人間にとって佐々道童子のような男は輝いて見える
のだろう

ただ一人の女のために突き進む彼のような男は裏の世界には少ない
暗部組織にいる女性達はそういう闇も見てきているため彼のような
男に憧れるのだ

そして

彼は今日も誓いを護るべく動く

一九学区の中を彼らはしらみつぶしに探していた

頭である童子を中心にくもの巣が広がるように彼らは移動していた

童子は支給されているトランシーバからの声を聞いていた

「リーダー、敵はいまだ見つからず」

「こちらもおりません」

前方からの連絡を聞いて、神経をさらに研ぎ澄ます童子

「注意しろ、敵は対能力者用の装備をしていると考えられる

AIMを阻害するタイプの支援系ならば意味はないが能力者たちを
潰す火器は総じて威力が高いからな

なんの能力も持たない俺達じゃ食らえば死ぬぞ」

学園都市の内部に内通者がいることを心理定規から聞いている彼ら
は総じて対学園都市の装備を頭に叩き込んでいる

「ッ！リーダー！反応があります！」

前方からの連絡に童子は機敏に反応した

「詳細報告！」

「前方およそ二百メートルより・・・叫び声が聞こえます」

トランシーバからの連絡に童子は眉を顰める

「叫び声・・・？」

瞬間、童子の本能が凍りつく

ゾクリ

「ッ！総員退避！！繰り返す総員退避しろ！」

童子はすぐさま振り返り逃走を開始する

まわりで探索を続けていた者達もすぐさま退避を開始したが

「貴様らだな？彼女を殺した連中の仲間は」

ズシン、と背後からの音と声に全員が振り返る

もはやここまできたら逃走は無意味、これより闘争を開始する

「総員、戦闘態勢」

童子は覚悟を決める

死なぬための、覚悟を

「ああ、どうでもいいんだそんなことは
今の俺の復讐対象は貴様らだけでなく、学園都市そのものだからな
だが」

目の前の黒のローブに黒の長髪の男は危険だ

その眼は狂気に溺れ、深い怒りに蝕まれている

だが、それでも

我々はスクールの下部組織なのだ

あの最強の暗部の下部組織が、こんなところで無様を曝け出せるか

「行くぞっ！死ぬなよおおおおおおお！！！！！！」

童子たちと総勢60名の軍団が一人の男へ殺到せんとした刹那

「それでもベガを殺した連中の仲間なら、ここでは殺せない」

童子の目の前に、化け物が出現した

二本の雄雄しい角、牛の顔をしているがその実二本の脚で立つ三メートルはあるかという巨体

屈強な肉体とまがましい輝きを秘めた瞳に、童子たちは思わず停止する

そして、男は言い放つ

「もっともつと苦しませて殺してやる」

男は嗤いながら、狂気に塗れて怒りを秘めた瞳から、涙を流す

「我が名は漆黒のアルタイル、魔術結社”聖なる光”
四天王の一人、そして」

男 アルタイルは涙を流し、狂気に嗤い、怒りに燃ゆる

「もはや護れぬ誓いだがそれでも我が誓いに異はあらず

” 永久の守護を貴女に ”

貴様らには理解できぬだろうが、それこそが我が名であり「

我が、生き様だった

かつて誰かを護ると誓った魔術師は、復讐の炎に身を焦がす
今も誰かを哀しませまいとする男は、あきらめない

例え 誰かがソレを笑っても、ソイツは俺が許さない

第十三話「闇の色」

A M 0 : 5 5

アインとツヴァイは合流しこれからの方針を立てていた

アインは返り血などはないが満足いく争いができなかったためかすこし鬱げな顔をしていた

ツヴァイは服が少々ぼろぼろになっている程度ですんでいるがやはりこちらも顔色は浮かなかった

「どうやら、テメエのほうもいろいろあったみてえだな」

アインは声に感情を込めずに言う

対してツヴァイはその言葉に面白くない感情を抱いたようですこし

不機嫌そうに

「フン、戦に些事は存在せず、ただ敗北と勝利しかない」

そしてそのまま歩き出したツヴァイに面白くねえなあと呟きながら
ついていくアイン

とりあえず一九学区にいる下部組織の連中の援護に行くという方針
になった彼ら

この二人は製造コンセプトこそ違うが戦闘への思い入れがありそれ
はある程度似通っている

アインは戦闘に際しなにかを求めるタイプであるしツヴァイもまた
戦闘になんかしかの感情を抱いている

目標を音もなく殺すフィアから見たら意味はわからぬだろうが
彼らからすれば闘争に意味を見出すのはある種の当然であった

方や愛と哀を知る一番目

方や正面からの戦闘のために作られた二番目

戦闘に際して言えばこの二人並の戦力は切り札内にもあと数体とい
ったところだ

故に、その報せは彼らにとっては美麗なユメで、悪夢でもあった

ズシン

アインとツヴァイが一九学区を目指し一七学区を歩いているときだった

「・・・おい、ツヴァイ」

アインは眉を顰め、ツヴァイへ呼びかける

対しツヴァイもまた眉を顰めている

「・・・ああ、氷蜘蛛が壊された」

それこそ超電磁砲級の攻撃でなければ壊れぬ絶対防壁かつ隔離壁が、壊される

その意味するところとは単純明快

そもそもここはどこだ？工業に特化した第一七地区

コンテナと工場と道くらいしか見当たることのないこの場所

そう、ここは 絶対能力進化計画の実験場ではなかったか？

そのことに思い至るや否や彼らは驚異的な速度で行動を開始した

「ツヴァイ！現時点の最高権限を発動する！

直ちにリミッター解除、全速力で第二〇学区へ逃走を開始！」

瞬間、彼らの姿が掻き消える　　とっていいレベルで動き出す

彼らの体は垣根帝督によりあるリミッターがかけられている

未元物質で作られた体は彼ら切り札個人からの指示である程度の無理が利くのだ

例えるならばツヴァイとベガの戦闘での最後の攻撃にツヴァイの体が耐えたこと

切り札本人の構築力が強ければ強いほど　　精神が強ければ強いほどその肉体には無理が利く

当然だ、なぜなら未元物質はあらゆる概念を受け取る物質
そして彼らはその未元物質に体を作られている
ならば必然、彼らにもその概念を与えることはできるのだ

だがそれもある程度のレベルまでだ、そしてそのある程度のレベルの上限を超えれば彼らはまず間違いなく時間が立てば消滅する

だが、それでも一方通行に現時点で邂逅するのは危険

「計画に支障が出るッ！急げツヴァイ！」

そうして彼らは一七学区より逃走した。

A M 1 : 3 5

急ぎ一七学区より逃走し二〇学区へと逃げたアインとツヴァイは現在第一九学区へ来ていた

二〇学区にはいった時にリミッターを戻したが念のため最高速で第一九学区へ逃走したアインとツヴァイ

第一九学区にて戦闘中であるはずの下部組織の面々を探していたが

「静か過ぎるな・・・」

アインはその顔に疑念を浮かべていた

戦闘が行われているにはすこし静か過ぎる

全体的に学園都市からしたら前時代的な町並みの第一九学区

現在の時刻ではおそらくほとんどの人間は眠りにについているだろう

無論、この時間にも蠢く闇はたしかに存在するが

ふと、ツヴァイがなにかを見つける

「アイン、あれをみてください」

ツヴァイが指差した先には、一人の倒れている男

黒の作業服に青の帽子をした男だが闇の者特有のにおいがしていた

「・・・アレはうちの連中だな」

アインとツヴァイは急ぎ倒れている男に近づきそして見る

まるで、竜巻が通った後のような光景だった

建物は削り取られ、地面は抉られ、人がまるでゴミのように倒れている

そして、そのどれもがキャンパスの面々だ

それを見たアインの行動は早かった

彼はすぐにポケットより携帯を取り出し

「・・・俺だ、スクールの垣根帝督の私兵
ナインジョーカーズ
九人の道化のアインだ、よろしくな

ああ、その任務についてだよ、一九学区にてキャンパスが敗北した
これを即座に回収しろ」

そこまで言ってアインは携帯を切り

「行くぞツヴァイ、戻ってマスターに報告する」

現状、敵との交戦はあまり好ましくない

「了解」

彼らの体はつい先ほどリミッターを切り文字通りの全速力で動いた後
そんな状態で敵と戦闘すれば表への被害が尋常ではなくなってしまう

それは、暗部組織としては致命的

そして表への被害とは、彼らの主である垣根帝督の計画の妨げにな
ってしまう

そうして彼らは垣根帝督のまつ本部へ戻っていった

一日目前日 PM 11:45

垣根帝督と黒川梓は第一〇学区にいた

垣根提督はいつもの制服姿、黒川梓は体のラインが出るきらびやかな赤のドレスだった

この二人、並んで歩けば美男美女のカップルにしか見えない。

梓はいつもどおりに帝督の腕に腕を組み、ご満悦の表情をしている

帝督は帝督でいつもどおりに腕を組まれ顔に苛立ちを浮かばせていた

彼、垣根帝督は公私を分ける男である

そして仕事の場合ほんのわずかな隙や情報が命取りになることも知っているため自身の女性嫌いを隠すのだ

彼にとって彼の女性嫌いとは命取りになるほどの弱点に成り得るほどのレベルである

周りから見たらただのツンデレ、もしくは思春期の中学生にありが

ちなものにしか見えていないが

「おい、メジャーハート心理定規」

「なにかしら、ダークマター未元物資」

苛立ちを浮かべた顔で梓に問いかける帝督とご満悦の顔をしたまま
で答える梓

ちなみに佐々道童子はこの光景をいつも微笑みながら、しかしさび
しそうに憂いを秘めた表情で見えてそれがまた女性達の心に響く
のだがそれはまた別のお話

「いくらなんでもくつつきすぎだろ
これじゃ逆に俺が女好きみたいに見えちまう」

そんな評価は断じてゴメンな帝督

だが梓も帝督と腕を組めるなど仕事するときだけなので断じて離れる
つもりはないので

「あら、間違った情報を敵に植え付けるのはいいことじゃない」

「ぐっ……誰だそんなこと教えた奴はッ！」

「貴方でしょう……」

その通りだった

そうして夫婦漫才が続けている二人の前に一人の男が現れる

カッン

と革靴かなにかだろうかと
音を立てて歩く男がいた

帝督はすぐさまそちらを注視し梓もまたそちらを見る

「これはこれは初めまして、あなた方が学園都市の迎撃部隊でし
ょうか？」

黒と白のまだら模様の髪にこれまた黒と白のまだらのローブ
その眼すら両の眼は黒と白に分かれている

まるで、人工的に作られたような男だった

そんな男に帝督は警戒のレベルを一つ上げながら答える

「ああ、そうだが？侵入者」

帝督は答えながら厄介なことになったと眉を顰める

敵はまず間違いなく魔術師だ、そして魔術師はたいてい科学側の視点からいってトリッキーな攻撃をしてくるモノ

だが、男は嗤った

「ククク、クハ、ヒヤハハハハハ！」

どうしようもなく可笑しいように男は嗤う

「こんな！こんな子供が？」

この私、魔術結社”聖なる光”の四天王である

この灰燼のデネブ様の迎撃者がこんなクソガキ！？」

男　デネブは嗤いながら言葉に怒気をにじませるが
それでも帝督たちを見下している

「アハハハハ！！なんだ、こんなものですか！学園都市は！私テッキリ意味不明な科学の産物でも出してくると思ってましたよ！ああ、こんなことならあのお方が出張らなくてよかったですまったく、数時間前の私はなんて愚かだったんでしょうか！

この程度の障害しかさしむけられない学園都市はやはり大したこと
はないようです　ガッ！？」

瞬間、彼は背後の壁に縫い付けられていた

「イツ！？ガッ！アアアアアア！！！！！私の！私の身体が！！

」！

純白の羽が彼の手首と足と肩を貫通して壁に縫い付けている

そして、それを為した張本人である垣根帝督は

「オイ、三下・・・お前本当に哀れだな」

「ガッ！？ヒイ！」

帝督はデネブの腹に脚をつけその顔をにらむ

はつきりいつて今の帝督は蟲の居所が悪い

学園都市をけなされたからとかそんなことはどうでもいい
そつやって侮って死んでいくバカ共は腐るほどに居るからだ

だが

「敵の前でご高説とは、本当にくだらねえクズだな」

そこだ、彼にとってもっともムカついたことは単純に

デネブがこれ以上この場で喋ることが許せなかっただけ

単純だ、コイツの話し方が気に食わなかっただけのこと

帝督はそのまま脚に力を込めて

「なあ、内臓を抉り出されるのはどんな気分なんだろうな」

悪鬼の笑みだった、口元は裂け眼には悪意と快楽しか存在しない

この臭い、この匂いこそ、彼ら暗部の正体だ

「ヒイイイ！」

デネブはもがく、すぐに外れそうな羽はしかし外れない

当然だ、垣根帝督が作り出した羽はそうそう外れるはずがない

そして

「人間解体の時間だ、授業料は」

デメエの命だ

デネブがこうまであっさりと負けた理由は一つ

学園都市の闇を甘く見たことだ

学園都市の闇は、おそらくどの勢力の闇よりも蠢いている

そうして、跡には血と臓物の海が残っていた。

第十四話「己が障害」

A M 2 : 3 5

帝督と梓は現在部屋でアインとキャンパスの面々を待っていた

帝督はすでにシャワーを浴びバスローブ姿、梓もまたすでにドレスは着ておらずシルク製の赤い長めキャミソールを着ている

このキャミソールが見る人が見れば たえば佐々道童子

即座に鼻血を出すほどになんというか身もふたもない言い方だがエロい

だがそこは我等が垣根帝督、そんな彼女の姿を見て彼はいつもこう言うのだ

「この淫売が」

彼女とて帝督がこういう格好を嫌っているのはわかってるし彼がいないときはスウェットだが

それでも好いた男の前では可愛い（本人視点）格好でいたいと思う

のは乙女心というものである

そして何度罵倒を受けても、この格好をやめないのもまた、一つの乙女心だ

そんな二人は明日の 既に今日だが 考えていた

「明日はどうするのかしら？寮に戻るのも流石にこの時間ではマズイでしょうし」

彼らは基本的に学生だ、すなわち普段は寮で生活しているが休日や放課後はこの家に来ていることが多い
簡単に言えば彼らにとって学生寮は居心地が悪いのである

「たしかにそうだな、だが」

帝督はそこまで言うてから顔に壮絶な笑みを貼り付ける

「寮に戻る時間もなければ理由もない」

そして、アインとツヴァイは帝督と梓の待つ部屋に入っていく
それは単純に報告のためだ

一七学区にて侵入者と思われる魔術師と戦闘、これを撃破

一方通行が接近してきたため即座に逃走

またこのさいリミッターを解除したため後の戦闘は不可能

一九学区にて撃破されたキャンパスを発見、これをスクールの下部組織に依頼

その後敵の姿は発見できず、そして今現在本部に戻る

今回の戦闘は簡潔にまとめると上のようになる

そして

三つの侵入の内すくなくとも二つが魔術師と確定しているため必然的にあることがわかってくる

「アイン、ツヴァイお前達はとりあえず『部屋』に戻れ」

「あいよ」「承知」

二人の姿が掻き消えその場には梓と帝督が残った

帝督は立ち上がりバスローブを脱ぐ

そしてすぐさま壁にたててある学生服に着替え言う

「一九学区へ行く、お前はここに待機しろ」

そのまま、垣根帝督は夜の闇に消えていった

後に残るは

「・・・いきなり脱がないでよ、びつくりするじゃない」

カァーッと顔を赤らめる梓が残っていた

彼女はそのままペタンと床に座り込み

「・・・うう」

頬に手を当てキュンキュンしていた、流石にこの六年で彼女もまた狂ってきているようだった

A M 2 : 5 0

流石に急ぎすぎたか、と帝督は思った

本部を出てからおおよそ10分

帝督は一九学区にいる

戦闘の爪あとをみて彼はある種の確信を得る

”やはり魔術師か”

他の二つの場所にて魔術師と交戦したためほぼ間違いなく魔術師であることはわかっていたが
この光景をみてさらに確信する

が 帝督には二つ気になることがあった

そう、何故敵はキャンパスの面々を殺さなかったか？

そこがいまいち帝督には理解できなかった

そして、キャンパスを蹴散らした敵はどこにいる？

その二つが帝督にとってのなぞ

まあ一つ目のほうはそのうちわかるだろう

そして二つ目も今からわかる

そしてこの場所に來たのは敵が魔術師であることを確信するためだが

同時に梓から離れるという目的も存在している

帝督はポケットから携帯を取り出しある場所へ掛けていた

「・・・もしもし、俺だ

アレキスターに繋いでくれ」

これが梓から離れる目的、梓は帝督がアレキスターへの連絡方法を持っていることを知らず

そして帝督もそれを教えるつもりはない

「私だ、何か用かね？未元物質」

携帯から流れる音は非常に美麗で綺麗な音質だが

そのおかげでアレキスターの不快な声がよく聞こえてしまう

「・・・侵入者は魔術師だ」

「・・・ほう？」

携帯越しでよくわからないがおそらくはほんの少しの驚愕といったところか

「　聖なる光」と名乗っていた

三箇所からの侵入の内二組の名は確認した

”純白のベガ””灰燼のデネブ”だ」

そこで帝督は言葉を切る

ここでアレキスターに連絡をつけた主な理由は三つ

一つは単純に報告だ

そして二つ目に

「それで？こいつらのことをお前は知っているか？」

そう、アレイスターに尋ねたかったのだ
これでこいつが知っていれば話は早い

「・・・ああ、知っている」

ビンゴ、帝督は内心ガッツポーズである

「そんじゃ次、学園都市内にいまのところ敵はいるか？」

これが三つ目、取り逃がした侵入者はいまもお学園都市にいるか
どうか

本命は二つ目だがこれも一応大事である

「少なからず滞空回線では見当たらないな」

つまり、だ

「体勢を立て直すつもりか・・・」

携帯越しに不快な笑い声が聞こえる

「ふふ・・・あのモノが来るとはな」

「ん？あ、そんでその”聖なる光”ってのはなんなんだ？」

帝督は今本部に戻っていた

そして先ほどのアレイスターからの情報から今回の仕事の難易度を
決めているところである

「・・・こりゃヤバイな」

先ほどのアレイスターの情報が確かなら

「少なくとも、ナインジョーカーズ九人の道化では束になっても敵わない」

それこそ九つの切り札の真価を発揮しなければ敵わないだろう

アレイスターは言ったのだ、それほどの化け物の名を

だが、帝督の顔には笑みが浮かんでいた

己の従僕では敵わない、だがどうした？

そして自身すら本気でやらねば即死亡する、だがどうした？

たとえ勝つてもなにかを失う、だがどうした？

注意事項など先刻承知、この闘争に勝てば俺はさらなる力を得られる

それは、計画の成功への近道だ

そして、帝督は未だ見ぬ敵を、渴望する

「聖人を越えた聖人 上等だ

聖人ごときに負けられねえんだよ、俺は」

彼、垣根帝督は己の障害を叩き潰すことが快楽になる人間である

それは障害が強大であればあるほど強くなる

・・・そこ、リドヴィア？とか思った人、特別に心理定規に抱きついてよろしいです、ただし死ぬ覚悟があるのなら

A
M

3
:
2
3

「心理定規、良い知らせと悪い知らせどちらから聞く?」

梓は眉を顰める

この男がこんな風におどけるなんて、あんまりないからだ

「・・・どうしたの?」

私は本気で心配していた

「いいから選べ、淫売」

こ、こいつは・・・!

いつもいつも人の事を淫売呼ばわりしてッ
!

私は処女よ!バージンなのよ!乙女なのよ!?

ある小説には「女子中学生に乙女はいない」というセリフがあるが
スルーしよう

「ッ・・・はあ

じゃあ良い知らせからお願い」

だが私は知っている、経験則で知っている

この男がこういう態度を取るのが女性を自分から離れさせていくものだと知っている

この男が本当はとても優しく、とても傷つきやすいことも知って

いる

そして

「おお、そうか

良い知らせからだな、よしわかった」

この男が

「喜べ、心理定規 今回の仕事の難易度が過去最高のSクラスに跳ね上がった」

意地悪だということを知っている

「はあ？Sクラスですって？」

帝督は自身の中である基準を用いて仕事の難易度を決めている

D～Sまであり、Dならスタッフ行き、Cならキャンパス行き、Bなら私達の息抜き、Aなら私達の本気

そしてSならば帝督と互角以上

BとAの差が激しいが気にしてはいけない
おそらくこれからBは九つの切り札とやらが担当するだろうが
いままでだってAすら2回程度しかなかったのにまさかのS

「・・・私も出なきゃダメ？」

はつきり言おう、三秒で死ぬ
帝督と互角以上の敵と帝督の本気がぶつかるならはつきりいって半
径3キロにはいたくない

「いや、お前は留守番だ

怪我をしているキャンパスの面倒を見ておけ
今回はあいつらも留守番だしな」

確かにそれはすぐとても助かる
だが

「アナタ一人で大丈夫なの？」

敵は帝督と互角以上
すなわち、勝てるかどうかわからないのだ

だが、帝督は歳相応の微笑を返し

「安心しろ、俺は死なない」

ア・・・

カーツ

梓の頬が真っ赤に染まる

その真っ赤な顔のまま梓はあたふたとして

「じゃ、じゃあ！」

悪い知らせってなんなの？」

なんとか会話をそらそうとする梓に帝督は苦笑しながら

「俺の援護に暗部組織『アイテム』が動員されることだよ」

帝督は心底嫌そうな顔をしている

「あちゃー……麦野かぁ……」

帝督は基本的な女性を突き放す

なにせ六年一緒にいる私ですら触ったことなんてあの日以来一度もない

故にたとえ仕事でも女と一緒にだどぴりぴりしているのだ

流石に私は精神系能力者ということもあってそういったことに敏感だしもう六年の付き合いなのであしらいかたもわかるけども

私はそこそこ古い知り合いの女の顔を思い出して嘆息する

「まあ……ガンバレ」

それは果たしてどちらに送った応援だったのか

これから「メルトダウン麦野沈利」と仕事をしなければならぬ「ダークマター垣根帝督」へか

これから「ダークマター未元物質」と仕事をしなければならない「マルチタウナー原子崩し」へか

はつきり言ってこの二人は基本的に相性が良くない

私が間にいなければ殺し合いを始めてもおかしくないほどに

ああ、神様 今日だけはあなたの僕になるのでどうかあの二人が世界を破壊しませんように

普段から神様はイヌのクソにも劣る×××などと言っている人間がいきなり改心したところであまり意味はない

ここからは作者からの読者様方へのメッセージです

えー、皆様、カラミティ・クラウドと申します。

まずは本作品「とある科学の末元物質」を読んでいただき誠にありがとうございます

そして皆様へ感謝を

なんと、本作品の総合評価P t が1000を越えました

私、この表示をみたとき

（。°。）

リアルにこんな顔をしていたでしょう（笑）

これも皆様のおかげでございます。

本当に、ありがとうございました

これからも「とある科学の末元物質」をよろしくお願いします。

なお、「死戦」編が終了した次のストーリーですが・・・

一応二つ考えてあるので皆様お楽しみにしてください^^

でわ、いずれまた。

第十五話 「暗躍する影」

A M 3 : 2 3

そこは学園都市の外

日本にある数少ない教会だ

ステンドグラスからは月の光が差し込み一人の男を照らしている

黒の長髪に黒のローブ

祈りをささげるその姿は泣いているようにも見えた

彼の名前は漆黒のアルタイル

かつての名などなく、愛しき人のつがいとして生きてきた彼の名だ

その祈りの姿はまるで神への祈りだが

彼は神に祈っているわけではない

むしろ彼は無神論者だ、神はおらずただただ世界は回り続けるだけ

彼は今、来るべき時のための雌伏の時に入っている

ただただその時のために、牙を砥ぎ、殺意を磨ぎ、心を研ぐ

「アルタイル」

そんな教会へ入ってくる影

金の長髪を腰まで伸ばし白のローブに身を包む女性だ

その目は深い蒼、だがなによりも目を引くのは彼女のローブ

あちこちに黒の十字架が描かれている

「どうした、スピカ
準備はできたのか？」

アルタイルはそんな彼女 スピカへ見向きもせず answers

「・・・アルタイル

本来なら私は出るべきではない

アナタも私の体のことは知っているでしょう？

もし学園都市に適合者がいたら私は
」

スピカはそこまで言っ言葉を切った

アルタイルは眉を顰めるが無視して祈りを続けていた

ペタリ、ペタリ

足音だ、はだしで床を歩くときの音

ペタリ、ペタリ

不吉で、不気味な音だ

「やあ、アルタイル、スピカ

ご機嫌はいかがかな？」

鈴の鳴るような美しい声、だがその声はとても中性的で男か女かわからない

がその人影は女性のようにだ

なにせ、腰にボロボロの布しかまとっていないにもかかわらず、その胸には大きな乳房が二つ存在している

手足とわき腹にはなにかに焼かれたような跡がありそれは背中にも存在していた

なにかの拷問の跡だろうか、とにかくその人影はまさしく変人である

「キリエ様・・・」「キリエ・・・」

アルタイルとスピカの声が重なる

二人とも目を開いて驚愕しているようだった

「やあやあ、久しぶりに地下からでてきたのだけれど言っておいた件はもう済んだのかい？」

この上半身を露出させている変人こそ、彼らの長

魔術結社”聖なる光”の首領にしてアレイスターをして”聖人を越えた聖人”と言わしめる存在

そんな彼からの問いにアルタイルは膝をつき頭をたれ

「申し訳ございませんぬ

このアルタイル、とんだ失態でございます」

ギシ

歯軋りの音だ、アルタイルがその牙をかたくかたく閉じている音

今にも爆発しそうな殺意と狂気をその身に溜め込んでいるのは彼の精神力の強さを物語っている。

「あ、そ」

対してキリエは謝罪に興味などないかのようにため息をつく

「デネブと・・・ベガ、を・・・失いました」

アルタイルの殺意が膨れ上がる、そばにいたスピカが眉を顰めるほどの殺気だ

だが、それでもなお爆発していない

だが

それは次の瞬間、爆発する。

「あ、そ」

瞬間

牛の顔をもち二本足でたつ巨大な怪物が現れ、キリエを殴り飛ばした

ズン、と

キリエはそのままノーバウンドで教会の壁を破り外の森までとんでいった

これに驚愕したのはスピカだ

恋人を失い激昂するのはわかるがまさか主に攻撃するとは、と

「ッああああああ！！！！！！！！キツサマアアアアア！！！！

ベガを！ベガの死を！あの人の死を嗤ったな！」

アルタイルは頭をたれ跪いていた格好から頭をあげ目を血走らせていた

まるで獲物を狙う獣のような姿だ、そしてアルタイルの後ろには怪物が控えていた

巨大な化け物の腕力で殴り飛ばされたキリエを見てスピカは驚愕している

だが、彼女はキリエを心配してはいなかった

次の瞬間

「弱いな、アルタイル」

ザッ

その肉体にいつぺんの傷をつけずにキリエは現れる

それを見たアルタイルに衝撃はない

これでこそキリエ、それでこそキリエ

我等が主たる者なり

自らの主に弱いと言われ冷静になったのだろう

殺意は収束し、アルタイルの内に収まっていく
背後の化け物も同様、塵となって消えていった

「申し訳ございません、我が主
先の侵入は失敗に終わりました
ですが、今一度スピカと共に」

アルタイルは最後まで言葉を紡げなかった

ズドン

「ガッ、ハッ!？」

今度はアルタイルが吹き飛んでいた

背後にあった十字架にぶつかり停止、そのままおちる前にキリエがうつく

ガンッ

キリエの足がアルタイルの胸を抑えていた

ギリギリ・・・

キリエは空中に立っている　ようにしか見えない
空中に左足で立ちながら右足でアルタイルを抑えている

「弱いぞ、アルタイル

だが　まあいいだろう

スピカをつれていくといいさ」

そうキリエが言ったときにはもうキリエはいなかった

「ありがたき、幸せ」「・・・わかったわ」

P M 2 : 3 5

暗い一室

窓はなく光源もないその部屋の中心で

椅子に座り机にむかいなにかを書いている男がいる

彼の名前は篠乃木 シノノギ 飛鳥 アスカ

学園都市の暗部の中でもかなりの古株だ

だが彼の名は広まってはいない

彼のかつての仕事は主に暗殺

音もなく忍び寄り、音もなく殺し、音もなく去る

まさしく一流の暗殺者である

だが、彼は今、狂している

一心不乱に紙になにかを書いている、意味不明な文字の羅列だ

" g , t u x i u n s i s u . l o i k x i s i , m a g i , e i
u s k x u s n . a i i u k r u t r . k o r u x i s u
"

それは暗号だ、この文字の羅列を一枚の紙に書いて、また次の紙へ、
また次へ、また次へ

これは魔術的な手紙である

送り先を認識し、送る内容を認識し、送り先の羊皮紙に映し出す

彼は、魔術師であつた

だが、かつて暗殺を生業にしていたころの業とはまた違う魔を扱っている

「キヒ、アハ」

唇から、声が漏れていた

まるで、獣の如く、嵐の如く

その体の内側でなにかが蠢いていた

彼はいまあらゆる魔術的な組織へランダムであの一文を送っているのだ

そうして、その一文を解読しえるほどの組織にはその一文からまたあらたなものが浮かび上がる仕組みになっている

そして、その一文は、あらゆる魔術的組織に衝撃を与えるものだった

” 学園都市統括理事長であるアレクスターは魔術師、エドワード＝アレクサンダー＝クロウリー”

彼は狂している、まず間違いなく狂っている

学園都市を掌握する怪物に、反逆しているのだ
これを狂しているといわずになんといえよいのだろう

だが、それでも彼はその手を止めない

その目は狂気に塗れているが、その奥底にはいまだ、使命感のよう

なものが残っていた

「アハ、アハハ、レア、アハハッハッハハハ！！！！」

ドロリドロリと、悪意の塊が蠢きだす

向かう矛先はただ一つ、窓のないビルの主

「アハッ！カハハハハッ・・・アレイスタアアアアアアアア！！！！」

部屋全体が揺れる、ゆれる、揺れる

捻じ曲がった悪意と、純粹すぎる殺気と、彼の一つの願い

彼もまた、学園都市の闇に吞まれた哀れな羊、だった

第十六話 「漢」

P M 5 : 4 8

広い体育館のような場所だった

およそ三百は収容できる大広間に人が寝ている

その広間の上の階では佐々道童子が寝ておりそのそばに黒川梓と垣根帝督はいた

童子のそばにはキャンパスの治療部隊のリーダーである女がいた。

帝督は無表情、梓はあきれたような表情だがその瞳の奥にはわずかな心配の色がある。

非常に重苦しい空気のなか帝督が口を開く

「なあ、梓」「なによ、帝督」

相変わらず無表情な帝督ににらみながら言葉を返す梓

そばでみている治療部隊のリーダーは心なし冷や汗をかいていた

「・・・言いたくはないんだが

コイツはたぶん二度と目を覚まさない」

ドクン、と

誰が発したのだろう、大きな動悸の音

梓は顔にわずかな怒りと哀しみを、仮面の奥に灯している。

「そう、それならそれでいいのだけれど

もし起きたら情報を聞かなければならないでしょう？

私の能力では読み取りまではできないのだから」

まるで本心でいつてるように聞こえるがここにいるものは皆、彼女の
の本質を知っている

故に皆が皆、その心の奥にある希望を見てしまった

だが、帝督はさらに追い討ちをかける

「ムダだ、コイツは起きねえよ

いくら待っても、なにをしようと、どうしようもなく

コイツは今、緩やかに死んでるよ」

ビクリ、と梓は肩を震わせる

ああ、帝督は私の心を知っている

鉄の仮面で封をして、闇に吞まれぬようにしていた仮面の奥を覗か
れている

そのせいだろうか、彼女は初めて本音を口にする

「ッ、目を覚ましてよ・・・童子」

その場にいたのは、暗部に所属する心理定規ではなく

人の心を弄ぶ魔女でもなく、人の心を癒す聖女でもない

ただの、十四歳の女の子が居た

「プッ」

突如、その場に似つかわしくない笑いの音

梓はキッと帝督をにらみつける
が、帝督ではなかった

音は、童子からだった

肩を震わせ、腹筋を酷使して笑うのを堪えているようだった。

「プツ・・・プハッ、アハハハハハッ！！！」

だがそれも限界のようで、ついに童子は大声で笑い出す

そこへ帝督が

「やっぱ起きてたか、このガキ」

実際の年齢では四つほど上の童子にたいしてガキとは少しおかしいが精神年齢四十代の彼の言葉だとすると童子は笑うのを抑えきれない様子だが帝督に言葉を返す

「うつせーよ、プツ、俺が死ぬわけねえだろうがクソガキ」

とてもではないが己のリーダーに言う言葉ではない、が

佐々道童子は別に帝督に忠誠を誓っているわけではないし帝督も別に駒は使いりゃそれでいいという考えなので特にとがめたりはしないのだ

「だがまあ、ドッキリは成功したみてえだな

梓様、俺は死にませんよ

言っただけでしょう？」

”俺は貴女の為には死ねない”

かつて童子が梓に言った言葉だ

その言葉にどれだけの想いがこもっているかは誰の目にもあきらかで
それゆえに涙した女性もいたはずだ
この言葉はこう続く

”だから貴女の為に生きる”

自らが死ねば貴女が哀しむというのなら、俺は絶対に死なない、と

明日の命の保障もない世界で、生きて生きて、生きあがくと

彼はかつて己に誓った

故に、彼は死なぬと梓に言う

「だから、心配なんてしなくても大丈夫です」

童子は微笑みながら、体の痛みに耐えながら

梓に心配かけまいと、必死に微笑んでいた

傍らにいる治療部隊のリーダーは己の心が締め付けられるのを感じた

なんて、尊いのだろう、と

間違いなく彼は死にかけだった、いままでも何度もそんな目にあっ
てきた

それでも、己が願いを、心を裏切ることなくこうまでまっすぐに梓を想っている

そんな彼を見ているとふとしたときに思ってしまう

ああ、私もこんな風に想われてみたかった

暗部にいる女性陣は大抵男にいい想い出が存在しない
明確な目的を持って暗部に所属するほうが少数である

故に、童子のようなまっすぐな漢^{オトコ}、英雄に惹かれるのだ

惚れた女のために戦場へ赴き、惚れた女を哀しませないために生き

そして必ず戻ってきてくれる、そんな最高の男

そんな彼女の心を読み取ってかどうかはわからないが梓はジト目で童子を見て

「この女っタラシ、帝督と良い勝負だわ」

その言葉に反応したのは二人

「俺がこの熱血バカといい勝負だあ？」「俺がこのホモ野郎と良い勝負ですって？」

そしてにらみ合う二人

まさしく水と油である

そんな折

視線で火花を散らす両者にある宣言が下される

「ああ、そうだ二人とも」

梓の声が両者の視線を引き寄せる

両者共に呆けた顔をしているが治療部隊のリーダーはなんとなく察しているようで

梓は二人につこりと微笑みながら

「今からおもいつきりぶん殴ってやるから覚悟しなさいな」

ピシッ

空気が凍りつく音がした、と後に治療部隊のリーダーは語る

そりゃあ、こつなるよねえ

部屋の中でこだまする悲鳴を聞きながら、治療部隊のリーダーは部屋を後にした

・・・私の名前は東雲^{シノノメ} 縁^{エニシ}よ
なんで名前がでてこないのよ!!

こうして、序盤戦である一日目が終了した

漆黒の星は復讐を誓い、乙女の星は誓いを胸に

道化は育ち、英雄は帰還し、姫君は安堵を浮かべる

そして、暗殺者と暗殺者のゲームが開幕する。

第十六話 「漢」(後書き)

一日目終了です。

二日目は飛鳥VS初登場フィーアになります

第十七話 「狂える男の衝突」

A M 7 : 3 2

「前置きは捨て置く
単刀直入に言うが、私の要望にこたえていただきたい」

ボウ、と

淡い青の光に照らされた男は手になにかの石を持ちそれに話しかけている

ザザッザザッ

その石に巻きついてある糸の先にももう一つの石がありその石は振動していた

” ザザッ・・・ザ・・・こちらイギリス清教 ”

チッ、と男は舌打ちを鳴らす

この通信魔術だが急ごしらえの魔術ではわかりやすくいえば電波が悪い

” 貴殿の名と所属を答えよ ”

男は再び舌打ちをする

前置きは捨て置くといったはず、だがこれが組織というものだろう

一つため息をつきながら男は喋る

「こちらは篠乃木 飛鳥、先の暗号を送りし者だ
単刀直入に言う、こちらの要望に答えていただきたい」

” ツ！？貴方が、あのレポートの提出者だという証明をいただきたい”

情報が持つ危険を理解したのだらう、いわゆるイギリス清教の窓口である男はいくばくの緊張を持っていた

「先の暗号に残る魔力残滓を照合しろ、そんなこともできないものが窓口であるはずがないだらう」

そして男 飛鳥は一度石から顔を離した

照合は無論出来るはずだ、できないはずがない
だが照合自体はすぐに済むだらうが上の人間の指示を仰がねば始まらないだらう

そんなことでは、俺が殺されてしまう

飛鳥は一つの事実を認識し、それに対して恐怖を抱いていた

そしていくばくかの時がたち

” ザザッ・・・こちらイギリス清教、汝の魔力と先のレポートの魔力残滓の照合が完了した”

やっとか、とかすかな苛立ちをふくませ飛鳥は石を顔に近づけ言う

「では、こちらの要求を伝えよう、要求は一つ」

”アレイスターの殺害に協力せよ”

そう、彼は自身が死ぬことそのものを恐れているわけではない

自身が死に、アレイスターを殺せなくなるのが怖いのだ

今でさえようやくかすかな理性を取り戻しているが、彼は壊れているのだ

どうしようもなく、どこかで壊れて、闇に吞まれてしまった、一匹の鬼

それがいまの彼だ

「魔術サイドには絶好のタイミングだろう？
科学サイドの長を殺せるのだから」

本当はローマ正教と取引したかったのだがローマ正教には嫌（きら）ななにかを感じ断念、次善の取引先としてイギリス清教を選んだがまだロシア成教がある

故にここは強気ででる

そしてもう一つの石は振動し彼にイギリス清教の言葉を伝える
だが、その返答は彼をあきれさせる結果に終わる

”我等が総大主教は貴殿を保護する意向を示している、なお現時点ではその要求は通らない”

ブツンツと

糸が切れる音がした

彼が手に持つ石にまかれた糸が切れる音だ

電話でいえば電話線が切れた状態、彼が自分で切り落としたのだ

保護？そんな甘っちょろいモノはいらない

我、求むはただ一つの破壊のみ、それ以外は必要ない

「・・・イギリス清教もダメか

ならばロシア成教か、チツ準備を急がなくては」

彼はそのまま地下室へ向かう、あの霊装を作るにはそれなりの準備がいるがあの霊装は使い切りなので彼はそれを再び作りに行くのだ

ザッ

瞬間、彼の背筋になにかが走る

彼はすぐさま反応し見えないはずの空をにらむような顔をする

「・・・見つかったか？」

感覚的に言えば魔術関係ではない、おそらくは科学側
そしてこれだけの科学を扱える人間は、おそらく暗部
ならばその後ろにいるのは、アレイ

彼の思考はそこで途絶える

ゾワッ

部屋中に、悪意と殺意が巻き起こった

その中心にいる彼はその目を見開き、憎悪と狂気にめれた瞳を晒す

「アアレエエイイイスタアアアアアアアアアア！！！！！！！」

殺す、彼の脳内にはそれしか存在しなかった

彼女を殺した我が怨敵、私を壊した我が宿敵、僕が殺す最後の仇敵

”アスカ、逃げて”

彼女の最後の言葉が浮かぶ、慈愛に満ちた彼女の言葉

彼女の日常は、彼にいつも光と安寧を与えていた

彼女の言葉は、彼に救いを与えていた

だが、彼女の最後の言葉を思い浮かべても、今の彼は殺意をたぎら

せるだけだった

化け物と化した彼の中のただ一つ残る想い出は、愛しい人の笑顔だった

「まずは準備を、準備を！

彼のゴミクズを殺すため！なべにくべようその命！

魔力などスキなだけもっていけ！命すらも与えよう！

だが、あの男だけは殺しつくせよ！！」

”聖杯”、と

A M 11:23

帝督はドーム状の建物にいた

窓はなく、光源が一つしか存在しないその空間の中心には円卓が存在し十の椅子が存在する

彼は腰掛けることをせず、言葉を紡いだ

「起きろ、ファイア」

瞬間、一つの席に影が現れる

それはまさしく、影と言うべきものだった

影はすぐに椅子から立ちあがり帝督の前に移動し臣下の礼をとる
全身を黒い装束に包み外界に露出しているのはその瞳のみ
起伏のいい肉体はその黒装束の内側の人物のポテンシャルをあらわしていた

「・・・おはようございます、マスター」

その声は凜と、鈴のなるような綺麗な音である

「仕事だ、一人の男を殺せ」

帝督はそんな彼女 ファイアを見ながら言う
対し、ファイアは跪き頭を垂れていた格好から顔を上げて答える。

「・・・承知」

フィーアはそのまま建物から出て行った

帝督はそんな彼女を満足気に見て、ふと気づく

「アイツに目標のことを教えただけ？」

ボタン、と建物唯一の扉が開きフィーアが入ってくる

彼女は表情の見えない黒装束だがその瞳は口ほどに物を言う

「・・・目標、教えてください」

羞恥の色に染められた瞳を見て帝督は苦笑し。

「やっぱり、お前は可愛いな」

と、微笑むのだった

このシーンを梓が見ていたら驚愕するだろう

というより普段の彼を知っているものなら誰でも驚愕する。

彼は女嫌いだ、極度の

その本質は自らに女性を近づけてしまえばその女性は傷つく、というものだが

もはやそんな目的はとうの昔に忘れ去りいまや、本当に嫌いになっている彼である

そんな彼が、フィーアに微笑んでいるのだ、これは最早驚天動地の現象である。

だが、それにも理由はあるのだ

第一に彼女　フィーアは全身を黒い装束に包んでいることだそれはある種の女らしさを感じさせないため、というのが一つ

第二に、これが一番の理由だが

そもそも彼女はもう一人の垣根帝督なのだ
それがたとえ女性体であろうと、自身ならば別に自己を嫌うような趣味のない彼からすればフィーアは女でも男でもなく
ただただ垣根帝督の一側面でしかないのである

無論周りからはそうは思われないのだが

そんなこんなでフィーアは標的を探し出す

その者は自身と同じ暗殺者

そして、魔術師

名を　篠乃木　飛鳥と言つらしい

第十八話 「ビルの上の戦い」

P M 9 : 5 6

淡い青色の部屋は壊れていた

壁には穴があき、床は抜けて地下室へつながってしまっている

部屋の主である飛鳥は”敵”との交戦場所を外に変更し現在走っていた

この時間になると学園都市の人通りはほとんどなくなる

学園都市は学生の町、故に完全下校時刻にあわせて電車やバスなども止まるためこの時間出歩くのはいわゆる”不良”と呼ばれる者達だけなのだ

そして、静まり返った町のビルを飛びながら戦っている者達がいた

「チッ！」我が願いを聞き届けよ、竜神の風”」

男はビルを飛びながら呪文を紡ぐ

すると、ゴウツと竜巻状になった風が男の掌から生まれ、飛翔

空間に存在するあらゆるものを巻き込みながら女へと飛ぶ が

女は身を翻し、それをかわす

標的を失った風はビルの貯水タンクへ激突し水を撒き散らせるが、
どういうわけかその余波すら女には当たっていない

むしろ、女のいる場所だけが余波を受けていなかった。

「チイツ！」

飛鳥は舌打ちをしながら思考する

相手がどういう能力者なのかを

先ほどの回避のみを見るならば、念動力や風力使いなどといった予測はできるがいままで自身の行った攻撃からはまるでその全貌が読めなかったのだ。

音速を超える蹴りを放てば避けられ、空間そのものを圧縮すれば圧縮地点から離れられ、原始的に拳銃で撃てば弾を避けられる

はつきり言って全く読めなかった、身体能力そのものはそこまでで

もない

せいぜいが身体強化魔術のレベルである。

音速を越える蹴りを回避できるはずがないし、空間圧縮を読めるはずがないし、弾を避けられるはずもない。

ならば　と

一つの可能性を考え飛鳥は驚愕する

「まさかッ!？」

女から飛んでくるナイフを避けながら彼はビルを飛ぶ

そもそもビルからビルへ飛び移ることすら化け物染みているのに飛び移る速度すら常人では不可能なレベルだ、だが彼も彼女も普通ではない

「未来、予知・・・!？」

だが飛鳥はそれを自身で否定する

バカな、有り得ない

いままでそれなりの年月この学園都市の暗部で戦い、殺してきたがそんな稀有な能力者はいなかった

いや、未来を予知できるタイプの能力者もいたにはいたが戦闘で使

えるほどの能力者はいなかったはず

だが 女が能力が未来予知だとしたらあらゆる攻撃を回避されてしまう事へのつじつまが合うのだ、合ってしまうのだ

だが相手の能力が未来予知だと決め付けるにはまだ早い

故に飛鳥はロングレンジでの戦いを続行した。

「 其は雷、敵を喰らいて顕現せよ！ 」

飛鳥の腕から閃光が放たれる、常人ならば目視すら敵わず超人ですら反応することもできないはずの超高速の閃光

だが放たれる前に女はそれを避けていた

そしてカウンターとしてナイフが飛鳥に迫っていく

このナイフすら計算されて投げられていた

高速で動き続ける彼に向かいナイフをなげたところでソレは彼には追いつけないのだが

数秒後いるであろう地点にむかって投げているため彼はソレを避けざるをえなかった

だがそれでも攻撃が単調であり当たるはずがないのが彼にとって唯一の救いだろ

だがそれでも埒が空かない

一度、接近戦に持ち込まなければ時間切れでこちらが負ける

並走する男を見る

高速で動き続ける敵はこちらからの攻撃をいともたやすく避けていく

絶殺のタイミングで放つナイフはいともたやすく避けられてしまう

どうする？とフィーアは思考していた

敵は徐々に自身の能力を看破しだしている

敵の攻撃が来る！

「ッ」

フィーアは敵の腕を見て体を捻る

次の瞬間、先ほどまでフィーアがいた場所を雷が通過していく

いまの攻撃は危なかった、とフィーアは戦慄していた

敵が魔術師なのは知っていたがまさかここまでのレベルとは思って
もいなかった

自身の魔術を過信することもなく身体強化による接近戦では逃げられ

さらに遠距離戦ではその魔術の腕を惜しみなく発揮する

敵は魔術師ではない、戦闘者だった

「・・・埒が空かない」

それは奇しくもお互い同じ考えだった

彼にも彼女にも時間がないのだ

飛鳥は時間がかかればかかるだけ自身の魔力を消費するし彼もまた暗殺者であるため本来正面戦闘は専門ではない

フィアは時間がかかればかかるだけ自身の肉体が持たなくなってしまう

そもそもフィアは長時間の戦闘に耐えるだけのスペックを有していない

彼女もまた暗殺者、正面からの戦闘はできるだけ避けるべきなのだ
闇に紛れ、獲物の首を音もなく刈り取るのが彼女の本分であり

闇を利用し、獲物の息の根を確実に止めるのが彼の仕事である

そんな彼らだが時間が遠距離戦を許さない

故にお互いに一つのことを考えていた

” 接近戦に持ち込まなければ ”

だが、その機会が見つからない

男は高速で動き続けながら風、雷、火などの魔術による攻撃を行っ

ている

女は攻撃を避けながらナイフによる攻撃を行っている

両者共に元々が暗殺者であるために起きたジレンマ

特に彼は正面からの戦闘は想定していなかったのだ

暗殺者とは元々敵に見つかれば逃げるもの

飛鳥は少なくともそうだ

だが、フィアは違う

彼女の肉体はそもそもが作られたモノ

壊されようが犯されようが最終的に帝督の元へ戻れるのだ

敵の情報を報告するだけでも彼女の仕事はある程度はたされる

故に彼女は敵を追う

魔術師であり暗殺者である飛鳥と

獵犬であり暗殺者であるフィア

二人の戦いは、続く

第十九話 「シックスセンス」

両者は一つのビルのヘリポートの上で向かい合っていた

かたや狂いに狂った復讐の鬼

かたや作られし人形の暗殺者

二人は先ほどまでビルをとり移動していた

だが両者埒が空かぬとみた時、ちょうどこのヘリポートを見つけたのだ

ヘリポートならばある程度の広さがあるため着地の隙をつかれることはない、と両者は考え
今ここに立っている

「お前の名前は？」

男は女に問いかける

別にいまさら情報がほしいわけではないし名前を知ることにより発動する魔術なんぞ行使できない
ただ、ここまで己に食いつくものの名を確認したかっただけ

女はかすかな沈黙の後、答える

「ド・ナインジョーカー
・・・九つの切り札が四

ナインジョーカーズ
九人の道化が一人

アサシン
闇の道化、ファイア」

女は名乗った

名乗る必要もないが、もし自らが敗北した場合にこの名をしってい
ればわずかな可能性でもあるが九つの切り札について調べるかもし
れない

故にここは名乗る、自らの敗北の可能性すら視野にいれて、ファイ
アは行動している

そして彼女の名乗りを聞いて男はかすかに眉を顰めた後、獰猛に嗤う

「クククツ、聞いたことがないな、その名は
ならば、新参か、はたまたルーキーか
どちらでもいいか、だが名乗りには名乗りを返そう」

普段ならばこんなふうに正面から激突することなどない男は名乗り
というものをとても大事にしている

自分を殺した相手の名を知っているか知っていないか

そんなものに意味などないが、意義はある

故に、彼は名乗りに名乗りを返すのだ

「俺の名前は篠乃木飛鳥

学園都市の暗部組織に所属していたものだ
そして、我がもう一つの名を示そう」

かつての魔法名はもう使えない

彼の体はあるモノにより作り変えられ、魔術の根幹すらも変わってしまっている

故に、彼は新たな名を名乗る

「サントゥスグレイル
”聖なる杯”

ソレが今の私の名だ、覚えておくといい」

瞬間、男の全身から黒い何かが立ち上っていく

ゆらゆらめく黒色の炎のようなモノ

これは魔力だ、飛鳥の体内にて生成された魔力が限界密度を越えて色を持ち飛鳥の体から滲み出ているのだ

対し、フィアに変化はない

あくまで自然体、特別な構えなど必要ない

そして、先手は飛鳥だった

「行くぞ」

彼のその体から滲み出ていた魔力が彼の胸に収束されていく

そこにあるのは、杯だ

「俺はある日、ある魔術を行つた」

突然の話にフィアは眉を顰める、この段階でなぜそんなことをいきなり？

そんなフィアの顔を見て飛鳥は苦笑を浮かべ

「まあ、聞け」

いまだ収束していく魔力が揺らぎながら胸に集まっていく

「その時の俺は、とにかくめちゃくちゃで描いた魔法陣すらめちゃくちゃだった」

収束が完了する、フィアはまだ動かない

「そうして発動した魔法陣は当然、めちゃくちゃなものだった

だが 奇跡が起こった」

飛鳥は己の胸に手をやり、そのまま体突き刺していく

「聖なる杯」、そう聖杯だよ」

抜き取った手の中には、鈍い黄金の輝きを放っているが黒いものに犯された杯だった

フィーアは息を呑む

読めない？

いままでの行動はすべて先読みできた、だが

この杯を使って何をするのかが読めない！

「俺は偶然にも、あらゆる願いを叶える最上の霊装を手に入れたんだよ

そして 俺はある一つのことを知った」

半年前のことだ

彼の所属していた暗部組織は壊滅した

記録上では彼も死んでいたが、彼はある一人の女性により生きながらえていたのだ

彼の恋人によって

そして

「それを仕組んだのは学園都市上層部、実行したのは」

飛鳥の顔が歪む、まさに全てを呪う悪鬼の色

「学園都市暗部最大組織、『スクール』」

フィーアの眉が動く

「クククツ・・・お前のご主人様の組織だよ、ゴミクズが」

フィーアは驚愕した

何故知っている？己が主から離れて行動するのは今回が初のはず！

いや、待て

そもそも可笑しいのだ、なぜ目の前の敵は学園都市中に広がる滞空回線を知った？

なぜ己らが処分されたのを知った？なぜ実行したのがスクールだと知った？

まさか

その時、飛鳥の唇の端が歪む

「正解だよお嬢さん、俺の聖杯はあらゆる願いをかなえられるそう　知りたいことを知れるようにな」

フィーアは愕然とした

あらゆる願いをかなえられる聖杯

その聖杯を所持する敵、勝てるはずがない

そこまで考えフイーアは一つの疑問が浮かんだ

あらゆる願いを叶える？

ハッとするフイーアは口を開く

「・・・それは嘘、もしアナタが聖杯を持つなら

最初からアナタの目的は成功しているはず」

そう、そうなのだ

もし彼の持つ聖杯が”あらゆる願いを叶える”聖杯ならば

最初から”アレイスターの死”を願えばそれで事は済む

なにせ”あらゆる願いを叶える”のだ、この世にできないことなど
まさしく存在しないだろう。

だが彼は外部の組織に情報を渡し、外部の組織に協力を求めた

それだけ聞けば彼が聖杯など持たないと思える。

だが、彼はたしかに願いをかなえられているのだ

通常ならば絶対に知りえない、滞空回線やアレイスターの正体などを知っていた

すなわち

「・・・あなたは確かに聖杯を持っている、けど」

”あらゆる願い”は叶えられないが”ある程度の願い”は叶えられる

「・・・その聖杯は不完全の未完成品」

そう、願いを叶える機能はあっても、あらゆる願いを叶えるだけの力がないのだ

彼はこういつていた、めちゃくちゃな魔法陣を描いたと

そしてその結果、聖杯が生まれたと

だが、めちゃくちゃな魔法陣から偶然聖杯が生まれるか？と聞かれれば否と答えるしかない

ならば　聖杯を生み出した彼が、願ったとしたら？

過去の自分が聖杯を生み出すように願ったとしたら？

当然、聖杯は生まれる、当たり前だ

なにせ、聖杯は願いを叶えるのだから

だが、そんな無理な願いには代償がつきものだ

しかし、その無理な願いをしなければ自身が手に持つ聖杯は消えてなくなってしまう

そもそも偶然など存在しない、この世は必然でできているのだから手に持った聖杯が消えていくときの彼の心はどうだったのだろう

突然の振ってわいたチャンスが消えかかっている、だがあるリスクを犯せば再びチャンスを手に入れられる

そんなもの、当然リスクを犯すに決まってる

そして代償として、聖杯は劣化したのだろう

あらゆる願いを叶える聖杯は、たいてい一度しか叶えられないものだ

その聖杯をいまのいままで彼が行使できていたのは己の心の臓に埋め込み、つねに魔力で補修していたからに過ぎないのだ

故に、フィーアは確信する

「・・・アナタは私に勝てない、ここで死ぬ」

手に持つナイフを構え宣言する

そして 投げようとしたときに気づく

腹部に違和感

「甘いぜ、女

たしかに今の聖杯は弱体化している
だけだなあ」

フィーアは己が腹部を見る

腕が、あつた

「小さな願いなら叶えられる

たとえば、己の行動を悟られないようにとか、な」

飛鳥の腕が、フィーアの腹を貫通していた

「じゃあな、女

先にいって な、に？」

が、飛鳥はそこで違和感に気づく

腹部を貫通したはずなのに、なぜ血がでない？

一瞬の空白、だがそれはフィーアと密着している状態では、致命的
だった

ヒュ

ザン

夜の暗闇を、飛鳥の首が飛んでいた

ゴトリ、と重低音をならし落ちた飛鳥の首を、フィーアは手に持ち

「・・・甘いのはあなた
まだ気づいてなかったなんて」

彼女は彼の攻撃を予測、否

感じ取っていた

彼が行った攻撃はこうだ

己が聖杯を利用し、フィーアの意識に自身を写さぬようにしたのだ

そして、彼女の腹部を貫いた

彼女の能力がアクティブである未来予知の場合にはおそらく彼は勝
っていただろう

いくら作られた彼女といえど腹部を突然なんの準備もなく貫かれ
ば、構築力が落ち、即座に消えていた

だが、彼女のスキルはアクティブである未来予知ではない。

彼女 フィーアの本当の能力は、シックスセンス絶対直感

いわゆる勘というものを科学的に分析し、それを極大にまで高めた、テクニカル・ワン絶対の一

それは彼女の無意識にて行われる膨大な演算により擬似的な未来予知を可能にしている

どこから攻撃が来るのか、どのタイミングで攻撃すればいいのか、暗殺対象に気づかれる瞬間

また 迫り来る死の瞬間すら、彼女は無意識に感じ取ることができるのだ。

故に、彼女は暗殺者

どんな時、どんな武器、どんな状況であろうと絶対に獲物をしとめられる瞬間を知覚する

それが彼の敗因の一

そしてもう一つの彼の敗因は、彼女に近接戦闘を挑んだこと

彼女の役割は暗殺者、だがしかし

彼女の能力が真に発揮されるのは近接戦

なぜならどのタイミングで敵が攻撃してくるか読め、絶殺のタイミングすら読めてしまう

暗殺者でありながら、近接戦こそ最強と言う”ジョーカー切り札”

そうして、彼女は任務を達成し、帰還した。

こうして篠乃木 飛鳥の目論見はここで潰えてしまった

だが、一つだけ、彼がアレイスターを殺すことができるチャンスがあった

それは最初だ、一番最初に彼は”アレイスターの死”を願えば、彼の目的は完遂されたはずだった

だが、彼もまた一人の人間だった

そして 彼は一つの闇を残して消えていった

あらゆる魔術組織に科学サイドのトップが”魔術師・アレイスター”クロウリー”であるという可能性が存在することを教えてしまった。

第十九話 「シックスセンス」(後書き)

はい、ナインジョーカーズの四人目、フィアのお披露目でしたかのじよの能力もまたチートです。

第二十話 「雌伏の時」

二日目 PM 1:56

「で？アイテムになにか御用かしら？第二位」

お洒落な女子高生 そんな印象を持つ茶髪の美女

「・・・ていとく、やつぽー」

無関心な中学生 そんな感じの煤けた黒髪を持つ少女

「こんにちは、帝督さん ところで超背伸びしました？」

元気潑刺、明るい美少女 そう思われる茶髪のショートカットの少女

「結局さ、私達の力が必要なんですよ？」

西洋人形のような美しさを出す少女 そんな雰囲気のある女

帝督は目の前にいる四人の女性に対し、言葉を放つ

「お前ら少しキャラ立ちすぎてないか？」

「「「「「アンタが言うな」「」「」」」」」

ごもつともだった。

長身の茶髪、整った顔立ち、学園都市七人の超能力者の第二位で

さらに学園都市暗部の最大派閥のリーダーで、学園都市最優という異名すら持つ男

女嫌い、変人、奇人といろいろ言われているのも彼のキャラの濃さを如実にあらわしているだろう。

その帝督の隣にいるのは、少女だった

不自然なまでに白く艶のある色　白銀色の長髪を揺らし、蒼の瞳を持つ少女

背は帝督より10センチほど低い程度、そしてそのプロポーションはまるでモデルのようだった

「やあやあ、アイテムの皆さん、帝督ちゃんの肉奴隷の日向楓です」

キラッ　とでも効果音が付きそうな笑顔で楓が爆弾発言を投下する。

そんな楓を見て、茶髪の美女　麦野沈利が言う

「そのネタはもういい、帝督が女嫌いなのは知ってるから」

続き、無関心な中学生　滝壺理后は言う

「・・・そのとおり、もうおもしろくない」

元気澁刺娘　絹旗最愛は言う

「そうですね、超面白くないです

まるで超ハズれてしまったC級映画並です」

西洋ノ人形娘　フレンダは言う

「スラッシュを入れんじゃねえ！」

そんなこんなでスクールとアイテムの共同戦線ができた

そして、作戦会議にはいる

「んで？敵はどういう連中なのよ」

アイテムのリーダーである麦野沈利はスクールからの要請を受けて
思わず眉を顰めた人物である

そもそもスクールとは暗部最大の派閥で悔しいがとてもアイテムが敵う相手ではないし

侵入者がどれだけ強かろうとこの第二位がいれば全て解決する程度だと思っただけくらいだ

人員だってとんでもない人数いるらしいし、そしてなにより

学園都市最優は学園都市最強のツガイ

未元物質と一方通行の両者を知るものは口をそろえて言う

”あの二人が闘ったらどちらが勝つのか？”

方やあらゆるベクトルを反射する化物

方や存在しない物質を生み出す怪物

私からみればどこまでもどっちもどっちだ

私自身とんでもない化け物だということは自覚しているがそれ以上に第一位と第二位は化け物だ

と、冷静な私は言うが恐らくブチキレたら突っ込んでいくだろう自分の事くらい少しはわかってる。

「ああ、外部の能力者研究施設のいわゆる”ゴミ”だ

俺達の仕事はゴミをうちで処理させようとしているアホどものご要望にお答えして

ゴミ処理してやるだけだ」

どうやら帝督は心底面白くないようで

「まあなんだ、可燃ゴミ・不燃ゴミ・資源ゴミ一切合財消せ、面倒だ」

アハッ

「なんだ、そんな簡単なこと？」

アハ、丁度良いストレス解消になりそう」

最近ちょーつと嫌なことがあった私はこのとき般若のような顔をしていただろう

「それじゃ、いまから配置を説明する」

「迎撃作戦ですか、超面倒ですね」

元氣澁刺娘、絹旗最愛は言う

「こんなことなら映画を見に行ったほうが建設的でしたかね」

「あのクソ面白くないC級映画巡り？ゴミ処理のほうがまだ生産的だと思うんだけど」

「その発言は人道的によろしくないよ、麦野」

麦野はかつて絹旗に映画めぐりを付き合わされたクチである
その時の映画のタイトルなのだが「燃える闘魂」ということなく
というよりモロにパクリ臭しかしいクソ映画だったのでそれ以来
麦野は絶対に絹旗と映画を見ようとはしていない、懸命な判断である。

そんな麦野に絹旗はすこしむすつとした顔をして

「麦野、いいですか？そもそもなぜC級が」

あーこれは話が長くなる、と麦野は絹旗との会話を放棄した

と、己が部下の特殊性癖に辟易していたときだった

「ねえねえむぎのんむぎのん」

白銀の髪、蒼の眼

モデルのようなプロポーションを誇る麦野沈利のさらに上をいく美しさを持った少女　日向　楓だ

麦野は日向のほうをだるそうに向きながら

「むぎのん言うな、ブチクロスぞ」

額にしわをいれてすこむ麦野に日向は苦笑しながら

「ぐめんぐめん、でぞ」

コイツ、マジで殺してやろうか

いまにも出そうになった原子崩しを麦野は寸でのところで抑え

「なによ」

話の続きを促した

「んと、帝督ちゃんと滝壺ちゃんはなにしてるの？」

いまこの場にいるのは麦野・絹旗・フレンダ・日向だ

帝督と滝壺がいないことが気になったのだろう

「あー講義よ講義、ていうか知らなかったの？アంత」

「講義・・・？」

「さて、滝壺」「ん、よろしくおねがいします、先生」

ここはいわゆる個室である

ソファにエラソーに腰掛けるのが帝督でちょこんと座っているのが滝壺である

「とりあえず『体晶』を取り除く、こっちこい」

「ん、わかった」

滝壺は座っていたソファから立ち上がり帝督の座っているソファへ移動する

帝督のとなりにちょこんとすわり帝督に顔を向ける

「眼をつむれ」

滝壺は言われたとおり眼をつむる

帝督は人差し指を出して、滝壺の額につける

ちなみにこんなことをしているとはアイテムの面々もスクールの人間も誰も知らない

講義自体は能力の発展、というよくあるものをソレはそれできちん

としているが彼女の体に蓄積されている『体晶』を取り除いていることは誰も知らないのだ

滝壺の体がつつすらと発光する

帝督がしていることは単純である

未元物質を彼女の体内に充満させ彼女の体を『あるべき姿』すなわち健康体に戻しているのだ

では、なぜ帝督が彼女の治療をしているのかと聞かれれば単純に興味としか答えないだろう

帝督は彼女の能力の真価を掴んでいる

彼女の能力『能力追跡』は能力者達が無意識に発しているAIM拡散力場に干渉する能力

これはすなわち進化すればあらゆる超能力を操ることができるという事を意味している

これは垣根帝督の私見だがAIM拡散力場とは能力の源泉であり、自分だけの現実とは異なる世界のことである

自分だけの現実、すなわち己しか存在しない世界より能力者はAIM拡散力場を媒体にして能力を使用しているのならば

AIM拡散力場に干渉する彼女、滝壺理后の自分だけの現実がより強固に進化した場合

彼女の自分だけの現実AIM拡散力場を完全に支配することが可

能になる

そして、それはかつてエセではあるが探求者であつた帝督の興味を惹くには十分すぎた

故に彼は滝壺理后を育てている。

そして滝壺の体の発光が収まる

「これくらいだろ 体の調子はどうだ？」

帝督は指を離し、滝壺に問う

帝督の治療は完璧だ、完璧だが彼の治療の難点は精神的なことまではなにもできないことであろう

「ん、大丈夫」

己の体の調子をたしかめ頷く滝壺

「そうか、それじゃあ前回の復習から講義をはじめる」

講義 帝督が最初に彼女との取引で出した条件の一つ

もちろん治療も帝督が用意した彼女にとっての最大のメリットである

この取引を持ちかけられたとき滝壺は心底不審に思っていた

講義？それは私のメリットだ

治療？それも私のメリットだ
ならば、彼のメリットは何？

と彼女はここまで考えて彼の目的を自分の体だと勘違いしひと悶着
あったのだがそれはまたいつか

最終的に彼女は彼の治療と講義を受けることになった

「前回はお前の能力の真価を教えたな？」

「うん、私の能力はA I M拡散力場を利用してそれを追跡や解析するものではなく

A I M拡散力場そのものへ干渉する力・・・だっけ」

うーんうーんと唸りながら滝壺は記憶を探る

「その通り、そしてお前の力が真に完成したとき、お前は全ての能力を手中に収められる」

それは、垣根帝督も例外ではない

彼の能力 未元物質もまたA I M拡散力場を媒体としてこの世に
現れる物

そして彼は他者の能力に干渉はできないのだ

例えば『A I M拡散力場を支配する概念』をつけられた未元物質を
作り上げたでしょう

この場合、本来ならば概念通りにA I M拡散力場を支配し他者の能力を支配できなければ可笑しいのだが

それはできないのである、つまりもう試しているのだ帝督は

帝督の考えではこうだ

能力に対応した現象を現世に引き起こすには「AIM拡散力場」と「自分だけの現実」が必要になる

この「自分だけの現実」とは能力者本人のみが知る世界であるためその世界は能力者本人でなければ扱えないのではないかと

ゆえにたとえ「AIM拡散力場」を支配したとしても帝督の「自分だけの現実」に未元物質しか存在していない以上、他者の能力への干渉や支配はできないのである

では、何故滝壺ならばできるのか

それは滝壺理后の「自分だけの現実」の構築に「AIM拡散力場」が使われているからだ

それはある一つの事実を意味している

それはすなわち、彼女の「自分だけの現実」には全ての能力が眠っている

いわば能力者達のミトコンドリア・イブ

すべての能力は彼女の「自分だけの現実」に存在する、というのが帝督の理論だ。

ゆえに彼女は他者の「AIM拡散力場」を記録できるし追跡できるのではないか

そしてその能力があまりにも多いため個別に扱えるような精度はない、ゆえに彼女が扱えるのは「A I M 拡散力場」への干渉

彼女こそ全ての開発された能力の親なのではないか、と帝督は考えていた

ここで一度まとめよう

「自分だけの現実」とは能力者本人のみが扱える物

それは帝督の末元物質による概念でも覆せない、なぜなら彼の能力もまた他の能力者たちと同じ「自分だけの現実」より現れているから

そして滝壺理后の「自分だけの現実」には全ての能力が眠っている、故に彼女は進化すれば全ての能力を操れる

ここで注意すべきなのは滝壺理后が扱えるのは彼女だけの「自分だけの現実」である、というところだ

すなわち彼女の「自分だけの現実」には全ての能力が眠っているだけであって

他者の「自分だけの現実」が存在しているわけではないのだ

単純に全ての「自分だけの現実」が彼女の「自分だけの現実」の子供であるだけであり

彼女は他者の「自分だけの現実」を操れるわけではないのだ

「と、ここまでではわかったか？」

「ごめん、ていとく 全然わからない」

そりゃそうである、普通わからない

「チツ、頭の回転が鈍いぞ滝壺」

「アナタの頭が良すぎるだけ」

垣根帝督はバカである、いくら学園都市で育てられているとはいえ学者でもない子供にこんなことを理解しろというくらいバカである、だが彼の頭脳は学園都市で二番目に優秀なのだ

ゆえに人は彼をこう呼ぶ

「天災バカボン」と、災は誤字にあらず（キリッ

「いや、呼ばれてねーよ！」

こうして、アイテムとスクールの共同戦線が構築された

第二十一話 「日向楓」

P M 2 : 3 4

「帝督ちゃん、馬鹿だから補修です」

「それは口りっこ先生の台詞だ、それと補修じゃない補習だ 俺は傷んだ建物じゃない」

ここはいわゆる彼らの数ある別荘の一つである

先ほどまでアイテムの面々と会合をしていた場所からすぐにある建物の一室だ

壁には絵画がかけられておりこの部屋の空気を作っているが、その絵がピカソのゲルニカというなんとも微妙チョイスだった

部屋の四隅には花瓶があり帝督の趣味だろうか、それぞれに菊の紋があしらわれた花瓶に造花であるが菊の花が一本ずつさされている

ちなみに菊の紋とは天皇家の家紋であり、菊の花言葉は主に「高貴」「高潔」などである

「ぶーぶー、でも帝督ちゃんあるいみ欠陥物件じゃない」

少女 日向 楓はその部屋の中心にある二つのソファの一つに腰掛けている

制服姿でありスカートで足を組んでいるため帝督が見ようとすればそのスカートは意味をなさなくなるだろう、が

「たしかに俺は欠陥だが物件という言い方はやめろ」

世の女性達から見た帝督は、容姿端麗、頭脳明晰、学歴優秀と三拍子揃っているため超高級な物件に見えるのは間違いないが、彼が女嫌いのため欠陥、つまり欠陥物件である。

無論帝督がいう欠陥と楓が言う欠陥には大きな違いがあるが

「それで、今日はどうしたんだ？お前が”犬小屋”からでてくるなんて珍しいじゃないか なあ、犬」

今日の帝督は非常にご機嫌だった

楓の軽口にもともに返事をするくらいご機嫌だった

だからこそ、こうなったのだろう

「アハ、そろそろ死んでくれる？」

しゅっ

楓が突如立ち上がり、その手に白い何かを持ち帝督を切り裂いた

否、切り裂こうとした

楓は即座に反転、ソファの後ろに入り込み構えた瞬間

ソワッ

白い羽が部屋中に舞っていた

「まったく、犬の分際で飼い主に攻撃とは 殺してやろうか？」

帝督は相変わらずソファに座っているが嗤っている

対し楓も嗤っていた

「アハ、流石、私のご主人様だね そして、私の種親」

楓は立ち上がり、その背に白い翼を展開する、それは一対二翼の白い翼を

帝督も立ち上がり、その背に三対六翼の翼を展開する

その様はまるで天使と天使の決闘のようだった この世ならぬモノ
共が広げる翼

「帝督ちゃん 君にその翼は似合わないよ」

「心配するな、自覚はある」

そこまで言つて、楓はさらに嗤う

まるで獲物を狙い牙を剥く獣のように

「なら 私に頂戴」

ゴッ と

至近距離から人智を超えた速度で帝督に迫る楓

それでも部屋に影響を与えないのだから彼女の化け物加減が知れて
しまう

だが 垣根帝督もまた化け物だ

バサッ、と

帝督の翼が彼を覆う それはいかなる攻撃をも通さない絶対的なモノ
だ

硬い訳ではない、強度がある訳でもない、ただただ攻撃を通さない
のだ

彼の翼は彼の意味により変化する、彼の意味が強ければ強いほどこ

の翼は絶対になる

結果、楓はこの防御を破ることは叶わない

だが

「これで、終いよ」

楓の口から、一本のなにかがでてくる

細く細く細い、まるで針のような糸のような

うねうねと動き自由自在に空中を動いている

そして、それは翼と翼の隙間にはいりこみ

「いいや、まだ終わらない」

瞬間、楓の肉体に衝撃が走る

「ハッ、ズッ!？」

肩が爆散されたと錯覚するほどの衝撃と痛み

なんだ　　と思考する前に帝督からの追い討ちがかかる

ゴッ、と帝督はその足でもって楓の腹を蹴り抜いた

ズン、と部屋全体が揺れる　楓の体が床に叩きつけられた衝撃だ

「　ぐっ、アアアアアアアアアアアア！！！」

あまりの痛みに楓は叫ぶ　が彼女の闘志はまだ消えていない
だが、帝督は彼女の心を削り取っていく

「俺のパチモンが俺に勝てるはずがないだろう？
ファンタズム
なあ？幻想物質」

幻想物質　それが楓の能力だ

そしてその帝督の言葉に楓は激昂した

眼を見開き、獣のような形相で帝督をにらみ

「お前が、きちんと後処理しなかったから！
私のような化け物が生み出されたんだろうが！」

彼女の能力である幻想物質はかつて帝督が潰した研究所のデータか
ら生み出されたモノだ

帝督の末元物質を再現しようという実験だった

物質創造系の能力を持つ置き去りチャイルドエラーが集められ、そして

生き残ったのは彼女だけだった

奇しくも彼女を救ったのは帝督だった、自身の能力が研究に使われているらしいとの情報を受け潰しにいったのだ

そして、彼女を見つける

だが、帝督は彼女をどうにかしようなんてことはまったく思わなかった

至極当然、彼は自身の能力が勝手に使われているのが”気に入らないから”研究所を潰しただけで

そこで研究されていた子供達など至極どうでもよかったのである

だが、そこで彼女を見つけ、また彼女も彼を見つけてしまった

彼女はその瞬間、助かると思った 助けてくれる人が来たと思った

一人また一人と周りの子供達が消えていき、次の日には自身が殺さなくてはなくなり、また次の日にはよくわからない薬品をのまされ心を犯される

そんな日々から、助けてもらえると思っていた

だが、彼を見て彼の第一印象を理解した瞬間彼女は激昂した

彼のことは知っていた、自分達の目指すべき頂点であり、自分達の実験を行う理由だと

彼の能力を再現することこそこの研究の目標だと、彼女は聞いていた

ならば 彼さえいなければこのような地獄はなかったのではないか？

彼女はそう考えたのだ、否　そう思わなければならなかった

たとえ帝督のデータが残っていなくとも置き去りの行く末など決定
しているチャイルドエラー

そんなことは彼女でもわかっていた、だが

誰か、誰かに自分の地獄の責任をもたせなければ、私は壊れてしまう

そして、いまここで帝督を殺せば今後このような地獄が一つ減るはずだ、と

そして彼女は帝督と闘った

だが、その時もいまも即座に負けてしまっている

何故、何故、何故

だから彼女は彼についているのだ

彼を憎み、彼を殺すため

自身の心を護り、地獄を一つでも減らすため

独善と偽善

「だから今後処理をしているだろうが
お前の後処理を、わかるか？俺がお前を飼ってることだよ」

楓の腹に足を乗せながら帝督は言う

「俺を憎むのはどこまでいってもお門違いだ、お前をそんなにしたのは研究者達だろう？」

そして俺を殺せば地獄が減るなんてのもちゃんやら可笑しい話だ、お前が経験したような地獄なんぞこの街には腐るほどあるんだよ
そしてなにより、地獄が一個減ったところでまた新しい地獄が二つ
できるだけの話だ」

そこまで言って帝督はさらに嗤い、彼女の心を犯していく

「そして、地獄を減らすと言うのならなぜスクールにいる？
ここは正義の組織じゃねえぞ？ましてガキのたまり場でもねえ
地獄を味わい、地獄に焼かれた哀れな哀れな子羊達の場所だ
少なくとも、俺はこのスクールをそういう組織に育ててきた」

それもすべて、彼の計画のために

「だがお前は違う、お前のここにいる理由は単純だ

俺の趣味だ、わかるか？俺の趣味でお前は今生きている

息づき、歩き、食事できているんだよ

お前の命は、俺のモノだ

ああ、違った、そう、スクールとはな、日向楓」

俺のモノなんだよ

「俺が使い、俺に使われ、俺のために存在する軍勢^{レギオン}来る日まで命を蓄え、来る日にはそれを散らすそれが、スクールだ、理解したか？ スタッフの長お前の主は、すべてを呑みこむ悪鬼の類だと」

張り付いたような笑みを浮かべ帝督は嗤う
この世のすべてが自身を中心に回っていると既に決定づけている
そしてなお、足りぬ足りぬとなにかを求め続ける彼

なんたる傲慢、なんたる強欲

だが、楓もまた負けじと言い返す

「ふざけるな！ 私達をなんだと思っている！
私達は・・・私達は！ 人間なんだ！
ゴミでも種でもない、ただの人間なんだ！
それをお前は　ぐっ！？」

ズン

帝督の足が楓の腹にさらに食い込む
そして、帝督が耐え切れないと、嗤う

「ハハハッ！ ハーッハッハッハッ！
お前は本当に面白いことを言うなあ？ ええ？ 楓
お前達が人間だと？ ナメるなよ淫売」

そこで帝督は笑みを消し殺気を撒き散らす

「お前達は家畜だ、俺に搾取され、俺に食われ

俺の盾となり死に、足りなくなれば補充される程度の存在だ
まして、お前達が人間だと？クカカツ！

お前達はゴミにも劣るんだよ、お前達の命の価値は零ではない、負^マ
の価値^{イナ}しかない」

ここで帝督は足を上げた

咳き込む楓から興味をなくしたかのように視界から消して帝督は部
屋の出口へ歩いていく

「ゲホッ、ゲホッ

ま、まで！帝、督！」

眼を爛々と輝かせ、いまにも飛び掛らんとする楓

だが、彼女の体は言うことを聞かない

恐怖しているのだ、目の前の存在に

彼女達スクールの下部組織から見れば彼はまさに絶対の王者

彼女達にとって、彼の存在はまさに法だ。

彼の言葉が法となり、彼の怒りは裁きとなり、彼の悦楽は恐怖となる

それを、体の芯の心まで誰よりも知っているのがほかでもない楓だ
った

ゆえに

「その話はまたそのうちだ
今は仕事だ、楓」

その言葉にも逆らえない

そして一人部屋に残された楓は、涙を流す

恐怖、悲哀、後悔

さまざまなネガティブがあわさり、もう何故泣いてるのかもわからない

なぜ、私はあんな化け物の下についているのか

なぜ、私は何度も何度もこんな風に泣かなければならないのか

なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜ

なぜ？ ああそうか

「・・・殺す、引き裂いて殺す、焼いて殺す、苦しませて殺す、犯しながら殺す、少しずつ殺す 圧殺、絞殺、焼殺、刺殺、千殺、万殺、絶殺」

ああ

そうだと、彼を、あの男を

「焼いて、殺して、もっかい殺して、喰ってから
そして、あの女も殺してやる」

そうだ、あの男の存在が関わったもの全て殺しつくしてやる

あの女も、この組織も、この街も、この国も、この世界も

そして、この私も殺す

だから 力を

「・・・そうだ、そうとも
力を、力を、力を、力を！！！！
いまは、そうまさに雌伏の時」

そうして、彼女はさらに獣に近くなる

犬から狼へ、狼から人狼へ

薄暗くなってきた路地裏を歩きながら帝督は思考する

「まったく、相変わらずだな、あの淫売は」

拾ってやった時も攻撃してきたし、そしてそれから何度も何度も
襲撃してくる

だが、その点を度外視してでも彼女の能力は彼の計画には必要だったのだ

天を作る^{ダークマター}未元物質、地を作る^{ダークマター}暗黒物質、そして 天と地を繋ぐ^フ幻想物質^{ファンタズム}

そのためには彼女にも目的を同じくしてもらわねばならない

だが、今の彼女では無理だ、彼女は帝督に固執しすぎている

彼女にとって帝督とは諸悪の根源だ、そもそもの諸悪の根源はこの街そのものなのに

だが、帝督には予感があった

そう、彼女もまたいずれ自身と同じ目的を持つという

それは、彼女の本質を見た帝督が導き出した答えだ

今の目的である帝督を殺すというものを忘れるほどのなにかが現れるそして、それは彼女を変えるだろう

そついう、予感があった あるいは

「 既知感、かもしれないな」

第二十一話 「日向楓」(後書き)

次回の更新は未定です、申し訳ありません

第二十二話 「垣根帝督と麦野沈利」

P M 9 : 5 3

「来ませんね、侵入者」

「来ないわね」

夜の学園都市で二人の少女はため息をつく

一人はお洒落なブランド物の服を身に纏ういまどきらしい女子高生だ

一人は背の小さい、元気な可愛い娘というのが一番合つてあろう少女

二人の周りにはいかにも不良です、と主張しているような男たちが
うずくまっている

スキルアウト 学園都市の闇の中でいわゆる色を作り出している
者達だ

彼らは単純に夜の学園都市に女 それも上物の女がいたので普通に襲っただけである

彼らに非はない、なぜならそれが彼らだからだ

彼らはスキルアウト、ならばそれらしく振舞うのが彼らであるからにして

だが、今夜彼ら鴉が目をつけた獲物は可愛い子兎などではなく、兎の皮をかぶる狼だった。

「こんなクズども喰ったって、楽しくないしね」

すっかり意気消沈したのだろう、麦野は深いため息をつく

あの帝督がアイテムに支援要請をするほどの侵入者と聞いて、それはもう楽しみにしていたのに

「こんなことなら例の”アルカディア遊郭”とやらを潰しに行ったほうがよかったわね」

「そうですね、こんなゴキブリを駆除するようなこと超面倒です」

彼女らの普段の仕事は主に学園都市の反抗勢力の排除だ

学園都市は闇を孕んでいる、ゆえにその闇へ反逆する者らもあとを絶たない

そついう愚図を刈り取るのが彼女らの普段の仕事だが、基本的に彼女らアイテムも帝督の所属するスクールも、統括理事会からの指示や同系の組織からの依頼を受けている

無論、金と利益と趣味が込み、だが

今回彼女達がスクールの要請を受けたのは、利益のためだ

スクールの提示した利益はこのようなものだった

曰く”統括理事会への交渉”

その機会をくれる、とのことだった

正直そんなことができるなんて　と疑いはしたが
そこはあのスクール、暗部最大派閥である。

そのリーダーがあの垣根帝督なのだ

六年という時間、暗部の組織の長をやっている

それはすなわちそれだけの期間勝ち続けている、ということだ

彼女ら暗部の内での勝利とは単純明快に”生き残ること”

彼女らは少なくともそうである

生きたいから、仕事をこなしている

だが、彼女らの場合それは少し違うのかもしれない

彼女ら自身理解はしていないだろうが　それは

「まあいいわ、戻って帝督に文句いつてやりましょう」

ムスっとした顔をして麦野はきびすを返し闇の中へと消えていった

「それもそうですね、帝督さんには地獄のC級映画ツアーを受けて

もらいましょう」

アンタ自覚あったんだ・・・

とは麦野の心中である。

そして、その風景を見ていた男が一人

「ふうー・・・おつかねえ女だぜ

俺は絶対あんな女にはつかまらねえ、帝督とやらご愁傷さまだ」

と、しっかりフラグを立てる金髪にタンクトップでよれたジーンズを着ている男がいた

バツと麦野と絹旗が振り返り男は電光石火の動きで路地に隠れた

麦野と絹旗はなんとなくモヤモヤした表情をしている

「・・・ねえ、絹旗」「なんでしょう、麦野」

麦野はビキッと効果音が付きそうなくらいに眉間にしわを寄せ、般若のような表情をしながら口の端を上げ微笑んでいる

絹旗は麦野の顔芸に内心ビビりながら、同じく口の端を持ち上げ怒りに燃えている

「なんかとーってもつざい虫がいた気がするんだけど」「ええ、そうですね」

二人の会話を聞いている男はもう気が気じゃない様子で顔を青くしている

（怖いよっ！あの二人！半蔵――！！！！駒場の旦那――！！！！助けてくれえええええ！！！！）

ガクガクブルブル震えながら男は必死に気配を消している

そして、二人の雌獅子はハア、と嘆息し

「・・・戻りましょ」「・・・そうですね」

二人はとぼとぼと、だが背筋は曲げずに夜の学園都市に消えていく敵が来なかった場合の合流場所は帝督の趣味により高級バーである二人は揃いも揃って帝督へ八つ当たり、もとい報告をするつもりらなかった

「ああ、それで？」盾の狼”はなにを買った？」

シックな雰囲気を持ちクラシックを流す洒落た店

カウンターの後ろにはズラリとワインが並べてあり店主の趣味がよくわかる

主にシャンパンはロゼやグラン・クリュまた59年モノのヴィンテージも揃えており赤においてはグランジ、シャトー・マルゴー

また世界最高のワインと言われるロマネ・コンティのヴィンテージすらそろえている

だがそれは”表”の話。

そんな店だが帝督の前にはなにもおかれていない

帝督は携帯を片手にただただ話している

彼がいるのはこの店の中でも特に金払いのいい、いわゆる上客のいるvip席 ではなく

この店の裏の顔と言うべきか、いわゆる暗部の者らが訪れる場所にいる

この”裏”には酒類などはおいておらずピアノとカウンター、そしてテーブルがあるだけだ

ピアノには妙齡の美女と言うべき女性が静かな雰囲気の曲を演奏している

「十四頭の牝牛を三セット」か・・・いくら払っていった？」

暗号めいたやりとりではつきりいつてそばで聞いている麦野らアイテムのメンバーや日向にはさっぱりわからなかったが

（どうせまたあくどい事やってんでしょ）

奇しくも五人が五人似たようなことを考えていた

「三本か、まあ、悪くない

よし、なら”十五頭の牝牛を一セット”送れ
媚を売っておいて損する相手じゃないからな」

そこで帝督は通話を打ち切り、ソファーに座る面々を見て、言った

「女しかないのか・・・」

ピキッ、と場の空気が凍りつく

麦野は怒りを隠そうともせず

「アンタねえ・・・これだけよりどりみどりの美少女達捕まえてその台詞はどうなのよ、このホモ」

「ええ、麦野に超同感です、窒素で穴あけてやりましょうか？」

「・・・まったく、ていとは本当にかいしょーがない」

「結局さ、この人の男好きはしょうがないんじゃない？」

「アハ、帝督ちゃんには心に決めた女がいるもんね？」

日向の台詞に一同がバツと振り向くがすぐに思い当たり、にやりと
しだす

帝督はそんな美少女達に汚いものをみたような視線を向けて

「梓の事か？やめてくれ、アイツはそんなものじゃない
アイツはただの俺の所持品だ、俺の生の華だ」

帝督の台詞に美少女達はわざとらしく反応する

「ちよつとちよつと聞いた？今コイツ”性”の華だつてさ！」

「ええ、聞きましたとも、超ハレンチです、死んでください」

「お前ら縊り殺してやるつか？」

ビキリと額に青筋をつくる帝督に自称美少女達「くびり殺しますよ」
・・・失礼、絶世の美少女達はなお反論しようとする

「まあまあ、皆そう怒らないであげてよ、帝督ちゃんも性分なのよ」
と、ピアノを弾いていた女性が声をかける

少女達は戦慄する

店のBGMを担当するいわゆる壁が、この場の支配者へ声をかける
とは
殺されてもおかしくはない、まして女嫌いで有名な帝督に女性から
話しかけるなど、自殺行為に等しい

だが、帝督の反応は少女達の予想を裏切るものだった

「アカリさんは曲をお願いしますよ、俺達は俺達で少しばかり仕事の話がありますから」

「あ、あの帝督が・・・？」「女性に話しかけられて！？」「こんなはんのを・・・？」「するなんて！！」「明日は槍が降るの！？」

少女達は女性らしからぬ顔をしていた

だがそれだけの衝撃なのだろう、だがこのアカリという女性
要は帝督の商売相手なのである

「ふふ、帝督ちゃんは相変わらずね？
アナタもまだ十八歳でしょう？女の子の一人や二人、泣かせてもいいとは思っただけけどね」

妖艶に微笑みながらアカリは言う

ごもつともである、普通十代後半から二十代前半ならばまだまだ盛りの年頃である

だが、帝督は嫌そうな顔して

「俺は女が嫌いなんですよ、どうしてか、ね
それと梓は俺の女でもなんでもないですよ、ただの、手向けの華のようなものです」

雪に散り 華に薫るは 水目乃桜

ミスメノサクラ

帝督は梓からいつも、死を連想する

自身の死す時、傍らにいたのは彼女である、と彼は思っている

また、彼女の死す時、傍らにいたのは自身であるとも

自身への手向けの華 それが水目桜アスサなのだろう

それを聞いてアカリは決まって嫌な顔をするのだ

「もう、十代の子供が言うことじゃないわよ？」

アナタはまだまだ先があるのでしょう？なら前を見ていきなさい」

正面から、顔を 瞳を見据えられ放たれる言葉はこの場にいる全員
の心を打ち抜いた

暗部に所属しているものに、先の保障はないのだから

彼女の言の葉には、さまざまな想いが、籠められていた

それを知っている帝督はさびしそうな横顔で、いつも決まってる
言うのだ

「貴女には本当に感心します

俺にそんな言葉を投げかける大人は、貴女だけだ」

帝督は精神年齢で言えばアカリよりも年上だが、今の自身が子供で

あることをよく理解している

そして、子供を護り、導くのが大人の役目だ

今までこのような言葉をかけてくれたのは、アカリだけだった

親船最中が暗部をよく知っているから迂闊にはいえないことを、アカリは気にせず言つてのける

だからこそ、帝督は純粹に彼女を”人”として、尊敬している

そして、なにより

「だが、貴女の仕事は音を奏でることでしょう？

ゆえに、俺に聞かせてくださいな、貴女の音を」

詩人のような言葉に、アカリは苦笑しながらもハイハイ、とピアノの椅子に座る

ポロン、と彼女の指が奏でる音は、普段聞ける音よりも一層に優しげな音を奏でていた

”エリーゼのために”

かのルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンがある人に送ったものだ

優しげな、明るい曲調と激しい曲調を併せ持つ曲

親愛と情熱、煌びやかな華へ情熱を伝えている

アカリは瞠目し、微笑みながら、旋律を奏でていた

ある程度の教養を持つアイテムの面々にはこの曲の意味を知っているゆえに、驚いていた

この”エリーゼのために”はベートーヴェンが愛しい彼女へ送った曲すなわち、この曲の意味は、愛している

彼女らの解釈ではこうなる、もちろんそうだろう
なぜなら彼女らも年頃の乙女である、愛を夢見ているのだから

だが、アカリの解釈は違う

彼女にとってこの曲は、優しい曲調には親愛を乗せて奏でるものである

たとえ彼がどのような子供であろうとも、それでも愛すべき子供らであることには代わりがない、故に彼に親愛を

そして、曲調が激しくなっていく

彼女はこの旋律にも、想いを乗せる、重すぎる想いを

だがしかし、彼はいつも死を想う、ああ、なんと悲しきことが
彼は子供でいてもいいのに

葛藤と、こんな子供が人を殺すこの世界を憎む心が、彼女の旋律には現れる

この瞬間少女達は理解する

ああ、この人は 私達を

そして、曲が終わる

いまやこの空間の支配者は彼女のモノだった

そして、うつむく帝督が、リクエストをする

「アカリさん、いつものをお願いします」

アカリは一瞬悲しそうな顔をし、再びピアノに手をつける

拍手をしようと準備していた少女達は困惑している

そして、再び曲が始まる

D i e s i r a e ,

アカリにとってこの曲の解釈は、メント・モリ死を想え、である

激しく、しかし悲しげに響くその曲は、レイエム鎮魂歌

作曲家、モーツァルトの死の旋律

怒りの日 終焉の幕

ダビデとシビラは預言した

この世界が、灰燼へと化す怒りの日を

審判の日が訪れて 全ては厳しく裁かれる

ああ、それはなんと恐ろしいのであろうか

死者の為の鎮魂歌^{レクイエム} それは死した者への慰安であり、また生きる者達へのメッセージだ

メント・モリ^{メント・モリ} 安息を想え、と

死とは安息に過ぎず、だがしかし死後に快楽は存在しない
死者はただただ審判の日まで眠り、そして裁かれ、天上へ至るのだから

故に、死を想え

死とは全てを平等にするのだから、生とは全てを不平等にするのだから

そして曲が終わる、帝督は立ち上がり拍手を送る

だが少女達はあまりの迫力に、呆然としていた

なんだ、この曲は

彼女らも知識では知っている、この曲が鎮魂歌であり、またデータ

ではあるが聴いたこともある

だが、アカリの演奏はそんなものとは比べ物にならなかった

愛と、怒りと、悲しみと、そして慈愛の四重奏
カルテット

想いをこめるだけで、ここまで違うなんて

想いなどという非科学的なものに夢見る少女達は、戦慄する

アカリの演奏には、なにかが宿っている

そう、錯覚するほどに彼女の演奏は凄まじかった

そしてアカリが立ち上がり一礼したところで、彼女らはハッとする

そして、帝督に続き拍手を送り、口々に演奏を讃えた

「すごい、それしか言葉が出ないわ」

麦野は久しぶりに感動という感情を思い出したのだろう

「ええ、ここまでのモノとは想いもしませんでした」

絹旗はクラシックというモノを舐めていたのを悔いるように

「・・・すごい、かんだう」

滝壺は心ここにあらずといった風に、瞠目していた

「結局、音楽はクラシックなのかもね」

フレンドは、うんうん、と頷きながら拍手をしている

「確かにすごいねえ、私、ここまでのクラシックを聴いたことはないよ」

普段から音楽を嗜んでいるのだろうか
楓は素直に称賛を述べ、拍手を送る

アカリは心底うれしそうに

「ありがとう、可愛い羊さん達」

やはり妖艶に微笑み、彼女らに返礼をする

だが、彼女の心中は帝督のことではいっぱいだった

そして、帝督が口を開く

端正な顔で微笑み、拍手をしながら

「やはり、貴女の旋律は 俺の心に響き渡る」

その脳裏になにを思い浮かべているのだろうか、帝督は瞠目し

「ここからは仕事の時間だ アカリさん、ありがとう」

一人カウンターに付く帝督

そんな帝督に噛み付こうとする少女達　だが

「いいのよ、彼なりの称賛なの」

照れ屋で不器用な彼の精一杯の本気の称賛よ

その言葉を聴き少女らは

”コイツが不器用・・・”

と懐疑的な視線を帝督に向けるがとりあえずアカリ本人がそう言うならいいだろうと

彼女らも席に着く

そして、帝督が開口一番こういった

「はい、解散」

ブチッ

「てーいーとーくー？皮剥いでやろうか？」

その掌に光球を現し、殺意を充満させる麦野

それはそうである、なんせ彼女は報告と言う名のやつあたりをしよ
うとしていたのだ

それを逃れるためかどうかは知らないが最低限の報告という名の報

復くらいしなれば矛の収めどころに困る

「ハハッ、この店では暴力沙汰は禁止だぜ、なんならベットでお相手しようか？」

軽口に軽口で返すのは帝督だ、普段の彼ならば冗談でもそんなことは言わないのだがやはり今日は機嫌がいいようだ

先ほどのアカリの演奏の効果もあるのだろう、麦野のハラワタをいきなり引きずり出すようなマネはしないようだった。

そんな軽口にさらに怒りを燃やす麦野

「はぁ？アンタの粗末なモノ突っ込まれてヨガる雌豚はアンタんところの淫売くらいよ？」

むしろ全部吸い尽くしてさしあげましょうか？三秒で天国逝かしてやるわよ」

長身の美丈夫と美女のにらみ合いを見て周りの面々はアカリを除き戦々恐々としていた

”こんなところで暴れられたら死ぬっ——！！！！？？？？”

「コラ、二人とも？」

そこで、鶴の一声が響く

にらみ合っていた二人がアカリのほうを向き、少女らもびくびくし

ながらアカリのほうへ向く

その様子に満足げに頷きながらアカリは言い放った

「年頃の子供がそんな下品な言葉使っちゃだめよ？」

” やっぱりこの人もなんか可笑しいよっ！！！！？？？ ”

帝督とその関係者には常識が通じないことをあらためて知るアイテムであった

第二十二話 「垣根帝督と麦野沈利」（後書き）

やばい、Dies irae もう一回やってたときに書いたからも
うはんぱない

本編やった人なら気づくと思います。

獣殿マジ主人公。

第二十三話 「神よ、祝福を」

ステンドグラスを白い月光が透けて通り美しい色彩を放つ教会

壁が崩壊している以外ごくごく普通の教会である

少し歪んでいる十字架の前で男はいまだ跪いていた

男の体からはひどい緊迫感が現出し、空間すら歪みそうなほどに何かが圧縮されている

” まだだ、まだ届かない ”

己が主の強大さ、理不尽さへと

” 届け、届け ”

あの化け物への領域へ足を踏み入れろ

ビキッ

男の体から音が発せられる

それは警告だった、これ以上その身に魔力を宿せば人ではいられなくなるという

この”聖なる光”の幹部席に、凡人はいない

才能を持たぬ者らが力を得るために編み出した魔術、だがしかし魔術にも才能がある

そして、この漆黒のアルタイルという男は、まさしく人の範疇において化け物であった

神を、呼ぶことができるのだから

そしてこれ以上先へ行き、人でなくなれば、普通の魔術は使えなくなる

それは、彼らの主であるキリエがまさにそうだ

故に、彼の中での最強とは、人ではない化け物である

その様子を心配そうに見つめる女が一人いる

純潔のスピカ

彼女はこう呼ばれている、そして彼女もまた普通の魔術を使えない、ただ一つの魔術しか使えない

だが、彼女もまた桁外れの力を持っている

故に、人ならざる者の苦悩を知っているのだ

力を持っているという理由で拘束され、だがしかし拘束など意味はあらず殺戮し

希少な力を持っているという理由で実験されそうになり、殺戮して殺して殺して殺して殺して、いくら死を積み上げようとも、積み上げただけ、死は自らから遠のいていく

世界はどこまで行っても袋小路で、彼女は一つの答えにたどり着く

”私を殺してくれるなら、その方にすべてをささげよう”

いままで出逢った者たちの内、彼女を殺せる者など、それこそギリエしかないなかった

だが、ギリエではダメなのだ

ギリエはスピカにこう言った

”君にふさわしき者が、いずれ現れる”と

そう、スピカの体質に合う者こそが彼女を殺してくれる者

私の純潔を捧げ、全てを捧げ、殺されたい

スピカの真の奥底の願い、彼女は死にたいのだ

この美しくも醜い、そして絶望を生んでいく世界から、もう消えた
いのだ

懐かしきヨーロッパの土を踏む気はもうあらず

この極東の島国に適合者がいないなら

「やあ、スピカ」

スピカはハツとし、後ろを振り向く

そこには、壁によりかかり腕を組んでいる彼女の限定的な主
リエがいた
キ

相変わらず美しいと、スピカは素直な感情を認識する

すけば手から流れ落ちる銀の髪を腰まで伸ばし、その瞳に見つめら
れればあらゆる生物が静止してしまうような銀の瞳

まさに神に愛されているかのような肉体を持ち、そして”最強”と
認められ、また自負している怪物

だが彼女にとってリエは単に美しい、としか思えなかった

彼女自身リエには及ばないが桁外れの力を持っているからだろう
力というものがそれほど大事なもののか、アルタイルが人をやめ

てまで得たいものなのか、彼女にはわからなかった

「キリエ、どうしたの？」

彼女とキリエは友人である、”聖なる光”の中でも最古参の二人だ

「いや、君が自分の体の事を気にしているようなのでね」

「一つ言うならば、気にするな
君の好きなようにするといい」

そ、それは

「・・・本当に、いいの？」

私の適合者がいたら、きっと私は

「無論、君は願いを叶えるべく私についてきたのだろう？
ならば、その願いを叶えることを第一優先にきなさい」

でも、それは

「アナタの願いはどうするの？私の力なら、アナタの願いの力に
」

そこでキリエは唇に指を当てて、言う

「そこまでだよ、スピカ

僕は君に約束したろう?」

”君の力を僕は利用しない”

力に疲れた乙女と、力を欲する神子

「でもっ!それじゃあ、私は!アナタのことを利用しただけに
!」

そこでキリエは微笑み、スピカは息を呑む

「それでいい、それでいいんだよ

いままで長い間、僕は君を利用してきたんだ

それに、もし適合者がいなかったらまた戻ってくればいい

その時は、また一緒に時の流れにたゆたいながら探そうじゃないか」

アナタは、本当に

「悪い、人ね キリエ」

スピカは微笑み、キリエもまた微笑んだ

「残念ながら、僕は人でなしだよ」

そうして、キリエは地下室へ消えていった

ふと、スピカは己が胸に滞っていたモノが消えていくのを感じていた

それは、未練なのだろうか。

「これで、私も死ねるかもしれない」

己を消して、殺して、犯してくれる

この毎夜毎夜、スピカの星が浮かぶ、満天の星空

月の光が、この醜く爛れた体を疼かせる

英雄を、英雄を、英雄を！！

どうか、世界を壊し、世界を冒す、英雄を！！

黙れ、淫売の女神

「黙れ、お前達の好きにはさせない、私の体は私のモノ

この世界に、英雄なんていないのだから」

そう、この世界に英雄なんていない

良くて殺戮者だ、偽善者なんて腐るほどいる

だが、この世界に神はいる

クソツタレで、どうしようもなくクソツタレなこの世界には、同じくクソツタレな神様がいるんだよ

キリエはそう、私に教えてくれた、そして彼はこうも言っていた

だから、僕は世界を壊して、世界を創る

誰よりも神に愛され、誰よりも恩恵を受けるキリエが神を殺すと言うとは

なんて、喜劇なのだろう

面白くもない、安ピカレスク並みの喜劇だ

いわば自身の子供に足をすくわれ伴侶を寝取られるようなものだろう

そう、そのために私達は学園都市へ攻め入るのだ

この醜い世界を壊すために

「ふふ、どこの三流の悪役なのかしらね」

ああ、でもそれは違うのかもしれない

私達も私達でたいがいがだが、学園都市も学園都市でたいがいであることは調べがついている

これが、現実だ 善に生まれ、善に生きる英雄など存在しない

結局、英雄を生む聖戦などは行われず、闇と闇が共食いするのがこの世の真理であり

弱者を強者が虐げるものまた、真理

だけど、だけど

「少しは、期待しても　いいのかもしれない」

弱者を強者が虐げるならば、弱者を護る強者がいるかもしれない

闇を払う、正義の使徒がいるかもしれない

この世界は醜いが、それでもまだ美しい輝きを放つ人がいるかもしれない

そのわずかな希望ともしめ羨望が、彼女を動かしているのだ

だって

「恋人の死に泣けるような者も、いるのだから」

ヒタ、ヒタ

石造りの廊下を歩く、キリエ

その顔には凄惨な微笑が浮かんでいる

聖者が微笑んでいるはずなのに、邪なモノしか連想させないその笑みは矛盾しているように見えて 案外矛盾はしてなかった

いつの世も聖職者など名ばかりだ

神を冒瀆する魔女達に対抗するために己らが魔術を扱う

自らの欲を満たすため、いわれのない罪で隣人達を狩って行く

キリエはそんな世界に失望していた、絶望もまたしていた

だが、それももうすぐ終わる

「そうだとも、そうだとも！

世界が気に入らないなら、壊して創りかえればいい」

その結論に至ったのは数十年前のこと

だが、世界を壊すにはまだまだ力が足りない

だからこそ、キリエは学園都市に侵略する

「待っていてくれよ、アレイスター・クロウリー

今、貴方に会いに行く」

獰猛なまでの笑みを湛え、悦楽のままにキリエは進む

聖痕のキリエ

その体に聖痕を宿し、聖人の力も宿す、怪物

この世に幾万と存在する聖痕の内、唯一の真作であり、史上もって最悪の聖痕

神の子、ナザレのイエスのステイグマ聖痕を宿すキリエにとって、世界とは、
いふなれば、玩具

己の力でなんでもできる、己の力で全てを決められる

その身には、もううざったくなるくらいの万能感を感じられ、そしてその通りキリエの肉体は万能で完璧で絶対だった

だが、そんな彼にもどうにもできない相手がいたのだ

かつて、とある田舎町で出会った、ただ一人の魔術師

キリエは初めて敗北を知った

まるで手がでなかった、いくらその手に持つ聖槍を振るっても当たらず、だが自らの体には薄い傷が刻まれる

傷による痛みなど、かれこれ数十年感じなかった

そして三日三晩の戦闘で、膝をついたのはキリエだった

常人ならば、よくある事

喧嘩で負けたとかそういうレベルの事である

だが、キリエには衝撃だったのだ

そして、その男はこう名乗っていた

”魔術師、アレイスター”

そしてキリエはその名を覚えていただけにとどまる

なぜならそれ以降彼の名を聞いていなかったから

だが、ある日突然謎の暗号文が届き、彼は学園都市の長がアレイスターであるかもしれないと知った

キリエは歓喜、はしなかった

ただ、漠然と己の行くべき道がさだまった

世界を壊すため、まずは学園都市

そう彼は定義付けた、世界の破滅は学園都市から始まる、と

「アハ、アハハ、アハハハハッ!!」

おお、神よ！我に祝福を与えたまえ！！

今より貴方を殺しに行くのだから！

この醜い世界を創造した罪を、罰してさしあげましょう！」

こうして、夜は更けていく

闇の中で胎動するのは、いったい何であろうか。

幕間 「アインの学校生活」(前書き)

今回のお話は作者がもっとも苦手とする日常系のお話です
非常に不出来です、申し訳ありません。

幕間 「アインの学校生活」

三日目 A M 1 2 : 2 3

長点上機学園 学園都市五指に入る名門学園の内、ナンバーワンといわれるほどの名門校である。

どれくらいのレベルかと言えば、生徒のほとんどが大能力者であり、また超能力者を現時点で二人も擁するほどだ

また、能力強度の低い低能力者、無能力者もいるがどちらかと言えば大能力者達よりも化け物染みた性能を有している者らしいない。それほど化け物達の巣窟であり、そしてその長点上機学園にて事実上トップである男

最近主人公なのに妙に悪役染みている皆さんご存知、垣根帝督である。

が、彼は最近、というよりこの日より学園をサボっている。そしてそのツケがアインに回っているところである。

アインと帝督の容姿の違いは髪の色しかない

そして帝督はこういう時のために昔からその髪を公の場では金に染めていた、未元物質で

これぞまさに能力の無駄遣いである。

アインもかつて疑問に思ったのだ、なぜ己と主の髪の色が違うのかまさかこんなくたらないことのためではないだろうとは思って聞いたのだがまったく違っていたようで

主が言うには”メリハリをつけるため”らしい

そして彼らはまるでクローンのように、というより元々影武者として作られたアインである

似ていないはずがない、むしろ誰もわからない

アインが髪を茶色に染めれば黒川梓すら一瞬だまされるだろう

だが黒川梓はすぐに気づく確信をアインは持っている

”愛の力かねえ？”

愛は偉大である、愛は偉大である。

「・・・疲れた」

ワイワイガヤガヤと生徒達が動き出す、今はお昼の時間だ

基本、学生は弁当持参、または学食にての食事になる

帝督は意外も意外ではあるが弁当を自分で作っている。

窓から差し込む光にうとうとしそうな、アイン。

「ねえ、帝督君」

「ん？お前は・・・誰だ？」

自分の席でぐでーとしているアインに一人の少女が声をかける

ライトブラウンのロング、その瞳には知性が宿りどこかのお嬢様のような気品を宿している少女

事実彼女はととてももお淑やかで超巨大企業のお嬢様だが

「一緒にお昼、食べない？（帝督君帝督君帝督君！！！！）」

その実、垣根帝督ファンクラブ会長という、なんか残念な肩書きの持ち主であった

なんだかよくわからないがとてもつもなく己の主の保護者である黒川梓から似たような匂いを感じ取るアイン

「あー・・・その、なんだ」

アインは己の主ならばどう返すか思案する

だが思案するまでもなかった

己の主ならまず間違いなく”消えろ”というだろう

だが、とアインは目の前の少女を見る

今にも折れそうなほどに華奢で育ちのよさそうな顔立ち

まさしく純粹培養されたであろう少女に”消えろ”などといったら
どうなるだろう

思案、結論

泣く、間違い無く

それはアインとしては避けたかった

女の子の泣き顔は大好きだが笑顔はもつと好きなアインである

ようはただの女好き、に見えるがその実アインの根底にあるものが
関係していた

「……とりあえず名前、聞いてもいいいか？」

ざわ……ざわ……

教室の時間が止まる、それは先日帝督がアインを完成させるために合

コンを引き受けた時と同じだった

あれ？なんか間違えた？

「・・・え？あ、うん

私の名前は霧女^{キリメ}よ」

微笑みながら霧女は自己紹介をする

対し帝督は率直な感想を述べた

「霧の女と書いて霧女か・・・いい名前だな」

フラッ　霧女は倒れそうになるのをなんとか抑えた

史上最硬の硬派とまでいわれる垣根帝督が合コンへ行き一人の女狐を送りその途中襲撃に合いそれをぶちのめす

という話を聞き帝督が柔らかくなったかもしれないという情報がファンクラブ内に流れ事実確認のためという名目で話しかけたところドンピシャである、ドンピシャである！

歓喜の感情が彼女の心を支配する、そして彼女の精神を読み取った精神系能力者がすぐにファンクラブへ書き込みをする

件名　我等が王子、帝督様が軟化！

本文 皆様ご機嫌麗しゅうございます

先日よりささやかれていた帝督様軟化事件、通称・王子の妾事件、ですが確定しました

彼はその最硬の障壁を取り払いました！

皆様！悪い虫がつかないようにしましょう！

帝督はまさにアイドルのような扱いを受けていた

無論、垣根帝督本人は気にしたことも、齒牙にかけたこともない

なぜならファンクラブに所属する紳士・淑女達は彼にあまり、あ・ま・り迷惑をかけたことがないからである

ストーカーされたこともないし変な手紙もないし、まして告白されたこともない

もちろんそれらのウラには、会長たる霧女の方針故だろう

だが、今日は事情が違う。

ひょんなことから合コンなどと言うものに参加したという帝督の実情調査である。

無論、彼女自身罵倒されて断られると思っていたが、それはそれで気持ちイイのでなんら問題はなく

会長たる自身がたしかめねばならないと、気合をいれてきた霧女である。

そうして霧女は若干、暴走しながらも帝督をつれて屋上に向かっていった

ジリジリと日がさす屋上を選んだことをアインは早速後悔していた。あまりにも強い日差しに未元物質で作られ暑さなどの環境の変化にある程度強く作られているアインですらうんざりするほどだった

ふと、アインは隣の霧女を見る

”こんな日差しの下では、肌をいためてしまう”

と、帝督生来の本来の紳士気質を彼はここで発揮した。

「日差しが強いな・・・少し待て」

帝督の背から黒い何か　暗黒物質が出て、霧女とアインの頭上に展開する

ある程度の日差しは抜けるように設定された暗黒物質はジリジリと照りつけていた日差しを心地よいものに変えていた

これに感激したのは霧女だ

常に美しくありたいと思うのは世の女性達の永遠の命題であろう

「あら、ありがとう 帝督君」

ニコリ、とうらかな日差しに照らされた表情で微笑む霧女^{カオ}

「気にするな、これくらいは男のマナーだ」

そうして、二人はお弁当を取り出し空ける

霧女のお弁当はごくごく普通の女の子らしいものだった

赤の箱に白塗りの箸箱、中身も綺麗な装飾がされておりおそらく自身で作っているのだろう、余談だが、料理ができる女性はポイントが高いものである

霧女は自らの料理の腕に今この瞬間ほど、感謝したことはなかった
幼い頃より両親に教育されてきたものが役に立つことが、うれしい
と思った

霧女は横目に帝督のお弁当を見る

そして、愕然とした。

弁当箱と箸箱は普通のモノだ、漆塗りの高級なものだが彼女にとってそれくらいは普通でありなにもおかしいところはない

だが、中身がとんでもなかった

ご飯にはいわゆるバカップル弁当のような大きなハートの形と色をしたそばろがあしらわれており

果てはハンバーグまでハート形である。

ここで、霧女は戦慄を覚える。

帝督の態度が軟化した理由は、まさか恋人ができたから？

ありうる話だ、非常にありうる話である

容姿端麗、学歴優秀、そして将来有望

学園都市に七人しかいない超能力者の内の第二位という地位もまたある

そんな彼に恋人がないほうがおかしいのだ、いや、断定は誤解を招くかもしれないが

「帝督君・・・帝督君は・・・」

霧女には使命がある。

もし帝督に恋人などというモノがいるならば絶対に迷惑をかけてはならない

彼の私生活に影響がでてしまえば確実に潰されるのが目に見えてい

るからだ

故に、彼女は真相を聞きださなければならぬ

だが、ふんざりがつかない　それも当然、彼女は帝督のファンクラ
ブの会長だ

他のメンバーとは比べられないほどに帝督に好意　否、もはや信
仰と言っても過言ではないほどの感情を抱いている

故に、聞き出せない

そして

「あー、またこんな弁当なのか、相変わらず子離れできていないん
だな、母さんは」

へ？

霧女は驚愕する

こ、これが？

「これが、母親の作った弁当！？高校生にもなる一人息子にこんな
弁当を持って行かせるの！？」

社会的に殺す気なのだろうか、いや、社会人にもこれくらいなら普
通にいるけれども

だが、彼女は驚愕と同時に安堵もしていた

「ん？ああ、彼女の手作り弁当とでも思ったのか？

ハハハ、いるわけないだろう、そんなもの」

アインは内心、冷や汗を滝のようにかいていた

この弁当はオリジナルである帝督に渡されたものであり

その弁当がまさかこんなファンシーだとは思ひもしなかったのである

「こりゃ、梓さんの手作りじゃないのか？」

アイン、大正解である。

「ふう・・・まったく、こんな仕事をさせるとは」

暗黒物質を頭上に展開させて、弁当には驚愕させられて

”相変わらずマスターはバカなんだな”

そんなこんなで、アインの初めての学校は終了した

第二十四話 「狼煙は上がった」

P M 4 : 5 3

うつそうと茂る森に、ひっそりと佇む教会の中

厳かな威厳を纏っているはずの十字架は歪んでいて、冒瀆的な雰囲気を作り出している。

祈りを捧げていた男はスツ、と立ち上がり、そしてそれを見た女もまた身に纏う空気を変える

男はまるで、今にも破裂しそうになっている風船のような緊張感を纏っている

それは教会の地下にいる強者にも届いているほどの 殺気

全てを拒絶し、全てを壊し、全てを呑みこむ闇の訪れ。

なにものにも染まらず、揺るがず、純白の花しか挿せなかった
漆黒の花瓶

だが、純白の花も、枯れてしまった

そうして漆黒は、さらなる黒を増し、闇へと変貌している

今の彼を止められるものは、かつての純白か、彼以上の闇のみである
そんな男と対照的に、女はきわめて清廉な雰囲気を纏っていた
なにものにも侵されていない、純潔

触れることすらおごましく、見ることですら叶わない純潔の乙女

聖女、誰もが彼女をこう表現するだろう

彼らは対照的だった

「行けるな、スピカ」

男は仇敵を見つめるような瞳で、ある方向
方角を睨み

すなわち学園都市の

「ええ、もちろんよ、アルタイル」

女もそれにつられて学園都市の方向を見る

厳かな聖域のような、空気

そうして、彼らは再び学園都市へ向かう

ここに、狼煙は再び上がった。

同時刻 学園都市

薄暗い部屋の中で紫煙が揺らめいている

煙草と酒と、暴力の薫りがする部屋だった

壁は白に塗られており床はタイルでところどころに血痕が落ちている。

壁にたてかけてあるのはバッドや木刀といった学園都市では珍しい古い不良達が使うような粗末な代物だった

だが、ところどころがへこんでおり血の付いたバッド

血を吸って黒く変色した木刀、これらは見るだけでも対象を不安にさせる効果をもっているだろう

ここは社会の裏に潜む組織『スクール』の下部組織である『キャンパス』の小隊にあたえられるものである部屋だ

ここで『スクール』とその下部組織『キャンパス』の構成について少々紹介しよう

『スクール』に正式に所属している者は四名おり、リーダーは垣根帝督となっている

三つの組織の頂点にして原点、学園都市において第二位という地位を持つ男である

そしてその『スクール』の下に『キャンパス』の長である佐々道童子がおりさらにその下に四名存在している

そしてその四名もまた幾人かの部下を持ち図であらわすならば頂点を佐々道童子としたピラミッド構造に近い

また、医療班のリーダーである東雲縁だけは垣根帝督直轄の部隊である

そして、この部屋にはキャンパスのいわゆる下っ端たちが集まっていた

第三等級　すなわち童子の部下の部下のそのまた部下である

ソファアーもなにもないこの部屋に五人ほど集まっている

「おい、上がりは何本だ？」

最初に口を開いたのはこの面子でのいわゆるリーダーのような男だ
髪を金に染めている以外、なんら普通の学生と変わらないように見えるこの男

その実、かなりあくどい男で有名だった

薬も、盗みも、殺しも、女も知り尽くしたとすら言われるほどに彼は悪事に精通していた。

だが、そんな彼もある種の掃き溜めのようなスキルアウトから、さらにクソの集まりである『暗部』に堕ちてきた

だが 彼にとってそれはもはや天上に上ったような感覚だった

いままでのクソとは違う、本物のクソ共の肥溜め

ああ、そうとも、これこそが俺にふさわしい

彼はその瞬間、死にたいほどに歓喜に満ちていた

この瞬間を最期として迎えたいとすら思ったほどだった

だが、それでも生きなければならなかった

新たなモノが、己を動かしていたから

明日生きていられるかもわからないこの世界だ

男は快楽を求めるし、女もまた安息を求めるものである

このキャンパスの内部には、いわゆる娼婦のような女達もいる

男達は金を払い女を抱き、女達は抱かれることで金を手にし、それを上納して戦闘に出ずにいるのだ

いわゆる、必要悪のようなものだったのだろう

帝督も苦い顔をして許可していた

そして、彼がいま行っているのは

「はい、13本売れましたよ？なかなか好調ですね」

「そうか、だが、まだ足りない」

手の中のカプセルを弄び、男は言う

寧猛なまでの視線と、肥大した野心が見え隠れする瞳

その瞳の奥に潜むは狂気

「しかし、信用して大丈夫なんですか？あの科学者は」

男に対し敬意を払って話しているのは同僚だろう

男は三等級のメンバーの中でも異彩を放っていた
異彩故の、孤独とカリスマを彼はもっていた

異彩の男は同僚の男に対し目も向けずに言う

「信用？そんなものするわけがないだろう

奴も、俺も、闇に棲む者だぞ？

其れがどうして信用できようものか、信頼できようものか

俺がアイツと取引しているのはただの利害の一致だ」

手の中の薬を弄びながら男は凄惨に、嗤う

「この」アルカディア「幻想悦楽」は、金になる」

そうさ、そうとも！

「金だ、この世界でもっとも単純にして最強の手札！

ただのものさしでしかないのに関わらず、人は金に動かされる」

ならばこそ、俺が駆け上がるならば金を集めるしか手はあらず

「人はその欲望からは逃れられん

故に、その欲望に忠実に、貪欲にかくあるべきだ」

”アルカディア幻想悦楽”

ありもしない悦楽を幻視させ、その理性を解かしつくす

いわゆる 麻薬というものだった

ああ、そうだとも、俺はこれからのし上がる 否、のし上がらなければならぬ

あの人の許へ、あの方のそばへ、行かなくてはならない

この身の全て、この世の全て、彼の理に従わなければならないのだから

我が身の欲望はただ一つ

この世の全てをその身で示す、絶対無頼の白翼の君

黄金にも勝るとも劣らない美、空を羽ばたけば美しき白き羽を降らせ

この身を焦がすこの激情を、どうか御身に伝えたい

熾烈なまでに燃える我が激情　恋慕など歯牙にもかからないほどの、殺意^{アイ}

そうだ、俺はどうしても、あの男を殺したい。

嗤って、俺を虚仮^{コケ}にするあのクソを殺したい。

蹴って嗤って捻り潰して　あの小奇麗な顔を潰してやりたい！

ゆえに　戦場を用意しなければ、ならない

このクソツタレな世界なんて目じゃないほどの、戦場を

入場料には命を担保に、優勝者には死んでもらおう、参加者総て皆^ミ塵ろし^{ナコロシ}

さあ、俺を、失望させないでくれよ？

第二十五話 「凶獣」

P M 1 1 : 3 2

麦野沈利らアイテムのメンバーは現在第十〇学区にいた。学園都市で唯一墓場があり研究所が立ち並ぶこの学区はお世辞にも治安がいいとはいえない。

否、おそらく学園都市でもっとも『闇』を孕んでいるといつていいだろう。

表には出せぬ研究、哀れな羊達が闊歩するこの学区。

普通ならば、こんなところに夜中、普通の少女四人で入ってしまった、帰ってこれない。

だが、少女達は普通でなく、さらに闇に所属する者達だった。

麦野沈利、学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）の一人にして「第四位」の少女。

学園都市で怒らせてはならないリストのトップランカーにして、学園都市の鬼　　いわく鬼女とさえ呼ばれている。

社会の裏に潜む裏組織、アイテムを率いる少女だ。

「でさ、アンタ、誰？」

麦野は目の前に立つ少年を見る。

地毛のようにしか思えぬ金の髪、どこかの誰かにソックリで整った顔立ち。

二メートル弱はある長身に鍛え上げられているであろう肉体で制服を纏う少年。

「ああ、垣根帝督の私兵、ナインジョーカーズ九人の道化のアインだ」

少年　アインは気だるげに自己紹介をした。

そんな少年に麦野は少しイラつきながらも再び質問を投げかける。

「あつそ、で？帝督本人は？」

垣根帝督に私兵がいたなどという話は聞いたこともないがあまり深く聞くべきではないだろう、と麦野は判断したのだ。

すると、アインはすこしバツの悪そうな顔をして。

「あー、そのだな……寝てる」

その場にいた麦野以外の者ら全員が、空気が凍ったかのような錯覚を覚えた。

麦野は眉間に皺を寄せながら言う。

「……もう一度言ってみろ」

燃え盛るほどの怒り、当然である。

「あー、寝てるんだよ、マスター、いや帝督は」

瞬間、光線がアインの髪を一房さらっていく。

あたりに焦げたような臭いが漂い、殺気の渦が渦巻いていく。

「……あの×××野郎、今度会ったら内臓引きずり出して殺してやる」

般若のような顔をして麦野はさつさと先に行ってしまった。

そんな麦野を見てため息をつきながら。

「はあ……ま、よろしくな、お嬢さんたち」

他の三人の少女へ挨拶をするアイン。

「ええ、よろしくお願いします」

絹旗最愛は目の前の青年を検分する。

さらさらの男にしては長い金の髪、双子と言っても過言ではないほどに帝督と似通った顔立ち。

鍛え上げられた肉体や、帝督本人と似通っている甘いマスクはそんなじよそこらの女なら一夜限りの関係くらい楽に気づけそうである。事実、絹旗最愛も得たいの知れないモノを感じ己の情欲をうずかされていると感じていた。

（この男は、間違いなく女誑しだ）

そして同時に彼女はごくごく最近に知った情報を元に仮説を立てていく。

（この”アイン”とかいう女誑しは、多分　）
クローン

「よろしくねえ」

フレンドは目の前の青年を検分、はしなかった。

ただただ持ち前の女子気質をはたらかせていたのだ。

長身のイケメン、さらには女を心得ているであろう物腰。

（むふふふ、イケメンk t k r !）

いろいろと台無しであった。

「……よろしく」

滝壺理后は目の前の男　　A I M拡散力場を発している未元物質
の塊を見た。

体晶を使わずにできる程度の『観測』をしてみても、彼女は垣根帝
督へ改めて恐怖を抱く。

（……この物体は、何？）

目の前の男のように見える物体は未元物質の塊であり、そこには
本来ならば垣根帝督のA I M拡散力場しか『観測』できない　　は
ずだった。

滝壺理后は己の背につめたいものが走るのを感じていた。

（二種類のA I M拡散力場が、完全に分離しているのにも関わらず
融合している？）

分離しているのに融合、という完全に矛盾している結論だが、滝
壺理后にはそうとしか感じられなかった。

瞬間

「ッ！？」

響く轟音にアインは咄嗟に身構え、敵を視認する。

怪物、そう表現できてしまうモノがそこにあつた

ねじれた角、凶暴と言うべき貌、神話に登場する魔であるミノタウルス、というべきか、そして、その影に男が一人。

「口上など述べぬ、死ね」

たつたつたつと、スプリンターのような綺麗なフォームでアインは走る。

敵からの襲撃から逃走する際の行動としてインストールされているのだ。

こういう場合、通常の人間ではどうしても動揺がはしるためフォ

ームが崩れて失速するが、アインに動揺など存在しない。

文字通り存在しないのだ、フェイクの感情を作ることでもできるがデフォルトは無感情なのだから。

だが、アインは内心で舌打ちをする。

（ツイていない　！）

アインの今回の任務は二つだ。

一つは敵を倒すことだがこれは簡単だ、敵を見つけて殺すだけなら中学生にもできる（実際にできているし）

だが二つ目の任務であるアイテムの護衛を達成するにはこの状況はいささかマズイものがあつた。

というか、護衛もなにもあつたものではない。

「あんなバケモン、相手にしてられっかってんだ　！」

己のデータベースを直ちに検索し、アインは敵の見当がついていた。

結果、現状アイテムのメンバーら足手まといがいる状況での闘争は不利。

おそらく、否　　確実にこちらが潰されてしまう。

故にここは、誘い出してから潰す。

「現状、それしか手はないか　　！」

アイテムのリーダーである、麦野沈利は焦燥に駆られていた。

（どうする？　敵はなるほど、強大だ、おまけにアレは外部の能力者云々ではない。）

外部の能力者があんなものを作り出せるのなら学園都市はあつと

言う間に制圧されているだろう。

（あの威圧感、あの圧迫感、あの殺意、どれをとっても、私では及ばない　！）

いったいどのような方法ならあのような強大な力を手に入れられるのか、麦野には皆目、見当がつかなかった。

だが、あのような奇妙な怪物の類を操る連中がいることは知っていた。

以前、学園都市に侵入してきた連中に、似たような者がいるのを見たのだ。

「あの時の奴とはケタが違う　！！」

麦野は疾走する、今回の依頼の失敗を感じながら。

だが、しかたないとも言えよう。

彼女にとってしてみれば命あつての、である。

「そこな少女よ、そんなに走ってどこへいくのだ？」

ゾクリ、と麦野は己の背筋に走るモノを感じた。

思わず足を止めてしまうような、凍りついた声に、麦野は足を止めてしまい、そしてすぐさまそれを後悔する。

（マズイ、今振り向けば　）

容易く想像できる未来、その形はなによりもわかりやすいモノであつた。

具現化した殺意と、圧倒的な力が合わさった化け物が背後にいるのだ、それは容易く想像できる。

だが、麦野沈利は、この程度の危機で諦める者ではなかった。（覚悟を決める、私はまだ死ねない、死ぬわけにはいかない）

おそらく　否、まず間違はなく勝てないだろう。

だが、負けない戦いならば、展開できると、麦野は思っていた。

勝つ、と負けないとはおおいに難易度が違うのだ、勝利とは勝利条件にもよるが大抵、敵への干渉と自らへの干渉を防御すること

を両立させなければならない。

だが、負けないだけならば、自身への干渉を防御するだけでいいのだ。

そして、麦野沈利は攻撃こそ最大の防御であることを、その言葉以上に、経験をもって知っていた。

故に、彼女は振り向かず、その能力を行使することを選んだ。

「　　シッ！」

麦野の能力、原子崩しが炸裂する。

空気中に存在する電子、電子は通常、波形、もしくは粒子として存在し安定している。

だが、彼女の原子崩しは電子の状態を波形と粒子、そのどちらでもない状態を作り出す。

結果、電子はほとんど質量の持たない壁となり、破壊力を持つのだ。

そして、その壁を高速で射出した場合、それは超高温となり、敵へ炸裂する。

ものみな焼き尽くす破壊の光線、麦野は振り向かずそれを射出した。

「グッ　　！」

背後からの声に、麦野は己の勝利を自覚する。

（前提はクリア、後は　　）
逃げるだけ

麦野は無事、戦域を離脱する、かに思えた。

「逃がさん　　蚩尤！」

地面が砕けるような音の後、獣の唸り声のようなものが聞こえた。麦野は己の危機がいまだ続いていることを自覚する。

（マズイ、原子崩しは連発ができない　　どうする？）

原子崩しはその破壊力において、第三位である超電磁砲を凌駕する。

超電磁砲は射出する物体に大きく威力を左右されるが、原子崩しは射出する電子の量で決まるからだ。

では、なぜ超電磁砲が三位であり原子崩しが四位であるのか。

それはその工業的利用価値の差もあるだろうが、なにより“実際に戦闘を行えば、原子崩しでは超電磁砲に勝てない”ことがあげられるだろう。

彼女の原子崩しは、その威力が高すぎるのだ。

そしてなによりも、彼女の原子崩しと御坂美琴の超電磁砲とはその応用力に差がありすぎるのだから。

故に、麦野は誰よりも自らの能力の限界を知っていた。

同時に、自らの能力の破壊力をも、知っていた。

だからこそ、彼女はその力を行使する 全力で。

彼女は笑った。

「アハッ……悪いね、私はまだ死ねないの、だから」

彼女の周辺の密度が上がる。

揺らめいて、揺らめいて、固定される。

「むっ！」

彼女の周辺の電子が揺れる。

壁が出来上がり、そして

「フォーリンダウン 空間失墜 メルトダウン 原子崩壊」

全方位に射出された。

総てを焼き尽くし、溶かしつくしながら、光線が突き進む。

そうして、残ったのは残骸だけであった。

「ハアハアハア……グッ！」

麦野は能力の反動にたまらず膝をついてしまう。

彼女のいわば暴走技といえるだろう、“空間失墜、原子崩壊”は自らの周囲にある総ての電子を支配しそれを全方位に射出するとい

う、殲滅兵器のようなものだ。

この技の長所は単純に敵が避けられないことである、全方位に射出するのだ、それを避けられるはずがない。

短所としては、単純に消耗が激しいため、この技を行使した場合、強制的に能力使用が数分行えない。

「グッ だけど……なんとか倒したかな」

あらゆるものを溶かしつくす原子崩壊マルチダウンを受けていれば、流石にひとたまりもないであろう。

だが

「ああ、以前の俺なら今ので死んでいたろうな」

まだ、終わりではなかった。

麦野は戦慄と共に、ここへきて諦念を抱く。

（ああ、そうか、ここで私は終わるのか）

思えば、長かった。

能力の暴走により研究員達を虐殺し、闇から抜け出せなくなっただだ一つの光を見つけて、アイテムという仲間もできて。

今まではそんなことを思ったことはなかったけれど、楽しかったとも、思えた。

次々と浮かび上がってくる、己の人生。

血と臓物と薬品の道であった、けれどそこには同じ痛みと信念を持つ仲間がいた。

信念、そう信念だ、はて、なんであつたろうか。

（ああ、そうだ、そうだった）

諦められない、理由があった。

「私は……諦めない、諦められない」

そうだとも、あの日、あのバカたちとあんなにバカ笑いしながら話したじゃないか。

くだらない日常のページ、だけど、それこそが、私達が戦う理

由なのだから。

アイテムとは学園都市“治安維持部隊”なのだから。

上層部など関係ない、私達はただ、この街を護るためにいるのだ。
ここで私が負ければ、誰かが傷つくのだ。

（ああ、そんなものは認められない）

それは原子崩しが未熟であるという、誤認を生んでしまう。

（私は誰だ？ 学園都市最強の超能力者の一人だ、それが、未熟？）

ああ、ふざけるな

彼女は覚悟を決める、死なぬ覚悟ではなく、殺す覚悟を。

「悪いけど、アンタには死んでもらう」

いまだ能力の使用は不可能、だが彼女は諦めない。

そんな彼女の様子を見て、男は返答する。

「悪いが、貴様には死んでもらおう」

そうして、両者がぶつかりあう、という時であった。

「おいおい、俺も仲間に入れてくれよ」

漆黒の剣、というべきだろうか。

漆黒の剣が、空より飛来し、少年は降り立った。

第二十六話 「斬間・斬魔」

俺は手に持つ暗黒物質により作り上げた剣を振りかざしながら、
麦野沈利を背に下げて言う。

「逃げる、こいつは俺が引き受けた」

打開策はいまだに模索中、さらに背に荷物を背負っている状態で、
なにを引き受けるというのだろうか、言語道断である。

当然、麦野沈利がただ護られているだけの女ではないことは承知
していた。

「ふざけんな、アイツは私を狙ってるんだ。そこにしゃしゃり出て
くるんじゃない」

背後からの強烈な殺気、見ずともわかるが、おそらく今の彼女は
般若のような顔をしていることだろう。

だが、俺の仕事は彼女らアイテムの護衛である。なればここで彼
女のような足手まといと共闘するより、彼女には逃げてもらうほう
がよほどいい選択であった。

「フイーア、麦野をつれて消えろ」

刹那、俺の背後から麦野が消えた。フイーアによってこの場を離
脱したのだろう、ならばよし。

「さて、待たせたな」

改めて目の前の化け物を観察する。牛の頭を持ち顔面は鉄に覆わ
れておりその凶暴な瞳のみが覗いている。人一人分はあるであろう
腕、また発達した大腿部の筋肉は馬の足を思わせた。

そしてなにより、その存在密度。まるで幾十幾百幾千のなにかを
詰め込んだかのような威圧を俺は感じていた。

そして、そんな化け物を従える男は、謡うように言った。

「いやなに。犬と犬が交尾でも始めるのかと思いい見物していたが、なかなかどうして、人語が上手いようだな」

「はっ、そりやどうも。アンタもなかなか日本語が上手なご様子で」

軽口の応酬をしながら俺は化け物の分析を開始していた。だが牛の頭と鉄くらしいしか目立ったキーワードがないためか、時間がかかっている。

「それで？ 私の魔術の解析はすんだかね？」

脳　　「いって末元物質によって作られたまがいものでしかないのだが　　という脳の演算能力をすべて割り検索しているところに奴は言った。」

「いんや、見つからない。困っちゃったよ、対処のしようがない」

これは軽口でもなんでもなく本音であった。なぜならそれがなんであるかわからなければ対処のしようがないのだから。

そう考えていると、奴は突然に嗤いだし、侮蔑を込めて言い放った。

「対処？ 対処とな！？　笑わせるなよ犬畜生。貴様が正体を知ったところで、こいつには敵わんよ」

検索、検索、検索……あらゆる情報を見逃さず、余さず調べつくして行く。

「なにせこいつは　　神なのだから」

眼前の男は高らかに、誇らしげに、往年の恋人へ向けるように云う。

「さあ、我が復讐の第一歩、私の　　」

憎悪に染まった眼を見開き、男は自らの武装に命じた。

「轍に変われ！　我が怨敵！」

オオオオオオ　　と、低く、唸るような音を上げて、化け物は走り出す。

俺はそれを見て 微笑んだ。

「ククッ 斬魔の太刀」

手に持つ黒き剣を振りかざし、俺は化け物へお見舞いする。

ザン、と。あっけなく断ち切られたソレは、もの言わぬ肉塊となり、崩れ落ちた。

「な……に？」

啞然とした男の顔、嗤う俺。

愉快だった、まるで自身の負けを予期していなかった男の、呆然とした顔を見ることが、とても悲哀に満ちているように見えたから。

「アハハッ 最高だ、お前」

なにがそんなに信じられないのだ？ そんな裏切られたような顔をして、なにがそんなに信じがたい？ 受け入れがたい？

「そんなにその魔術が破られたことが信じられないのか？」

そう言うのと、男は呆然とした顔から、ハッとしたような顔をして、叫ぶ。

「あ、在り得ない。アレは、アレは！ 間違いなく、神だったはずだ！ それをどうして貴様ごときが断ち切れ」

「神じゃねえよ、ソレは。ただの肉の集まりだ」

それは比喩でもなんでもなく、事実であった。

「アルタイル、つまり牛飼いの彦星。お前がそこから理を引っ張ってきていたことは知っていた」

男 アルタイルは一度名乗っているのだ、佐々道童子に。

それを俺は聞き及んでいたからある程度の当たりをつけることができる。できていた。

だが、牛飼いと聞いて思い浮かぶ魔術などそれこそ星のようにあったのだ。

古今東西人類と深い関係にあった家畜である牛は、あらゆる神話に登場していたゆえに。

だが、もう一つ、俺は奴から聞いていた。

曰く『違和感』というものだった。

動物的な本能から感じたものであるうソレは、作られた存在である俺には到底感じれないものであり、実際感じていなかったのだ。

故に、俺はそれを信じた。

では、信じたらなんなのかと聞かれれば、俺はこう言うしかない。すなわち存在としての違和。

それは人間が他の存在に感じる違和の総てである。

完成された存在がある場合、それに似せて作られたモノに、人間はかならず違和を覚えるものなのだ。

だから、俺は一つの仮説にいたった。

だが、その時点において俺は、対抗策を練られてはいなかった。まずベースとなっている素材におけるキーワードが“牛”であること。

そしてそれは存在としての違和、すなわち偽物であることしかわからなかった。

だが、決定的なキーワードをアルタイルは提供してくれたのだ。

曰く『神』

それを聞いた瞬間、俺の中に疑問が生まれたのだ。

“神であるモノが、この程度の存在密度であるのだろうか”と。

その瞬間、俺の仮説はある程度の信頼性を持った。

すなわち奴の使役していたモノは、牛をよせあつめ作り上げたまがい物の神にすぎない、というもの。

だが、その程度ならばこれだけの魔術師であるならば存在の違和を如実に出してしまったりはしないものなのだ。

足りないものは他から補う魔術師が、それに違和を感じさせては二流もいいところであるが故に。

アルタイルは一流だ、なにせまがい物であろうとも神を使役しているのだから。

ならば、どうして違和を感じさせてしまうのか？　と思いつた

とき、俺はある事実を引き当てた。

すなわち、混成魔術。

奴の魔術ベースは大陸の神話、だが大陸の神話だけではどうしても奴の作り上げたかった神は作り出せなかったのだろう。

当然である、なぜなら大陸の神話とはマイナーとまでは行かなくとも魔術の源である信仰というものがメジャーなキリスト系やギリシャ神話などに比べた場合落ちるのだ。

つまり大陸魔術だけでは、神を作り上げるだけの理にはとどかなかったのだ。

故に、奴はそれを補うために、他の魔術体系を混ぜ込んだのだろう。

「獣の数字を織り交ぜたんだろ？」

獣の数字、別名悪魔の数字と呼ばれる数字である。

信仰において最高峰の理を持つ聖書、それに記されし災厄の数字であると同時に虚像を作り上げる場合における最高の数字。

そして俺は答えを導き出したのだ。おそらく、牛666頭を集め、牛にまつわる神にしたてあげたのだろう、と。

「だから俺は、お前の魔術の致命的な弱点である結合の弱さを突いたんだよ」

体系の違う魔術を併せて使用した場合、その二つの魔術にはかならず隙間が生じるのだ。

故に、魔を断つ概念と間を断つ概念の結合体を用いて、斬り捨てたのだ。

魔術への深い知識を持たねばわからぬ弱点であるが故に、奴は放置していたのだろうが、生憎、垣根帝督という男は魔術と科学のハイブリッド。

魔術の根底にある概念にこの世界においてもっとも精通しているであろう化け物なのだ。

そしてなにより、奴が敗北した決定的な理由は

「これから闘う相手に、自分の獲物の情報を漏らす奴は、闘争者と

して二流だ」

アルタイルは魔術師としては一流である、だが闘争者としては二流であった。

「だから、消えろ」

そういつて、俺は手に持つ剣を

「ふざけるな」

投擲しようとして、その悲哀に満ちた叫びに止められた。
アルタイルは憎悪と悲哀と憤怒を込めて、叫び散らした。

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！ 私は負けぬ、私は死ねぬ！ 彼女の仇を討たぬ限り、私は死ねぬ！」

ああ、そうか。

「舐めるなよ犬畜生。私の武装が蚩尤^{シユウ}だけだと」

「だから俺は、こんなにも愉悦を感じていたのか」

それは紛れもなく愛だった、それは紛れもなく哀であった。ぐじゅり。

アルタイルの叫びは、憎悪と憤怒に覆われた、混じりけなしの愛であり。ぐじゅり。

深き深き哀であったのだ。だから、俺はそれを断てる事に愉悦を感じていたのだ。ごとり。

その愛に、その哀に嫉妬して、だからそれを蹂躪できることに、俺は愉悦を感じていたのだ。ぴちゃり。

ああ、もったいない、殺してしまった。

「翺つてやれば、よかったよ」

崩れ落ちるアルタイルを見ても、もうなにも感じなかった。
それはすでに物だったからだろ。物に感情はないし、愛もなけ

れば哀もない。

「……で？ 説明が欲しいんだけど？」

放心状態にあった俺を引き戻したのは、いつのまにか背後に居た
麦野。

俺は振り向き状況を確認する。

傍らにフィーアがいるところを見ると、おおかた我等が主様が
つれてこさせたのだろう。

なんでそんなことをさせたかは知らないが、まあいい。

しかし、説明と来た。始めは麦野を離脱させたことへの説明か
と思ったが、麦野はそんなことを聞くほどに愚かな女ではないことを
思い出し、そして真意へ思い至った。

ようはこの二人、離脱した後にはすぐさま戻ってきたのだ。

「Need to Know」という言葉を知っているか？」

俺がそう云うと、麦野はあからさまに不機嫌な顔をしながら云う。

「……“情報は必要な者にのみ開示される”、でしょ？ 知ってる
わよそれくらい」

「なら、わかるな？ 魔術なんて存在しないし、ましてあんな男は
この学園都市には存在しなかった。理解したか？」

そう、科学と魔術は相容れないものなのだ。

故に、深く聞かれるのは困るし、なによりマスターに教えるなど
云われていては、俺達はそれに従う他ないのだから。

「はいはい、わかりましたよ。私はなににも聞いてないし、なににもさ
れてない。それでいいんですよ？」

「そう、それでいい。長生きしたければ余計なことにクビを突っ込
むな」

「そんなこと、アンタに云われなくてもわかってるわよ。何年この
街で生きてると思ってるの？」

呆れをにじませた麦野に苦笑しながら、俺は沈痛な面持ちをした
フィーアに問いかける。

「それで、どうした」

戦闘中であるにも関わらず俺のところへ戻る、ということは

「……マスターは迎撃に出てた」

ああ、やっぱりか　と、俺はため息を隠せなかった。

普段、俺達の指揮を執るのはマスターである。だが、なんらかの事情により指揮できない場合は俺に指揮権が委託されるのだ。故に彼女は俺のもとに来たのだろう。

「それで？　誰を連れていったんだ？」

「多分、ツヴァイ」

それを聞いて俺は、深く深く、ため息をついた。

「それはまた……戦争でも始める気なのかね……」

第閑話「装甲悪鬼美琴」注意・ネタです。（前書き）

これは作者がなんとなく書きたくなって書いただけのネタです。
作者が好きなものがわかるくらいいいしいしいことではないですがこんな
感じのがスキな方はこれ以降この作品を苦もなく読めるとはおも
います。

推薦BGMは「刃鳴散らす」より「BLADE ARTS」

第閑話「装甲悪鬼美琴」注意・ネタです。

もしも御坂美琴が剣術を習得していたら。

「
」

少女　御坂美琴は男を見据え、睨みつける。

赤い小袖の着流しを纏い、腰には刀を括り付け、御坂は体を沈ませる。

前傾姿勢、すなわち狩りの構えであつた。

そんな御坂を見据え、男　一方通行は挑発的な笑みをしながらも高速思考を止めなかった。

（敵　学園都市七人の超能力者、第三位、電磁^{レールガン}抜刀・御坂美琴）
首元に存在するチョーカーを模した演算補助装置に手を伸ばしながら、一方通行は思考する。

（このチョーカーの機能に気づかれていないなら、勝機はある）
学園都市最強の超能力者である一方通行は、その脳にダメージを負っていた。

とある少女を助ける際に受けた傷だが、彼にとってソレはある種勳章のようなものだつた。

だが、負傷の結果、彼は日常生活すら困難になつてしまい今は外部のネットワークによる演算でその体を動かしている。

そしてその外部とのネットワークとの繋がりは電波、つまり電気であり。

電気とは御坂美琴の真骨頂、故にこのチョーカーの機能を知られてしまえば彼はすぐさま倒れることになる。

だが、気づかれていなければ勝てる、というわけでもない。

彼が勝つためにはどうしてもその能力　ベクトル変換に頼らねばならないが、今の彼にはそう易々と扱える代物ではなかった。

彼の能力であるベクトル変換であるが、そのために必要な演算を行ってしまえば外部のネットワークと彼の脳を繋ぐチョーカーのバッテリーが切れる可能性があり、過度の使用を行えばすぐさまその機能を停止し、彼はただの肉の塊へと堕ちる。

故に、彼はこのチョーカーの使い時を間違えることは敵わなかった。
(チッ、凱旋したと思いきや、まさかこんな落とし穴があるとはなア)

護るべき少女達の産みの親、とでも云えばいいだろう。

そして、護るべき少女達の産みの親である御坂美琴を、殺すことは彼にはできない。

(殺す？　ああ、そんなもの考慮にも値しない)

彼はかつて誓った、とある少女に連なる者らを護ると。

ならば、その根源たる少女すらも、彼は護らねばならない。

だが、護らねばならぬ少女は殺意をもって、彼の前に現れてしまった。

「フン、よくもまあぬけぬけと、俺の前に現れてくれやがったな。
レールガン
電磁抜刀」

すでに御坂は砲台たる愛刀に手をかけ、燃料をくべていた。

バチッ、バチッ。飽和した電気が鞘全体から漏れ出し、電気特有の音を響かせる。

一方通行はすでに発射準備に入った御坂を見て、戦術を組み立てていた。

(電力による磁力操作を用いた神速の抜刀　　レールガン
電磁抜刀、か)

御坂美琴が第三位の地位に据えられているのは彼女の能力の汎用性だけでなく、その応用力にあると云っても過言はない。

彼女は自身の学ぶ剣術に自らの能力を応用し、神速の抜刀術を得た。そして、彼女はそれだけでなく遠距離からの超電磁砲もまた扱える。

また、敵が刀は届かないが超電磁砲で狙うには近すぎる場合にも、砂鉄を自在に扱えるため彼女は中距離にも強かった。

クロスレンジ、ミドルレンジ、ロングレンジ。総ての距離に応用可能なその能力は、数多の挑戦者達を寄せ付けなかった。

だが、その応用力すらも上回るのが、一方通行のベクトル変換。触れたもののベクトルを逆転させるという単純な理論でありながら最強の盾となる反射をはじめ、触れただけで敵の体内血流を逆流させ即死に追い込むベクトル変換。

彼を前にして生き残ることは至難である。

だが、今回のような相手を殺してはならぬ状況は、彼にとって鬼門というべき局面だった。

つい先日もそれを逆手に取られて随分と梃子摺ったのだから、なるほど鬼門であった。

そして、今の彼女が放とうとしている砲弾こそ レールガン 電磁抜刀。

彼女が持つ技の内もつとも射程が短く、最速かつ最強たる技。

電流により発生したローレンツ力、すなわち高圧電流により発生した電磁場による力を用い神速の抜刀を行う技。

彼女はこれにより、第四位たる麦野沈利を退け、その地位に据え置かれたのだ。

では、最速かつ最強たる所以はなにか、ということはおそらく彼女の放つ技のうち第二位の速度と威力を誇る超電磁砲と比較すればわかりやすい。

超電磁砲 電磁抜刀と同じローレンツ力を用いコインを射出する技。

同じローレンツ力を用いるならばその威力や速度は等しい など
と思っではならない。

まず第一に砲台の違いがあげられる。

コインを射出する超電磁砲は基本的に砲台を持ち得ない。

電流による誘導で狙いをつけ、ローレンツ力により射出しているか

らだ。

だが、この方法では電流による誘導にキャパシティを裂き、さらに力を収束させ一点に集中させる砲台が存在しないため、どうしてもエネルギーが逃げてしまう。

だが、電磁抜刀の場合は異なる。

抜刀、すなわち鞘から刀を抜き放ち敵を切り裂く技法であるが、之の場合鞘が砲台の役割を果たすのだ。

電磁抜刀の場合狙いを定めるのは彼女の技量であるため直接の電力行使には影響しないためその分もまたローレンツ力の増強にまわせるのである。

また鞘という砲台があるためエネルギーは収束し、まさに神速といえる抜刀が放たれるのだ。

だが、この技はそうそう簡単に行えるものではない。

ただコインを誘導し、射出する超電磁砲ならば能力行使への集中のみで放てる、が。

電磁抜刀は狙いを自らの技量により定め、さらに神速で抜き放たれる刀を新たな電磁場を作り出し制御しなければならないのだ。

すなわち能力行使への集中、抜刀への集中、そしてさらに放たれた刀を制御するための能力行使が必要になるのだ。

敵を攻撃するまでに必要な工程では超電磁砲が三工程、電磁抜刀では二工程。

工程の数はそのまま攻撃の速度に影響する。

だが、工程の密度ならば電磁抜刀は超電磁砲を圧倒してしまう。

ほんの少し狙いがズレてしまえば当たらず、抜き放たれた刀の制御を一つ誤れば腕が千切れ飛ぶのだ。

ならば刀を放せば良い、という者もいるだろうがそれはできない。なぜなら刀に対し電力を供給している掌を、彼女は刀に発生している電磁場と吸着させているのだから。

では、何故掌と刀を吸着させているのかといえば単純にそうせねばならないからである。

電磁抜刀は放たれた瞬間、神速で抜刀される。

つまり、刀と掌を吸着させねばどっちにしろ鐔により手が吹き飛んでしまうのだ。

ここまで記述すればわかるだろうが、電磁抜刀とは彼女の能力と彼女の技量、そして並外れた集中力により行使できる技。

リスクは高く、一歩間違えれば最善で手が消し飛び、最悪刀に身体をもっていかれそのまま何かに衝突して死ぬ。

だが、その威力は神速であり絶対無比の力を誇る。

故に、彼女は格上たる一方通行に勝てるとするならば、電磁抜刀しに在り得ないと判じたのだ。

だが、たとえ電磁抜刀であろうと、一方通行には通用しない。

なぜなら、一方通行の能力たるベクトル変換はあらゆる力の向きを変えられるためたとえどんな神速であろうと、それが彼に触れた瞬間、彼の思い描いた方向へ飛んでいくことになるだろう。

だが、今回の戦いにおける一方通行の目標は御坂美琴を殺さずに止めることであった。

（反射は使えねエ、ベクトルを反射しちまえばこいつはスクラップになっちまう）

あらゆる運動の向き ベクトルを意のままに操作できる能力、故に彼は最強なのだ。

だが、彼はいまだに思案していた。どうすれば殺さずに止めることができるのか、と。

もしも御坂美琴を殺さず止めるならば、その方法としては二種類考えられるだろう。

まず一つに電磁抜刀を放つ前に止める、という方法がある。

電磁抜刀は射程がその刀の間合い分しか存在しないためまずは一方通行との間合いを詰めねばならない、故に彼女は間合いを詰めるた

めに動くだろう。

だが、そのときにはすでに電磁抜刀はいつでも放てる状態にあると云っていい。

故に間合いを詰めはじめる前に止めねばならないが、それは至難である。

なぜなら、御坂美琴を止めるならば遠距離から攻撃する、もしくは砲台である鞘に触れて電流をベクトル操作により散らす等方法が存在するが一概に云ってそれらは不可能と云っていい。

それは何故か。間合いを詰める前の彼女には、遠距離からの攻撃を防ぐための能力行使が可能であり、また彼女の刀に近づきその電流を散らすなど愚の骨頂。

間合いを詰める前の彼女を止めるための手段であるのに、自らその間合いを詰めては意味がない。

一方通行が彼女に近づこうとし、その間合いに一寸でも入らば、彼女は抜いてくるだろう。

故に、彼女が電磁抜刀を放つ前に止められる機会は一瞬のみ。

すなわち、彼女が間合いを詰めようと思考した瞬間。

間合いを詰める前の思考である詰められれば斬る、飛び道具ならば叩き落す、という思考が間合いを詰める最中の思考であるいかに当てるか、いつ放つかという思考に変わるまさにその時。

その瞬間にのみ、隙が生じるのだ。

思考の隙間、意識の隙間、唯一反応できない瞬間。

いわば防御に重きを置いていた思考を攻撃に重きを置く思考に変える瞬間。

それは、どんな卓越した戦闘者でも生じる隙である。

そして、もう一つの方法は電磁抜刀が放たれた後に止める、という方法。

間合いを詰められ、もしくは自ら詰め電磁抜刀を放たせてそれを避けて、御坂美琴を拘束する。

攻撃の直後、どうしても反応できないその隙を突くというものであ

る。

……だが、これは言葉にするのは簡単ではあるが、実行するとなると困難を極める。

まず、電磁抜刀を避けるにはその刀の間合い、つまり長さを見極めねばならないが、生憎一方通行には剣術の心得などはなかったのだ。故におおまかな尺はわかってても正確な間合いまではわからない。それは避けることを前提にした場合致命的過ぎるものであった。

たとえ一寸かすただけでもまずその部位が吹き飛ぶほどの威力なのだ、当然である。

そして、よしんば間合いを掴めたとしても、その神速の抜刀を避けられるかどうか、という問題も存在した。

およそ音速の数倍、少なくとも人の視覚には捉えられない速さである。

無論一方通行が剣術の心得でもあれば多少なりとも軌道を見切ることもできたであろう。

だが、彼にはそんな心得など存在しない。

だがしかし、皮肉なことに彼が思い浮かべた二種類の方法は、いわゆる剣術における勝機というものに当てはまっていた。

一つ目の電磁抜刀を放つ前の機を剣術において『先』と云い、二つ目の電磁抜刀を放った後の機を剣術において『後の先』と呼ぶ。

このほかに『先の先』という機も存在するが、この戦いにおいてその機はおそらく望めないであろう。

だが彼には、敵の思考を読み『先』を取るなどということはできないし、また放った後ではどうしようともその刃が彼の身体に触れてしまう。

つまり、彼には御坂美琴を殺さず止める方法が、さっぱり思いつかなかったのである。

（つてオイ、そりゃアねエだろオ。なにか、なにかあるはずだ）

一方通行は今までの戦闘経験、様々な知識、あらゆるすべてを用いで策を練る。

だが、いっこうに思いつかぬまま、戦況は動きを見せてしまった。

「学園都市最強の超能力者、一方通行」

低い、低い声だった。

憎悪という憎悪が込められ、憤怒という憤怒が込められた声であった。

その腰に携えられた刀に手を添え、いまにも抜かんとする御坂。

「当方、御坂美琴。一身上の都合により、アンタを」

足に力が込められ、爆発せんと構えられた。

刀はすでに雷鳴すら幻聴するほどに電気を蓄え、いまや御坂の意のままに刀はローレンツ力に従い抜刀されるだろう。

（しまったな。思考時間を取りすぎた）

「殺す」

殺意、であった。

ただひたすらに純粹なまでの殺意。

そこにお前がいるから、私は殺す。といわんばかりに御坂は殺意の刃を突きつける。

そして、戦況は決定的なまでに動いた。

御坂の疾走が始まる。その凶刃の間に、一方通行を捉えるために。一方通行との間合いはさほど離れてはいない。

このままでは一方通行は凶刃をその身に受け、死ぬ。

だが、それでも彼は彼女を傷つける気はなかった。
（俺は一度誓った。ならそれを破ることはしない）

それは覚悟、とてつもないほどの覚悟であった。
人間はさまざまな覚悟をするものだが、迫り来る死を前にしてその覚悟を貫き通せるものは、まずいない。

この世は小説でもアニメでもゲームでもない、現実なのだから。
たしかに実感を持って迫る死、だがそれを認識してもなお、一方通行は彼女を傷つけるつもりはない。

「吉野御流合戦礼法　迅雷が崩し」

技を放つための自己暗示が始まった。

通常ならば技を宣言するなどという攻撃のタイミングを教えるよう
なりスクは犯さないが、電磁抜刀という技を放つ場合はその技を放
つという明確なまでの認識があつたほうがより技が強固になるのだ。
無論、宣言せずとも放つこともできるし宣言せずとも一人殺すこ
とくらいわけではないが、一方通行相手であるからであろう。

彼女は技の発動タイミングを知られるというリスクよりも、技の完
成度を上げるというメリットを取ったのだ。

そして、一方通行への死の最後通牒が宣言される。

「電磁抜刀

「禍」

瞬間、あらゆる音が停止した。

今や一方通行の瞳には御坂美琴のみが写り、御坂美琴の瞳には一方
通行の未来が幻視されていた。

閃光が世界を焼き、彼女の凶刃はその刃を晒す。

雷を帯びて、刃は力により射出され、一方通行の肉体を切り裂く
ことはなかった。

「な、に？」

その在り得ない現実を認識し、だがそれでも御坂はやるべきことを忘れはしなかった。

電磁抜刀は放った後に、新たな電磁場を作り出しその力を相殺せねばならない。

彼女の経験はなによりもまずそれを優先し、彼女がそれを意識した時にはすでに演算が終わり、能力は行使されていた。

空振りした刀は制御され、止まる　刹那。

「捕まえたぜ、電磁^{レールガン}抜刀」

不意に、彼女の身体がぬくもりにつつまれ、瞬間地面に組み倒されていた。

身体に襲い掛かる衝撃、それを認識した時には、彼女は能力行使を封じられていた。

一方通行は空を飛び、電磁抜刀から逃れていた。

電磁抜刀の欠点はその射程にある。

当然だ、なぜなら電磁抜刀など大仰な名がついているが、所詮それはただの抜刀術。

刀に人は斬れたとしても、空を飛ぶ鴉を斬ることは敵わないのだから。

御坂が己が一方通行に組み倒されていると認識し、状況を正確に認識した時。

その時すでに御坂にとって身体に感じる温もりが、無機質なまでの冷たさを感じられていただろう。

それほどまでに、一方通行に触れるとは恐怖なのである。

それはまさに抜き身の刀を喉に押し付けられているのと同義である

のだから。

だが、それでも御坂美琴は己の矜持を曲げなかった。

「殺しなさい、アクセラレータ一方通行」

「殺せねエよ、レールガン電磁抜刀」

そこで、二人は硬直した。

御坂はなんの感情も見せずに、云う。

「なぜ私を殺さないの？ 貴方に刃を向けた者を、なぜ殺さないの？」

「殺さねエと、決めたからだ。俺はお前達をこれ以上殺さないと、決めた」

それは既に一方通行の中で決定事項であつた。

かつて学園都市には絶対能力者進化計画というモノがあつた。

学園都市最強の超能力者、一方通行を中心とし、その時行われていたある計画の産物を利用し、彼を神の領域である絶対能力者へと進化させるための計画だつた。

そして、ある計画の産物こそ、彼が護ろうとする者達である『妹達』である。

学園都市最高峰の演算機器である樹形図の設計者を用い、彼を絶対能力者へ進化させるためには御坂美琴を百二十八体用意し百二十八通りの戦場を用意せねばならないという結果を導き出したが当然、超能力者である御坂美琴は百二十八体も用意できなかったのだ。

故に研究者達が着目した計画、『妹達』を産み出した凶器の産物である『量産型能力者計画』により産まれし『妹達』二万体を二万通りの戦場を用意することで代替したのだ。

そして、彼は『妹達』一万体を殺し、残つた一万人の『妹達』と、闇に差し込む光であつた『打ち止め』を護るために、動いていた。彼の誓いは、絶対なモノとなり、彼の芯に根付いていた。

「俺はもう、お前らに連なるものを絶対に殺しはしない。そう、決めた」

絶対の覚悟を決めた一方通行は、御坂美琴にすらそれを適用しているのだ。

それを知って、御坂美琴は　嗤った。

「クッハハハハ、アハハハハ！　アホらし、そんな風にして、アンタは自分を慰めてるの？」

無論、違っだろう。

だが、そう云われても詮無いことである。

事実、彼が『妹達』を一万体虐殺したことは純然たる事実であり、そしてその償いのために護っているも同然なのだから。だが、違っのだ。

「違エよ。ただ単に、アイツらを護るのは俺で、俺だけって事だ」

「ふざけるなよ、一方通行。それは私の罪で、私のモノだ」

憎悪という憎悪を込めて、憤怒という憤怒を込めて、勇気という勇気をたぎらせ、御坂美琴は叫んでいた。だが、ふっ、と。彼女は表情を緩めて、云った。

「だけど、そっか。アンタも少しは、人間らしくなれたんだね」

まるで、子供を見守る母のように、御坂美琴は云う。

これに面食らったのは一方通行である。

「あ、あア？　な、なにをデメエはとち狂ってやがる？」

「いいのいいの、気づいてたし。アンタがあんな娘たちを愛してたのなんてね」

「あ、愛イ！？」

一方通行は本当に驚愕していた。

な、なんだこの女、本当におかしくなっちゃったのか、と。
だが、それでも御坂は微笑みを崩さない。

「私はただ、アンタが本当にあの娘たちを護れるか見たかっただけ、
だからもういいの」

でも、と彼女は続け。

「それは私の罪でもあるんだから、一人で勝手に背負わないで。置
いてかれるのは、もう嫌なの」

そんな、聖母のような微笑みを見て、一方通行は確かに実感してい
た。

（ああ、確かに。俺はあいつらを愛してる。無償の加護こそが、愛
ならば）

「ふん、勝手に言ってる。ほら、立てよ。電磁抜刀」

「ふふん、勝手に言っわ。このオタンコひよる男子」

第閑話「装甲悪鬼美琴」注意・ネタです。（後書き）

要は戦闘が書きたかっただけです。

推敲も修正もしてないのでただのネタだと思ってください。

過分なまでに奈良原さんの影響つけてますが、まあネタですので。

第二十七話 「英雄と女神の邂逅」

「ツヴァイ、身体の調子は？」

夜の路地裏を歩きながら、俺は後ろをついてくるツヴァイに問いかける。

その長い黒髪　そう作ったのは俺だが　を揺らしながら、すこしばかり綺麗に作りすぎたかもしれないと思えるほどに端正な顔を少しこわばらせ、ツヴァイは云った。

「七割、といったところです。今夜の相手が何者かは知りませぬがこの身体の調子が万全でなくとも、敵を逃がすことはないでしょう」その自信に満ち溢れた返答に俺はなにも抱くことはない。

当然だ。ツヴァイは闘うことのみを追求し作られたモノ。ならばこの闘争において右に出るものがいてはならない。

ならばなぜ俺がついてきているのか、といえただ一つ。

ツヴァイは闘争において右にでるものはいない、だが戦争においてははまだ調整不足なのだ。

九つの切り札、九人の道化。それぞれに役割が存在し、それぞれに存在意義があるモノ。

その内、闘争の役割を任せられそしてそれに誇りを持つツヴァイのことだ、今回俺がついてきたことに対して不満もあるだろう。

だが、ついてこなければならなかったのだ。

今回の敵の情報にある聖人を越えた聖人。

その相手が勤まるのは俺ぐらいであるし、それを今のツヴァイに任せるのは明らかに荷が勝ちすぎていた。

普通の聖人相手ですら今のツヴァイでは恐らく敵わないというのに、それを越える聖人にぶついたりすれば、下手すれば存在の概念すら壊れ、二度と修復できなくなる可能性すら視野にいれておくべきだろう。

故に今夜現れるかどうかはわからないが、それでも出てくる可能性がある以上、俺が出ないわけにもいかなかったのだ。

「そういえば、アインのほうはどうなったのでしょうか」

俺が思考に気をとられていると、不意にツヴァイは聞いてきた。

アインにはたしか麦野たちアイテムの護衛を頼んでいたような気がする。

気がする、というのも俺はさきほどまで仮眠をとっていたためわからないのだ。

なんだか船をこぎながら対応した気もする。後でアインや麦野に詰め寄られてもめんどくさいな、と俺は考え。

「そうだな、連絡でもしてみよう」

俺はポケットから携帯端末を取り出し、アインの持っている端末へコールする。

無機質な呼び出し音の後、電子音が響き数瞬の間。

「マスターか？ こちらアイン」

無駄に音質の高い声が流れる。

「ああ、俺だ。そっちはどうなった？」

「敵は迎撃したよ、十全に、完璧に迎撃した」

「“アイテム”の面々は無事だな？」

「ああ、ただ少々ご立腹の様子だね」

「ご立腹……？ ああ、なるほど」

俺はアインの言葉に対し苦笑し、麦野が怒り狂っている様子を幻視

する。

原作を読んでいたときも思ったが、あの女は普通の女に比べてもかなりのヒスだ。

普通の女ですら怒れば手に負えないというのに、あんな般若の相手など御免こうむる、というのが俺の正直な感想だった。

「まあせいぜい機嫌をとっておけ、女は恨みは忘れないからな」

「他人事のように云ってるが俺はマスターと同じ“垣根帝督”なんだぜ？」

「垣根帝督という存在が複数いるだけでお前と俺は別人だよ。お前は俺の一部が人になったみたいなものだからな」

「……さっぱりわからねえ」

こういう点でもアインと俺は別人だと区別できるだろう。と、いうより区別できなくなってしまうたら俺もアインも終わりだ。

概念というものは万能であると断言できるが便利、というふうに簡単に扱ってはならない代物である。

たとえば俺がアインは完全に己と同一であると認識してしまえば俺とアインは完全に混ざってしまうのだ。

概念が人の意思を受け付けるならば、世界はあつというまに混沌に包まれるように、俺達は概念に干渉できてしまうが故に気をつけなくてはならなかった。

「ま、お前が深く考える必要はないよ。俺が気をつければいいだけだからな」

「……そうかい、ならがんばってくれ」

端末越しであるというのに、呪うかのような視線を感じ、俺は端末の接続を切った。

しかし、会話していて思ったが、アインも変わったな……いや、成長したと見るべきであろう。

九人の道化は複製体クローンではなく、本当に一個人なのだ。

存在を定義する『概念』にそう書かれている、というより俺がそうした。

故に彼らは成長する。人が成長するように、彼らは成長していくのだ。

「だが、完全になるまで時間はかかるか」

まあ、おいおい成長してくればいい。と俺は思考を打ち切りいつのまにか眼前にいた女を見る。

俺を護るように前に出るツヴァイの肩越しに女を見つけ、俺は嘲るように嗤いながら、云う。

「それで？ お前が侵入者か？」

「ええ……ですが」

白いローブを身にまとう女は、ツヴァイを見て、表情を硬くする。

「……まったく、ようやく逢えたというのに。私も運が悪いのね」

……は？ としか云えない。

目の前の女は意味のわからないことを口走った。

逢えた？ 誰が、誰に？

「……ツヴァイ、お前に任せる」

俺は予感を得ていた。

目の前の女に関わっていいことなどないと。

「じゃ、じゃーなあ。俺は帰って寝る」

「承知いたしました」

この場面で忠義を貫く武士のように応えるツヴァイには、ちょっとユーモアが足りないと思う。

光の奔流に溢れる学園都市だが、この街には光の届かぬ闇が存在する。

そんな闇の中で、二人は対峙していた。

「……………」

「……………」

二人は沈黙の中、視線のみで己の意思を伝えていた。

漆黒の髪を揺らす武士　ツヴァイはただひたすらに殺意を伝え。

あちこちに十字架の描かれた純白のローブを身に纏い、ローブと同じく純白の長髪を揺らす聖女

「……私は純潔のスピカ、よろしくね」

「……名乗りには名乗りを返そう。私はツヴァイ。九つの切り札の二枚目、九人の道化の二つ目にして」

その手に刀を持ち、構えながら、ツヴァイは名乗りを挙げる。

「水棲の道化と、名を賜りし身である」

ツヴァイはすでに、自身の周りの水素と酸素を支配下においていた。ピシリ、ピシリと。

彼の周りの空間の温度が下がり、彼のボルテージは上がっていく。

そして、膝を折り、莫大なエネルギーを蓄え　飛んだ。

それはまさしく弾丸であった。

漆黒の弾丸、煌きは刀によるものだろう。

その速度は既に人の知覚を上回り、音を置き去りにしていた。

これを止められるものはまずいないだろう。人間の知覚速度を上回っているのだ、止められるようなものがいたらそれは化け物である。

だが　真実彼女は化け物だった。

「ッ!？」

己の斬撃を、スピカが一切の予備動作すらとらずにその腕で止めるという事実を、果たして彼は予期していただろうか？

到底人間には知覚すら出来ない速度、無論迎撃などかなうはずもなく本来ならば彼女はいまごろミンチになっていたはずである。

だが、現実はどうだ？　彼女は一切の予備動作すらとらず　否、

認識させずに受け止めたのだ。

「だめよ、その程度じゃ。その程度では」
その掌で止めた刀をにぎり、彼女　乙女の名を冠する星、スピカは云った。

「女神は身体を許さない、乙女は身体を許さない」
瞬間、ツヴァイの身体に衝撃が走る。

「グッ」

スピカはツヴァイに蹴りを放っていたのだ。

スピカの蹴りをなんの準備もなく腹部に受けたツヴァイはそのまま十メートルほど吹き飛ばされる。

すくなくとも一人分はある身体を、ただの蹴りでここまで吹き飛ばせる存在ならば別にめずらしくもない、が。

そのあまりの衝撃に、ツヴァイの腹部は構成が崩壊しかける。だがツヴァイはすぐさまソレを修復した。

ツヴァイたち九人の道化はその身体を末元物質により構成されており彼ら自身の認識により強固な防御力を誇っている。

その防御力は個々の道化達によりまちまちではあるが、ツヴァイは闘争用に作られた個体。

すなわち道化達の中でも一、二をあらそうほどの防御力を誇っていた。

それを、スピカはいとも簡単に切り崩す。

敵の強さを認識したツヴァイはとにかく静止し、闘争を仕切りなおりますべく空中に存在する水素と酸素を利用し、己の背に氷を作り出し身体を止めた。

腹部を再構成し、自身の脚で地に立つツヴァイは、すでにギアを上げていた。

「……見事、どうやら私は貴様を侮っていたらしい」
本来ならばありえぬ事、闘争用に作られた自身が、こと闘争においてもっともしてはならない油断をしていたことに、ツヴァイは怒り、改めた。

「ふふ、そのようね？ ええ、そうよね。英雄であるはずの貴方が、そんなに弱いわけないものね」

微笑みながら云うスピカに対し、ツヴァイは怪訝な顔をしながら問いかける。

「英雄？」

「ええ、英雄よ。世界を救う者。そして 私の望み」

「なにを、云っている。私はただの人形、主から産まれた一部分でしかない」

スピカの言葉を理解し、認識したツヴァイは即座にそれを否定した。当然、といえるだろう。ツヴァイは垣根帝督の一部から産まれた人形。

まがいものの生き物だ、それが英雄であるはずが

「なら、その主とやらの一部が英雄であっただけ。なぜなら」

そう云って、スピカは妖艶に微笑み、云った。

「疼くのよ、私の身体が。クソくらえの女神共に呪われた身体が貴方に、英雄に抱かれないと！」

王道十二星座とおとめ座という星座がある。

日本では春の星座とされており王道十二星座の中でも二番目に大きいため比較的見つきりやすい星座とされている。

そして、古来より星座とは魔術と密接に関係していた。

その中でも、おとめ座 すなわち女神達の星座は非常に特殊な存在であった。

いわく女神達の祝福、と呼ばれるものである。

あらゆる神話に記載された女神達はおとめ座に例えられる事が多く、すなわちおとめ座とは女神達の象徴であり、スピカとはおとめ座でもっとも輝く すなわちもっとも美しい星。

つまりスピカとは女神の証であるのだ。

そして、純潔のスピカと呼ばれる女は女神の特性を持っていた。

すくなくとも、神の力の一端しかもたない聖人では敵わぬ存在であ

る。

なぜなら彼女は現代に存在する女神なのだから。

それにより莫大な力を得たスピカだが、その力には大きな欠点が、というより女神であるがゆえの特性が存在していた。

いわく、英雄に惹かれるというものである。

あらゆる神話、とくにギリシア神話に多いが女神とは英雄　すなわち英なる雄に惹かれるものだ。

だからこそ彼女は学園都市に侵入することへ危惧を抱いていた。

もし、学園都市側に英雄がいた場合、彼女は否が応にも、英雄を求める。

求め、渴望し　殺しあわずにはられない。

その事実を、自身の知識検索より見つけたツヴァイは考える。

現状聖人には勝てぬと評価されているツヴァイは、どういう選択をとればいいのか。

そこまで考え、ツヴァイは思考を放棄する。

（考えても意味のないことだ、要は　）

ツヴァイは黙し、刀を構え、自身のキャパシティを十全に発揮できるように場を整える。

空間に存在する水素と酸素を支配し、自らの集中を極限まで高める。

「闘争するしかないのだから　」

それはツヴァイの中では当然の帰結であった。

己では、この女に勝てない　だがそれがどうした？

勝つための手段など闘うと決めた後に考えればいいのだ。
闘うと決める理由なんてものは、単純に彼にとっては一つだけ。

自らの主に任されたから、である。

「だから、私は貴様と闘う。安心するといい、女。私は、貴様を相手してやる」

「あら、あらあらあら！ 何を云っているの？ 私は貴方を逃がしたりはしないわ、だって」

スピカは姿勢を低くし、爛々と輝く瞳をツヴァイに向けて、云う。

「貴方はようやく見つけた運命の人なのよ！ だから」

ドン、と。先程までスピカがいた場所は碎け散り、ツヴァイは己の刀を咄嗟に繰り出し、彼女の手を止める。

「私を屈服させなさい！ 英雄！」

ここに、英雄と女神の戦争の幕が斬って落とされた。

即座に反転し後退したツヴァイは考える、己が勝つための方法を。敵の現状の能力はその卓越しすぎた身体能力のみ、とっていいだろう。

これは神の右席らのメンバーにもいえるが神や天使に近いものほど『人間用』に作られた魔術を行使することが敵わなくなるのだ。これは通常の人間ならば誰でももっている『原罪』を神の右席らや女神達の祝福を受けているスピカは持っていないことに起因する。

無論、なんらかの特殊な魔術を持つてはいるだろうが彼らのような存在が持つ大掛かりな魔術は発動に時間がかかるし、学園都市という敵陣の中で自らの手の内を晒すようなマネは控えるだろう。

故に、ツヴァイはスピカの身体能力を破ることを勝利条件においた剣で攻撃を防ぎ、またけん制の攻撃を放ちもするがことごとく無視されその肌によりはじかれながら、ツヴァイはスピカの身体能力を見極める。

（ただの刀程度ではその肌に傷すらつけれられない、おまけに速度は音速を超えている）

音速を超えた動き程度で翻弄されるツヴァイではない、だが常に音速を超えられてしまうと聴力がまったく役に立たなくなってしまう。現に今の彼がスピカの動きについていけないのは空間に存在する酸素と水素を支配しているからにほかならない。

目で追っついてはかならずどこかで致命的なミスをする。故に支配した酸素と水素を感覚器のように使い、その動きを把握しているにすぎないのだ。

（単純に“速い”というものが、ここまで恐るべきものになるとは、な）

ツヴァイのような圧倒的火力をもって敵を殲滅するタイプのいわゆるスタンダードタイプはトリッキーなタイプにはめっぽう強い。

これは単純に地力の違いによるものであり平均的にあらゆる要素を高めているスタンダードと特殊な要素を高めそれにより翻弄するトリッキーではどうしたところで基礎の部分に違いが出る。

だがスタンダードタイプはツヴァイのレベルまで鍛えるには時間がかかるため実質メリットデメリットはほぼ同程度だろう。

だが、スピカは違う。タイプ的にはスタンダード、だがすべての要素がトリッキーになりうるほどにまで高められているのだ。

音を置き去りにする“速さ”刃を通しもしない“肌”これらはそれぞれ一つもっているだけでも十分に脅威となり得る、だが彼女はそれらを平均的なレベルで保持しているのだ。

いわば反則である。わかりやすく云うなら最大値が千までしかないパラメータではほぼ総ての項目が八百を越えているようなものである。おまけに大魔術を間違いない一つは保有しているため一撃必殺タイプともなれる。

すなわちスピカには隙がないのだ。絶対的なまでに隙間を埋めて自身を完成させようとすればこうなるのであるう。

だが、この世に絶対は存在しない。……限りなく絶対に近いはあるが、それでもスピカは絶対ではない。

さて、ここで先程の話に戻るがトリッキータイプは高い地力を持つスタンダードには敵わない。

だが 高いレベルで地力を保持し、なおかつ一つの特長を持っていたなら、どうなるだろうか。

本来ならば存在しないタイプである。なぜなら一つの突出したもの

を持つものはソレを伸ばしたほうが強いのだから。

だがツヴァイは闘争用に作られた個体である。あらゆる戦況を想定し、その結果現在のスペックを持ち水態創造という能力を与えられたのだから。

そして、今回のようなパターンすらも垣根帝督は想定していた。

圧倒的な基礎能力を持つ相手をどう倒せばいいのか。その基礎能力をさらに超えた想定外をぶつけなければいい。

それに思い至った瞬間、ツヴァイはスピカに云った。

「おい、女」

「ん？ なに？」

足を止めるスピカに対し、ツヴァイは刀を鞘に戻しながら云う。

「私は、英雄なのか？」

密かに場の酸素と水素を集合させながら、ツヴァイは時間を稼ごうとしていた。

そう、ツヴァイが突然言葉を発したのは時間稼ぎのためである。

……それだけが理由ではないようではあったが。

（私が、英雄？ 主の人形として作られた、私が、英雄？）

ツヴァイはスピカの言葉の真意を図りかねていた。彼は自身の存在を垣根帝督の一部、としか想っていないのだから当然といえば当然であった。

「そうよ、貴方は英雄。女神達を選んだ唯一無二、世界に二人いない、世界を壊し、世界を創る英雄よ」

「バカな……！ 私は主の一部、主から作られた人形ではない！

そんな私が英雄など」

「さつきも云ったでしょう？ 貴方がその“主の一部”から作られたと云うのなら、貴方は“主”の英雄の部分を用いて作られたんでしょうよ」

「ならばなおさら！ 作られた英雄など、認められるはずがないだろう！」

「いいえ？ 私は、女神は了承したわよ。だって」

スピカはそこで言葉を切り、己の股座をまさぐり、恍惚な表情を浮かべる。

「こんなに疼くもの、私が、“私”が疼くの。貴方という存在に、貴方という男に」

だから　と、スピカは言葉を繋ごうとして、気づく。

自身の居る場が、支配されていることに。

ツヴァイは最大の力で、支配領域を広げていた。力も、速さも、防御も彼ではスピカに敵わない。ならば　そんなものは一切合財関係なく敵を沈めてしまえばいい。

すなわち、絶対零度の牢獄へ閉じ込めそのまま圧殺する。

そう、ツヴァイの基礎スペックはスタンダードに整えられている。

だが、彼は水態創造という切り札を持っているのだ。

その威力はまさしく切り札、反則とも言え換えられる。なにせ水素と酸素を支配し、その自然振動すら操ることができるのだ。

「もはや、場は整った。悪いなスピカとやら」

リン、と鈴の音が響き、辺り一帯が冷気に包まれる　否、辺り一体が冷気を孕んでゆく。

ツヴァイがなにをしようとしているのか見当がついたのだろう、スピカは目を細めて云う。

「……なるほど、氷か。だけど」

そして、ニヤリ。と、彼女は凄惨に嗤い、云う。

「その程度、私に通じると思って？」

「通じるさ」

否　とツヴァイは言葉を繋げて。

「殺してやろう、女」

パチン、と指を弾き、ツヴァイは殺戮の宣告を告げる。

絶対零度　氷牢縛殺

第二十八話 「女神は英雄の腕に抱かれて」

瞬間 世界は崩壊しつくした。

空間に存在する水という水総てがスピカを圧殺せんと殺到する。ほとんど隙間なく存在していたであろう水たちがわななき、刹那の断末魔を響かせる。

心臓の鼓動のような振動の後、水たちは癒しの概念を殺戮へと変貌させた。

総てが終われば、そこにあるのは氷の彫像。空間中に存在する総ての水を氷に状態変化させ、それら総てを用いて彼女を圧殺したにしては、あまりにも小さすぎる氷像。

“絶対零度 氷牢縛殺” この技のプロセス自体は簡潔にして単純である。

自身が支配した水を瞬間的に氷結させ、対象へ殺到させる。そしてそのまま圧殺する。

言葉にするだけなら単純ではあるが、実際に行うならば様々な関門が存在する。

まず第一に演算の難しさが挙げられるだろう。この技の前提条件として空間に存在する水の支配が必要となる。

それは空間そのものを把握するようなものであり、空間そのものを把握ための演算はまず時間がかかってしまう。故に、ツヴァイは時

間稼ぎをしなければならない。

敵を前に時間稼ぎ、というのは当然、非常に困難でありまず通常ならば不可能。今回のようなケース　すなわち敵が自身に關心を寄せているなどの闘争に対しての集中が欠かれている必要があるのだ。つまり第一の関門とは時間。

そして第二に圧殺できるだけの水を用意しなければならないことが挙げられるだろう。

水は気体の状態になるとその体積が膨れ上がる。すなわち気体の水から固体である氷にする場合、把握しなければならない空間は単に刃として利用する場合よりもことさらに増大してしまうのだ。

今現在の学園都市が夏場でありさまざまな水を利用できる状態であるからよかったものの、これが総合的に水の少ない冬場ではまず間違いないこの技を使用することができないのだ。

すなわち第二の関門は水の確保である。

そして、最後の関門は自身の護り。

この技を行う場合、ツヴァイの演算領域のほとんどが割かれてしまうのだ。それも当然、なぜなら先に記述した通りこの技は空間の把握と莫大な量の水を支配しなければならず、そのために必要な演算は超能力者級とまでは云わないが大能力者級。

演算面についてはキャパシティがあまり割かれておらず、基礎スペックの底上げに重点が置かれているツヴァイにとって必要演算の増大はそのまま意識の空白を生む。

すなわちこの技を行う間は、この技に集中しなければならないのだ。一点への意識の集中とは、それ以外への意識が散漫になるという事を意味し、それはそのまま隙となる。故に、ツヴァイ本来の役割である一対多の殲滅戦の時には使わない。元より強大な一つの敵が現れた際、強大な敵を打倒するために考案された必滅の技である。

これだけの関門が存在する“絶対零度　氷牢縛殺”だが、その威力は絶大である。およそトン単位の圧力がかかるのだ、それも当然。常人には行使する必要すらない過剰殺戮。いかに堅牢な防御を持と

うと圧力には敵わない。無論、反射という絶対防御には敵わないが、アレは防御というより攻撃手段ともいえる。

だが、しかし。

常識の範疇を越えて、ツヴァイの理解を超えて、彼女は抵抗を果たしてしまった。

ピシリ、ピシリと。徐々に氷が剥がれ落ち彼女は再び光臨する。

「……なんと、凄まじい身体能力」

ツヴァイはただただ賞賛を送るしかない。強大な敵一人に対してのみ行使される必滅の技が破られたのだ。もう賞賛するくらいしか彼にはできなかったのだらう。

「つく……！」

完全に氷像から抜け出したスピカは息も絶え絶えになりながら先の攻撃を回想する。

（思ったよりも、凄まじかった）

驚嘆、彼女の心中を現すならば驚嘆に尽きるだらう。まさか、己が追い詰められるとは思ってもいなかったのだから仕方ないが。

「つく、はあ……。まさか、あそこまで凄まじいとは、思わなかったわ」

実際、彼女は油断していた。

それも必然、彼女は自分が追い詰められる、という経験をしたことがない。

自身の魔術すらまともに行使した事もない。行使する必要がなかった故に。

魔術師達からの追跡を振り切る事などただ歩いていればそれで終わった。また、聖人まで出張って来た事もあったが追い詰められはしなかった。

つまり彼女はこれまで本格的な闘争というものを経験していないのだ。

彼女がこれまで経験してきた闘争はほぼ総て殲滅戦であったといっている。圧倒的なスペックを用いて敵を殲滅する、奇しくもツヴァ

イの役割と同じであつた。

だが、ここまでだ。

スピカは先の攻撃を受けても倒れなかった。そして先の攻撃が最終手段であることを察している。

ならば、もうツヴァイには打つ手がない。奇しくも垣根帝督の見立てと同じであつた。

そう、圧倒的スペックを有する聖人に敵わぬツヴァイでは、聖人も凌駕するスピカには敵わないのだ。

虎に勝てない人間が、虎すら散らす象に勝てぬのは自明の理。

期待していた、羨望していた。英雄という存在に、世界を救うであろう存在に。

そして 自身を殺戮してくれるはずであつた存在に。

今宵もまた彼女はその願いを果たせなかった。

故に、スピカは諦めと失望のままにその腕で敵を切り裂こうとした。した。

だが、である。

ふと、スピカは気づく。自身が空を見ていることに。

この身を淫売に落とした忌々しい星達が、学園都市のビルの隙間から覗き、まるで彼女をあざ笑うかのように光を降らせていた。

「あ、れ？」

どうして、どうして自分は星なぞ見上げているのだろうか？ ああ、

そうか

「倒れて、るんだ」

そうか、そうか。私はたしかに

「討ち、倒されてるんだ」

そう、それはスピカと垣根帝督の、誤算。

女神に祝福を受けた聖人をも凌駕するスピカと、学園都市最優と呼

ばれ暗部における頂点である垣根帝督ら二人の、誤算。

誤算と云ってもそこまで大仰なものではない。要はツヴァイ 九人の道化達は成長するのだ。そしてその成長はツヴァイのスペックを底上げし、それに伴い能力強度も発展していたに過ぎないのだ。先の対ベガ戦にて、ツヴァイは成長していた。

戦闘内容はなんてことはない、ただの殲滅に過ぎない。だが、ツヴァイはわずか一度の闘争で闘争の哀しみを知った。

アインが九人の道化達の頂点である要素、すなわち愛と哀。そのうち一つを彼は手に入れたのだ。

哀しみを背負うものは、ただそれだけで強くなれる。闘争の楽しみと、闘争の哀しみという一枚のコインの表と裏を知ること、ツヴァイの精神に多大な影響を与えたのだ。

そう、すなわち自分だけの現実に。

だが、いくら哀しみを背負ったものが強くなるといっても、あのスピカとあの垣根帝督に誤算を生ませるほどに成長するのだろうか？ するのだ。ツヴァイは、そこまで成長するに足る理由を持っていた。それは奇しくもスピカがもつともわかっていたこと。

そう ツヴァイは英雄なのだ。英なる雄、優れた者、突出した者。ツヴァイは英雄であるが故に、脅威の速度で成長していく。

その事実思い至り、スピカは満足という気持ちを知った。生まれてこのかた感じたこのない感情。歓喜、感動、達成。

やっと やっと。

私は死ぬる。殺戮される。蹂躪される。

ボロ雑巾のように打ち捨てられ、精神が崩壊するまで犯され、ゴミのように処理される。

なんて、なんて 魅惑的な響きなのだろう。

蹂躪、蹂躪、蹂躪！ ああ、ようやく私は

「貴様には生きてもらうぞ、女」

え？

今、この男はなんと言った？

彼女は自身の耳を疑った。当然だ、なぜならそんな世迷言は聞こえてはならない。勝者である彼が敗者である彼女にそんな言葉をかけてはならないのだ。

「貴方……殺し合いを、なんだと思っているのかしら」

そう、殺し合いだ。

闘争に対する経験が圧倒的に不足している彼女でも、殺し合いへの覚悟だけは持っていた。

命を奪う覚悟、命を弄ぶ覚悟、命を蹂躪する覚悟。

それは命を奪われる覚悟、命を弄ばれる覚悟、命を蹂躪される覚悟と同意義でなくてはならない。

他者の命を奪う者、己の命も奪われる。他者の命を弄ぶ者、己の命も弄ばれる。他者の命を蹂躪する者、己の命も蹂躪される。

因果応報。そして覚悟を持つ者は、相対する者の覚悟を、無にすることはならないのだ。

それは理、殺し合いというルールも道德も介入できない外法の闘技場にて唯一適応される理。

誰にも覆せないし覆してはいけない、唯一絶対の理。

それを、それを

だが、そんな彼女の憤怒と慟哭は、ツヴァイの言葉に止められる。

「貴様こそ、命をなんだと思っているのだ？ ただ一つのみ存在する貴様の、貴様自身の命を 貴様はなんだと思っているのだ！」

命？ 命だと？

ここまで来て、ツヴァイは命の価値を問うた。

命の価値？ 私の命？ ああ、そんなもの

「ただ一発の銃弾よりは軽いんじゃないかしら？」

そうだ、そうとも。そうあるべきだ。

命の価値など万国共通で“銃弾よりも軽く”あるべきなのだ。そうしなければ、そうしなければ

「戯言を用いて自身の罪から逃げるなよ純潔のスピカ。貴様の罪は、貴様の殺してきた者らの命の価値だけあるのだぞ。命の価値は万国共通、それはとても重いものだ」

ふざけるな。

戯言？ 戯言だと？

「き、貴様に……なにがわかる！？ 引き金を引くだけで死ぬ人間！ 頭を捻るだけで死ぬ人間！ 息がきぬだけで死ぬ人間！ その程度で死ぬ連中の命が、重いだと？ 貴様は知らないだけだ、命の軽さを」

「人は弱い、貴様の言うとおり簡単に死ぬだろう。だがな」

そう云つて、ツヴァイは初めて憤怒を浮かべた。

「弱いからこそ、その命には価値があるのだ。ああ、そうだろう。

彼らは脆い。だけど、脆いからこそ」

なにかに憧れるように、なにかに絶望するように。ツヴァイは云う。
「彼らは繋がりを求めるのだ。一人ではなにもできないから、彼らは誰かと繋がりたいのだ。そしてな、スピカ」

深い深い、憧れ。深い深い、絶望。深い深い、憧憬。

「繋がりと重なりなのだ。人と人が重なる時、その命は想いを
持ち、その命は重くなるのだ」

想いとは人の心、誰かの心。それらが重なり、人の価値とは重くなる。
る。

母の愛。父への憧れ。友との友情。伴侶との愛情。

「想いとは彼らの命だ。それを断つて来たお前は、それだけの想いを
背負わねばならない。私はそれを知った、知ってしまった」

自身の殺した女の愛が、自身のせいで哀しむ男の哀が、自分の罪であると、ツヴァイは言い切る。

「だから、私は貴様を殺せない。貴様を殺せるのは愛も哀も想いも知らない、制裁者でなくてはならない。正義の味方でなくてはならない」

そう　正義でなくてはならないのだ。人々を殺し、その想いを蹂躪し、そして背負ってしまった悪を殺すのは正義でなくてはならないのだ。

なぜなら正義でなく、悪が悪を殺してしまえば、その悪はさらに巨大な悪となってしまうが故に。

「私は正義の味方ではない、まして英雄などと嘯けるような者でもない。私はただの人形でしかない」

ただ一人の主に忠誠を誓い、ただ一人の主から生まれた複製体ではない。

「我が主は貴様を私に任せると云った。故に裁量の権限は私にある。そして私は勝者、貴様は敗者だ。貴様の命は私の手の中に在る」

そこで、スピカは気づく。目の前の男の葛藤に。目の前の男の哀しみに。

そして　この男が何を云おうとしているのかを。

「　生きる。来るべき終末の日まで。正義が貴様を裁くその瞬間まで生きる」

その言葉に、スピカは一層の絶望と、一抹の羨望を感じた。

「や、やめて……私にそんな言葉を投げてはいけない。私は貴方に犯されなくてはならない、蹂躪されなくてはならない、殺されなければならぬ！」

まるでそうしなくては己が壊れるかのように、スピカは慟哭する。

「だって、そうしないと」

「罪の重さに耐えられないのか？」

決定的な言葉、楔を　スピカは打ち込まれてしまった。

今この瞬間まで意識をせず、認識をせず、逃げてきたその事実。

彼女の脳裏に彼女の罪が映し出される。己の手で殺した子供がいた。己の手で殺した男がいた。己の手で殺した女がいた。己の手で殺し

た老人がいた。

そして彼らは一様に、ただひたすらに彼女に憎悪をぶつけていた。

卑怯者

「やめて」

人殺し

「や、めて」

少しずつ彼女の心が崩されていく。鉄壁の城砦に護られていた王宮は、内部から壊れていく。

悪人

「や……めて」

悪鬼

「や、めてよ……」

殺した。蹂躪した。侵した。冒した。殺しを犯した

「ごめんね、ごめんね、ごめんね」

もはや、彼女の心はただ一つの希望によって成り立っていた。

この怨嗟の声から逃れる術はただ一つ。彼にその存在を犯される事だけ。

だが、彼はそんなことを許しはしない。

「逃げるな、淫売」

ただの一言に、総ての憤怒が込められていた。

「貴様が殺してきた、貴様が蹂躪してきた、貴様が侵してきた想いから、逃げるなど私は許さない」

だが と。彼は言葉を繋げ、云う。

「貴様が耐えられぬと云うのなら、審判の時までその罪を、私が背負おう」

え？ と、彼女は怨嗟の声も忘れて呆然とする。

「勘違いするなよ、貴様が罪を償うその時までには壊れてしまっただけの意味がないからだ。私はあくまで人形。貴様を裁くことなどできな

い」

ツヴァイは自分がひどいエゴを振り回している事を自覚していた。罪を持つ者は罪を持たぬ者　正義が裁かなければならない。それはまったくもって彼の持論だ。

だから裁かれる時まで生きると、それができぬならその罪を自分が背負おうと、彼は云っているのだ。

彼は一貫して自身の罪は自身で償えと云ってるだけにすぎない。だがそれはエゴなのだ。

彼女が殺してきた者達はまず間違いなく、彼がここで彼女を殺すのを望むだろう。それだけの事を彼女はしてきたのだ。

だが、彼にそれはできないのだ。彼もまた罪を持つが故に、そしてなにより自身が主の手足であるが故に。

彼の罪はそのまま垣根帝督の罪となる。それが責任というものだからだ。

だからこそ彼の行いは垣根帝督の意向に沿わなければならない。なぜなら責任を取るのが垣根帝督であるが故に。

そして、彼は無意識のところでこう思考していた。

目の前に精神的に崩壊しそうな、戦力がいる。ならば、それを抱き込むことこそ垣根帝督がもっとも望むことだろう。

まさしく、外道。まさしく、エゴ。だが、彼もまた根本的に垣根帝督であるが故に、垣根帝督の意向に沿うのだ。

彼はそれを微かに意識していたのだろう。これもまた彼の成長だ。

そう、水棲の道化は、善と悪の背反の中で生きている。

罪を償わせることは善である。なぜなら罪を償えばその者は許されるのだから。

他者の罪を背負うことは悪である。なぜなら罪を勝手に背負ってはならないからだ。

救うのか？ 貶めるのか？ 善か？ 悪か？

その葛藤を、彼は無意識の奥でしていた。

それをスピカは見抜いていた。当然だ、彼女は女神。英雄を愛する女神なのだから。

だが、彼女は思考を放棄した。それが最善であるが故に。自身の存在を護るための、本能。

ツヴァイの腕に抱かれて、スピカはとうとう云ってしまった。

「あ、貴方が 貴方が私を傀儡にしてくれるなら、そうしてください。私にはもう」

耐えられない。

女神は英雄の腕に抱かれて、墮落した。

その瞬間、垣根帝督は狂嗤していた。

「クククッ……クハッ、キハハハハ！ アッハッハッハ、アハハハハハハハ！」

道化の手に堕ちる、女神。その光景を幻視して、彼は嗤っていた。

「クヒッ、キヒヒ！ あーあ、バカじゃねーのか？ いつの時代も女はバカだ」

依存して、乗り換えて、だまされたと理解すれば喚き立てて他の存在に依存する。

同じ人間とも認めがたいほどに、バカだ。

「だがまあ、いい戦力にはなるだろうよ。聖人を超えてるらしいしな」

今回の戦闘にて垣根帝督が得たものは二つ。

一つは聖人を越える実力者、女神の祝福を受けし者である純潔のスピカ。

一つはその純潔のスピカを乗り越えるほどにまで成長した水棲の道化、ツヴァイ。

「クヒ、キヒヒ。楽しいねえ、楽しいねえ。愚物共の傷の舐めあい
は、何度見ても飽きることがない」

己の罪に耐えられない女、その罪を背負うと云って、さらにその罪を重ねさせようとしている男。

どこまで行っても堂々巡り、女は男に責任を投げて、男は最後に女に責任を取らせればそれで終わり。

万々歳、世は総て事もなし。歯車は十全に機能する。どうせ最後の瞬間にはどちらも消えてもらうのだから、それまでは自由にするといい。

垣根帝督は心底から愉しんでいた。阿呆な女と阿呆な男の交わりを見て、彼は心の底から愉悦を感じていた。

まるで出来の悪い演劇を見ている気分なのだろう。道化達が踊っているようにしか彼には見えないのだから。

そこに、一石を投じる声。

「マスター、アイツもアンタの一部なんだぜ？ それをそこまで嗤えるものかね」

ツヴァイは垣根帝督の一部から作り上げられた人形である。垣根帝督から闘争心、英雄的志向を受けて生まれたのがツヴァイだ。

故に、たしかに彼は自分を愚かだと嗤っているということになるのだろう。

「はあ？ お前はなにを云っているんだ、アイン。俺の一部分を使
つてできたものだぞ？ そんなものただの出来損ないに決まってい
るだろう」

垣根帝督は垣根帝督という要素総てで完成している。故に、一部分

だけを受けて生まれた道化達は、その存在総て未完成。要はあんな英雄まがいの事をするツヴァイを“自分”であるとは認めていないのだらう。

だが自身の一部から生まれた事を知っているが故に未完成と断じれるのだから、彼はツヴァイを自身の一部であることを否定しない。垣根帝督は完全に九人の道化達を自身とは別個の存在として見ていると同時に、自身の一部であるとも見ているのだ。

そして、その言葉を受けて、激昂するのはまず間違いない垣根帝督から生まれたことの証左であるだらう。

背から黒翼を広げ、憤怒をもって己が主を睨みつけるのはアイン。それを受けてなお嘲笑を浮かべている垣根帝督。

「……マスター、俺はアンタが気に入らない」

「今更だな、アイン。人間一番気に入らないのは同類だ」

同属嫌悪、と云われるものであった。

九人の道化達のうち最も垣根帝督に近いのがアインである。

垣根帝督を構成する要素の内、彼の根源である要素により象られたのがアインであるのだから当然ではあるが。

むしろ、九人の道化達と真実いえるのは、アインだけでもある。

九人の道化達とはアインを筆頭に以下ツヴァイら八名で構成されているが、オリジナルである垣根帝督から真実生み出されたのはアインのみ。

残りの八名から一名を除きアインから生み出されたのだ。九人目でありアインすら持ち得ない“鍵”を持つノインを除き。

故に二人は、どこまでいっても互いが気に入らない。垣根帝督はかつての慟哭を否が応にも思い出すことになり、アインは作られた存在であるが故に垣根帝督を憎悪する。

アインは飄々とした態度の帝督を尻目に、部屋から退出しながら云う。

「俺はアンタが気にいらぬ。だが、俺はアンタの人形だ。アンタが一線を越えない限りはアンタの喜劇にも付き合おう」

「ふん、好きにしる。だが、裏切るならば覚悟しておけ」
ピタリ、と。アインの動きが不穩に、不自然に止まる。

帝督の口が裂けるように笑みの形へ変貌していく。そのままに、彼はアインの地雷を踏み抜いた。

「お前が気にかけているあの女。ちゃんと金庫にしまっておけよ」

瞬間　そう、まさに刹那であった。

アインはその手に黒色の闇を作り上げ帝督にぶち当てる。それをものともせず、帝督はその背より展開した白色の光により黒色の闇を受け止める。

「キハハッ！　いいなあ、お前。そんなに大事か？　ええ？　おい」

「吹寄制理に手を出してみろ　！　貴様の大事な“姫君”を、地獄の苦しみを与えてから殺してやる！」

それを聞いて帝督は不敵に嗤い、なおも嗤った。

「カカカッ！　おうおう、やれるものならやってみろ。だがなあ

—

帝督は背に展開された白色の翼を振りぬぎ、アインを弾く。そして禍々しい笑みを浮かべ、云う。

「アイツにはノインがついている。お前程度じゃ話にならんぞ」

ノイン、九人の道化の九人目、九つの切り札の“反則”^{ジョーカー}。

そう、九人目の道化の役割は黒川梓の守護にある。だからこそ九人の道化達を問答無用で消し去ることの出来る“鍵”をもっているのだが。

その事実思い至り、アインは齒噛みし闇を払い、退室していく。

「……あの人に、“母”に手を出してみろ、垣根帝督。必ず殺してやるからな」

「ハン！　そんなに大事ならちゃんと自分で護るんだな」

アインを愛と、哀に目覚めさせた存在。アインはその存在を自身の母であると認識していた。

自身の誕生は二人の人間により作られたが故に。

オリジナルであり自分の肉体を作った垣根帝督。自分の心であり根源でもある“愛”と“哀”を目覚めさせた吹寄制理。

“愛”とは誰かを思いやる心、“哀”とは己を思いやる心。

それを教えてくれたのは吹寄制理であると、アインは思っている。

「馬鹿だよなあ、アイツ。そう思うだろ？ ドライ」

「ええ、そうね。マスターにつっかかる必要なんてないと思うのだけれど」

現れたのは妙齡の美女、という言葉が良く似合う女性であった。

背は帝督よりかは少しばかり低いが女性にしては長身である。メリハリのある美しい肢体をワインレッドのスーツで引き締めている。絹のように煌く金色の髪、緑がかった美しい碧色の瞳。整った

否、整いすぎている顔立ちを微笑みに変えて、彼女　ドライは現れた。

「報告を」

帝督は上がりすぎたテンションを下げながら云う。公私の区別をしつかりつけるタイプの彼らしいといえる。

「順調よ。“盾”の方はもう大丈夫。“天秤”の方がむしろ遅れているわ。まあ、構成人員的にも仕方ないとは云えるけれどね」

「確かに、な。オーケー、部品の方は大丈夫か？」

「ええ、むしろ有り余ってるわよ。ただ“ツナギ”の方は時折補充してくれると助かるわ」

テキパキと二人は確認作業を終わらせる。帝督が上司でドライがその部下、と云った所だろう。

業務事項の確認の後、二人は懸念事項の確認へと移る。

「理事会の連中はなんと？」

「後ろ盾にはなる気はないらしいわよ。ただ、いくらか注文はしてきたアホもいるけど」

「そうか、まあ金さえ払うならいいだろう。今、理事会をゆするのはあまり得策じゃないからな。梓の方はどうだ？」

「いくつか襲撃があったけど、全部“スタッフ”が鎮圧したわ。ノインの出番はなし」

それと……、と。ドライは言葉を繋げる。

「最近、“アルカディア幻想悦楽”という薬がはやっているみたいよ？ はてさて、どこのバカなのかしらね」

「何？」

ドライの言を聞き、帝督は顔を歪ませる。

「早急に調べる。だが、それは恐らく」

苦い顔をしている帝督の言葉に、ドライは合わせるように云った。

「内部の奴ね。ほぼ間違いなく」

第二十八話 「女神は英雄の腕に抱かれて」(後書き)

ツヴァイさんてばツンデレかと思いきや女つたらしね！

推敲の為に読み直すと帝督がツヴァイに嫉妬してるだけに見えなくもないという。

そのうちノクターンの方にツヴァイとスピカのエロシーンでもあげようかな……

一度やってみたかったです、エロシーン

9月12日、致命的なミスを発見しました。修正しました。

第二十九話 「裏切りの予兆」

学園都市は学生の街である。学園都市の総人口のうち、学生が八割を占めるというのだから、その言葉に偽りないことが実感できよう。学生が多いこの街におけるビジネスは、基本的に学生向けである。外ならばかならずあるといっていい駅前の居酒屋などは存在せず、喫茶店などの通常飲食店が軒を連ねている。

また、キャバクラなども存在しない。風俗ビジネスは外ならばよく売れるが、生憎学園都市にはない。と、いうのも学生達は基本的に風俗ビジネスに関われないし、学園都市在住の大人において最も多い教師もまた、風俗ビジネスなどを利用していると知られば、なんらかの処分が下るので誰も利用できないのだ。

この通り、学園都市におけるビジネスは基本的に学生向け、つまり若年層向けではあるがそれでも大人たちに向けて行われるビジネスも存在する。

学生が背伸びをして行くバーではなく、本格的な大人向けのショーツバー、理事会のメンバーも利用している高級クラブ。

そして、そんな中でも最近出現し、そして違法な売春窟、アルカディア“遊郭”は学園都市の風俗ビジネス唯一の成功例といっている。

彼らはいわゆる出張ヘルスと呼ばれる業務体系と、かつて存在した遊郭の業務体系を持っていた。

普通ならばこの“遊郭”も、すぐに潰れてしまっていただろう。だが、この“遊郭”は潰れなかった。むしろ学園都市における風俗

ビジネスの開拓者となってしまったのだ。

ではかつて潰れていった風俗ビジネスとはなにが違うのか？ と問われれば、まずは扱う商品の質が挙げられるだろう。

彼ら“遊郭”は、客の注文に忠実な商品を販売しているのだ。

客の注文に忠実な商品、これが風俗ビジネスでなければそれは極々当たり前のことである。だが、風俗ビジネスにおいて注文に忠実な商品を必ず納品する、ということは不可能とっていい。

なぜなら風俗ビジネスにおける商品とは娼婦、つまり作ったりすることのできない、いわば不完全な商品なのだから。

無論、客を悦ばせる技術やトークにおける技術、それら後付けの要素ならば努力次第で賄われるが、容姿や身体といったものは生まれつきの素質に影響される。

故に、風俗ビジネスにおいて注文どおりの納品とは不可能なのである。

だがそれを可能にしたのが“遊郭”であった。

例えば髪、顔、胸、腹、尻、脚、年齢などを細かく設定し注文したとしよう。すると、彼らはものの数十分でその注文に完璧にそった商品を納品していたのだ。

これが人気にならぬはずもなかったのだ。なにせ自身の嗜好に合った、最高級の商品がいつでも届けられるのだから。そして彼らの恐ろしき点はその年齢までも設定が可能ということであった。

年端も行かぬ少女、成熟した美女などさまざまな注文に、彼らは応えていたのだ。

無論、この日本国において未成人に性的な行為を行うことは禁じられている。

本来ならばジャッジメントやアンチスキルに取り締まられて終わりであろう。

だがここに、彼らがここまで人気になった手段の二つ目が存在する。そう、彼らはジャッジメントやアンチスキルの上層部に対し商品を納品していたのだ。

違法な商売をする時、警察機関を抱き込むのは常道、というよりはや常識ではあるが、ことジャッジメントやアンチスキルはその組織構造上、抱き込みというのが難しい組織である。

通常の抱きこみの場合、例えば違法な商売を行いたい業者をA業者と仮称し、違法な商売を行いたい地区をA地区とし、その地区を担当する警察官をA警官としよう。

A業者はまずA警官に対しなんらかの利潤を用意する、それをA警官が受け取った場合、抱き込みの第一段階が完了する。

そしてA業者はA警官に対しA地区で商売を行いたい旨を伝え、A警官はそれを意図的に見逃すとの旨を伝える、ここで抱き込みは完了了。

そう、通常の抱きこみは組織の上層部ではなく末端を抱き込むことで完了するのだ。

だが学園都市における警察機関であるジャッジメントとアンチスキルは、担当地区はたしかにあるがそれが次々に変わることが多い。これは抱き込みの防止、また基本的な取り締まり対象であるスキルアウト達の活動地域の移り変わりが激しいことに起因している。

強力なスペックを有する構成員であればなおさらであり、またそれを支援するための事務員ですら移り変わりが激しい事が多いのだ。無論、元来所属する学園の風紀を取り締まる事を目的としているジャッジメントの場合は例外だが、ジャッジメントの末端の抱き込みはまず不可能。

ジャッジメントの構成員が基本的に学生であるため、正義感の強い、いわゆる抱き込みづらいことが理由として挙げられる。

またアンチスキルも構成員が学園の教師達であるため、基本的に心根が善である人間が多いため、抱きこみの失敗を招いていた。

で、あるが故に、“遊郭”は彼らのトップ、の一つ下である権力者を抱きこんだのだ。

言うだけならばどうということはない当然の帰結ではあるが、それを実行に移すにはさまざまな関門が存在する。

そもそも一般に知られていない彼らに抱き込みなどかけられないのだ。また、彼らはあくまでトップの一つ下、本来ならば理事会からのアクションに恐怖し誰も手が出せなかったのだ。

だが、理想郷の者達は一般的には知られていないはずの表のトップを知っており、なおかつ理事会の面々がそうそう手を出さない事も知っていた。

“スクール” 学園都市における暗部の代名詞であり、最大かつ最強の派閥である。

スクール本来の構成員は四名とされているがその下部組織 掃除屋こと“キャンパス”と花火師こと“スタッフ”の戦力は学園都市における最大戦力である。

そしてなにより、その下部組織を纏め上げ、なおかつ国程度ならば一夜で滅ぼせるともまで云われた超能力者 垣根帝督。

一方通行が“最強”の能力者ならば、垣根帝督は“最優”にして“災厄”。

そして、そのスクールが経営しているのが“遊郭”なのだから、そう易々と手など出せないのである。

そう、アルカディア“遊郭”とはスクールの資金源である。

巨大な組織には金がかかるのだ。維持費だけでも相当な額になってしまふのだから。

故に、理想郷。風俗ビジネスがまったく開拓されていないことに垣根帝督が目をつけて生み出された金の実る木である。

そしてなにも金だけが目的というわけでもない。

巨大な組織には金もかかるが、構成員達の不満もまた、増えやすいものなのである。

そのため、垣根帝督はキャンパスの女性構成員を男性構成員に対する慰安に充てていたが、それを理想郷の娼婦達の役割に変えたのだ。またそれを望まぬ者 垣根帝督のような偏屈者 たちや女性構

成員に対しては金銭ボーナスを与えるなどし、組織の安定化を図った結果、スクールはそれなりに安定した組織と成りつつあった。

だが、それでも反逆の芽は潰えないものである。

「アルカディア幻想悦楽”、ねえ……」

偶然、ではないだろう。何故なら“遊郭”とは快楽を売り、“幻想悦楽”とはその名の通り悦楽を売るのだから。

「ええ、最近スキルアウトの連中や一部の暗部に出回っているみたいよ」

「……暗部にもだと？」

スキルアウト　いわゆる不良因子であり基本的には無能力者により構成される無法の集団である。

基本的に学園都市で行われる破壊行為は大抵がこのスキルアウトの仕業と云っていいだろう。暗部による迎撃によってもまた破壊されることもあるが、学園都市内部での戦闘など早々起きるものではないのだ。

故に、だろう。麻薬という類につき物である“違法”というレッテルに憧れるようなアホが多いのだ。

売春、暴行、薬物。その程度の事で動くほどに垣根帝督は暇ではない。だが、今回の場合は話が違った。

「どう考えても狙ってるな、うちを」

「ええ、狙ってるわね」

“遊郭”は安定した収入源である。だがそれは、綱渡りの安定でもあるのだ。

そう、あまり大きな火種を残せば、理事会が動いてしまうのだから。「今現在で“遊郭”に害すると思しき組織は？」

帝督の言葉に頷き、ドライは数瞬思索してから答えた。

「まずアイテムね、彼女達は上からの指令で“遊郭”を警戒対象にしてみたいよ」

「ほう……あのいけ好かない女共が、ねえ」

「ええ、私すごく同情するわ」

「まあ今はうちの頼んだ仕事に専念してくれるだろうよ」

恐らくは理事会の内でもまだマトモな部類の人間、もしくは“遊郭”の吸収をもくろむ類の輩であろう。

“遊郭”はその規模ゆえに収入も多いが敵も多いのである。

「後はグループもね、といってもあそこはまだ大したことないのだけれどね」

「たしかにな、一方通行も誰もいないし、な」

おそらくまだ代わりしてないのだろう、あるいは

「俺達が先代を引退にするのかもな」

大いにありうることである。本来暗部同士の潰し合いはそうそう起こるものではない。

なぜなら暗部は基本的に理事会直轄の部隊であるが故に、ぶつかることはそうそうないのだ。

理事会内部のヒビさえなければ、だが。

「とりあえず貴方は忙しそうだから指示はこっちで出しておいたわ」

「ああ、まず間違いなく俺が出ることになるからな。そっちは頼むぞ、ドライ」

クスリ、とドライは一つ、笑みをこぼして跪く。

「了解、我が主」

そうして、己の身体を帝督のソレと、まったく同じに作り変えてからドライは帝督の元を去った。

ドライは思考する。己がもっとも優先すべき存在の事を。

自己否定と自己嫌悪の塊、それがドライの想い人の在り方であった。

「……………帝督？」

ふと、声が響く。黒川梓　いや、この場この時ならば心理定規と呼ぶべきだろう。ドライはそう思考し、返答をする。

「ああ、なんだ。心理定規」

「……貴方、誰？　いや、貴方……何？」

怪訝な顔をして問う心理定規に、帝督改めドライは驚愕の視線を向ける。

（私の擬態が、効いていない？）

ドライの能力、それは肉体創造という。身体を作り変えて誰かに成ります、もしくは誰でもない誰かになることも可能になるという“謀略”に秀でた能力だ。

ドライに求められたものが“智謀”であるのだから、何故斯様な能力が与えられたのかもわかるというものである。

交渉の類を任されているドライ、故に擬態の能力なのだ。人に与える第一印象は物腰と容姿により決定する。そして交渉において第一印象というものがどれだけ強い手札となるか、垣根帝督は心得ていたのだ。

それにそもそもドライの擬態、つまり成りすましであるがこれは擬態する人物へのプロファイリングにより出来が変わる。つまり智謀に長けたものでなくては、そもそも扱えぬ代物なのだ。

擬態する対象の事を知らねば擬態出来ぬのは当然である。だが同時に、智謀を司るということは武力がないということでもある。

彼ら九つの切り札、九人の道化の基礎スペックの容量は一部除き同じ。つまりドライは知略に多くのキャパシティが振り分けられている分、武力に振り分けられているキャパシティが少ないのだ。

彼女の誰かに成りすます擬態は、有用かつ有能ではあるが決して強度のある能力ではないのだ。

故にこそ、彼女にとって切り札であり唯一の武装といえる擬態、自身がもつとも自信を持って“完全なまでに同じ”に作り変えたこの身体を、偽物だと見破られる。

これは、少なからずドライに衝撃を与えた。

その思考の時間を見て、梓は完全にドライの事を垣根帝督ではない、と見破ったのだろう。不敵な笑みを浮かべて言った。

「貴方、いったい誰の許可を得てその姿をしているのかしら？」

笑みを浮かべてはいるが、その瞳にあるのは怒り一色、よほど気に入らなかったのだろう、その瞳の色を見て、ドライはすぐさま“垣根帝督”であることをやめ、“ドライ”へと変貌する。

絹のように光を反射する金髪、澄んだ宝石のような碧眼、モデルのように整った黄金比のプロポーシオン。ドライが普段している“擬態”である。

その変貌に目を見開き驚く梓、その姿を見て自身の変貌を見破ったことへの溜飲はいささか下がったのだろうドライが、跪きながらも嗤った。

「失礼致しました、姫君。私はマスター、垣根帝督様の私兵であるドライと申します」

その跪く様を見て、梓は能面のように表情を凍てつかせ、吼えた。

「……気に入らない、気に入らない、気に入らない！」
癪癪、であった。

肥大した嫉妬、であったのだろう。己を差し置き、ともすれば一瞬見まごう程に垣根帝督に成りすます　すなわち垣根帝督を知り尽くしたドライに、黒川梓は嫉妬した。

そしてなにより、それだけ知り尽くしていながら、何ゆえ彼を愛さぬのか

ともすれば、というより完全なまでのわがままである。だがそのわがまは、そのまま彼女にとっての垣根帝督への愛に繋がっているのだ。

そして、なによりも誰かに擬態するドライが、その程度の心情読めぬはずもなかった。

だから、彼女は内心ほくそ笑む。ああどうだ、お前の愛するあの男、私のほうがよく知っている。

女としての優越感、作られた存在であるのにもかかわらず、ドライはひどく女であった。

それを、同じ女であるがゆえに感じ取った梓は、怒り心頭のままにドライの顔面を蹴り飛ばした。

非力な女の一撃　などと侮ることなかれ、梓はそれなりに訓練していた。

ガコツ、と。とても少女の細脚の蹴りとは思えぬ音を響かせたその一撃は、ドライの体を仰け反らせた。

「ぐっ……はっ」

思考を一瞬痛みに囚われ、そしてすぐさま愉悦へと繋ぐドライ。その様を見て梓は苦々しく、毒々しく、そして憎悪に身を焦がし吼えた。

「私は貴様を認めない、ああ、認められない。死ねよ、去ねよ！今すぐ消えうせる！」

鬼の形相とはこのことであろう。憎悪と憤怒のない交ぜが、ドライの心根を一瞬とはいえ凍てつかせた。

愉悦のままに、ドライは恭しく頭を垂れ言う。

「かしこまりました、姫君」

慇懃無礼、傍若無人、唯我独尊。

そのまますたと歩き去る後姿を認めて、梓は再び呪を吐いた。

「死ね……死ね……死ね……」

まず間違いない狂していた。何が彼女をこうしていたのか、それは先のドライの擬態によるものであった。

あまりにも似ていた、あまりにも擬態していた。故に、彼女ですら

一瞬見紛うたのだ。

それは垣根帝督を愛する梓にとって、最大の屈辱。一瞬とはいえ己の愛を、唾棄すべき他者に与えてしまったのである。

その事実には彼女は怒り狂っていたのだ。ああなんといことだろう、私は彼以外を愛してしまった。

許せない、許せない、許せない。

どうしてこんな想いをしなければならぬ、どうして私の愛が彼以外に捧げられてしまったのだ？

ああ、まず間違いなくあの輩の責任だ。

許さない、許さない、許さない。

うわごとのように呟きながら、梓は一人自室へ戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0069p/>

とある科学の未元物質

2011年10月14日05時56分発行